

慈しみの愛

横井 秀治

はじめに

ゴメル夫人と初めて会ったのは、ドイツ北部地方に位置する福祉の街ベーターテルだった。私が二十八歳の時だった。その際の印象はとても深く、この方が自分の義母になるだろうと思った。と、その通りになった。

彼女は多くを語る人ではなく、どちらかと言うと物静かで、人と会う時はいつも笑顔を見かけていた。その笑顔がまた素晴らしく、と同時に、話すことには心がこもっているのだった。

和顔愛語という語があるが、それはまさに彼女にぴったり合うだろう。彼女の傍にいと、こちらが自然と和んだ気持ちになって、心が調和してくるのだから。

その義母から、毎日の生活を通して多くのことを学んだように思う。そのなかでも、とくに、彼女の示す人への、自然への「愛する心」は強いものがあって、魅せられ、自分も義母のように自然を、人を思いやることができるように心がけるようになった。が、そうは言っても、それを具現していくことは、そう容易でないことも知った。

しかし、年を重ねるにしたがい、その心が生きていくなかで、根源的なものとなって、大きな意味をもたらしてきたので、努めようとはした。

人生に疑問を抱き、暗くなったり、投げ遣りにならずに、ひたすら「愛する心」を持ち続けていけば、新たな希望とエネルギーを生み、私を支え励ましてくれたのもたしかだった。

人が生きていく道は、皆それぞれ異なるが、真心を込めて歩んでいくとなると、この愛する心で生きていくことが、最も大切なのを義母から教わったようになった。

多分そこには、障がいのある娘を「愛する心」と「我慢する心」で育て、それが彼女の穏やかさを生んだように私には思えるのだ。と言うのも、自分にもダウン症の息子がいて、彼と暮らすなかで、その二つの心がつねに作用しあいながら、よろこびを見つけたことができていたのだから。

なにごとにも、感謝の気持ちで暮らしている義母の姿を見ると、それが彼女を自由にさせ、平安にさせているように映るのだった。

年を取っていくことはマイナス面ばかりでなく、義母を通して、老いの輝きもあることを知ったのである。

ここに載せたエピソードの数々は、私たち家族と義母との交流を綴ったものとなっている。

目次

- 第一章 スイス・アルプスから戻る
- 第二章 病院から自宅介護へ
- 第三章 出合い
- 第四章 中世の家並みと石畳の街
- 第五章 ミヒヤエルの誕生
- 第六章 おもちやライブラリーと九さん
- 第七章 義母と再会する
- 第八章 三世代一緒に暮らし
- 第九章 東ドイツへの旅
- 第十章 壁が崩壊した日に
- 第十一章 春の一日
- 第十二章 八十歳の誕生日
- 第十三章 愛でる心
- 第十四章 耳を澄ます義母
- 第十五章 故郷へ
- 第十六章 ローソクの炎
- 第十七章 ダンケシェーン

第一章 スイス・アルプスから戻る

「眠ってはいけない、眠ってはいけない」
頭のなかで何度もそう言い聞かせながら、真夜中の高速道路を速度百三十キロメートルで走り続けた。

何台もの車が、猛スピードで追い越していく。それらの車が、霞んで見えはじめた。異常に高ぶった神経と今日の山歩きの疲れとで、瞼が重たくなり出した。と、その時だった。「車を止めて、すこし休んだほうがいいわ」

まるで義母のような声に驚き、ハンドルをしっかりと握りしめながら、
「いや、もう少しでチュービンゲンに着くから、このまま走り続ける」
と、応えた。

義母が危篤だという知らせを受けたのは、私たち家族三人がスイスで夏の休暇を過ごして五日目のことだった。

アルプスの山麓にある小さなユーフ村（標高二二二六m）を、昨日と同様に八時前に出発する。

あたりは朝霧が、まだ立ち込めていた。が、数分もすると、それらが飛び散り、山の裾野に広がっていた緑の草原が、くつきりと見えはじめてくる。

上を仰ぐと、透いた青空である。うしろを振り返ると、私たちが宿泊している山荘の赤っぽい屋根が、朝日の照り返しで輝いている。

朝の爽涼な大気を吸いながら、山へと続く緩やかな土道をゆっくりと進んだ。
少しすると、村からかなり離れたところにポツンと建つ農家の建物が見えた。

私たちは立ち止まった。黒ずんだ母屋に隣接している牛舎前には、赤いセーターに青い吊るしの半ズボンをはいた十二歳くらいの少年、それと茶色の厚ぼったい野良着に身を包んだおばあさんが手に棒を持ち、数頭の牛を追い出していた。これから牛たちを山へ連れ出すのだろう。山村農家の一日がはじまりだ。

さらに行くと、カランカランと音を響かせながら、草を食んでいる牛たちの群れに出遭う。七十頭はいるだろうか。

その牛たちを引き連れているのは、片眼がキラキラ輝く二匹の犬と、頬が赤く染まった十五歳くらいの娘である。彼女がピーと口笛を吹くと、二匹の犬はきびきびとした動きで、群れから離れた牛を追いかけて群に戻している。犬たちは、少女の手足となって働いていた。

牛たちと一緒に歩くことになった。妻のゲルトルートは彼らを恐れて近寄らないでいたが、息子のミヒヤエルは気にすることもなく、群れの真ん中を歩いていた。三ヶ月前に十九歳になったダウン症の彼は、小さい頃、犬に咬まれたことがあって、どんな小さな犬を見ても恐ろしがって近寄らないが、牛は平気なようだ。

彼と肩を並べて歩いていると、前にいた茶色と白のまだらな牛が尻尾を振りながら立ち止まり、私たち二人に大きな目をギロリと向けた。ミヒヤエルがその牛のお尻に手を伸ばし、ほんの少し触った。と、そのところがピクピクと動いた。

十分ほどすると、二股道となった。牛たちはかなり急な登りへ、私たちはさらに傾斜の

緩やかな道へ進んだ。

人の姿をまったく見かけなくなった。空はもう澄み切った青色に変わっていた。絶好の登山日和である。これからのようなアルプス光景が目の前に展開してくるのだろうかと思像するだけで、私の胸は弾んでいた。

しばらくの間、緑の草原のなかをゆっくりと歩き続けた。と、板で造られた小さな小屋前に出た。夏の三ヶ月間、牧夫が牛の世話をしながらミルクを搾ったり、チーズを作ったりするところだ。

その小屋近くで、黒色チョッキを身につけた牧夫が背丈ほどの長い鎌を持って、膝まで伸びている草を刈っていたので、声をかけた。

「先ほどまで、七十頭ほどの牛の群れと一緒に歩いていました。あの牛たちを飼っているのは、あなたなのですか」

「いや、違うな。わしのは、ほれ！」

牧夫は、向こうの山の中腹のところを指差した。

「ああ、あそこに牛たちがいる。人の姿も見える」

「あれは息子だ」

牧夫は長い鎌の刃を石で研ぎながら、私たちに話し出した。

「以前は、この谷に住んでいた若者たちは、皆街に出て行ってしまい、帰ってこなかったが、今はその反対に、ここに戻って暮らすようになった」

「それはいいですね」

「うん、そうだ」

そう言うてから、牧夫はミヒヤエルに、

「搾りたてのミルクがあるから、飲んでみるか」

と、訊いた。彼が「うん」と答えると、牧夫は釜を草の上に置いてから小屋へ向かった。

私たちは丸太で造られた椅子に座り、牧夫が牛の乳を持ってくるのを待った。

一分もしないうちに、牧夫がミルクの入った三つのコップを持って小屋から出てきた。

一口飲むと、街で飲む牛乳とはまったく違う味である。それも生暖かいのだ。喉が渴いていた妻とミヒヤエルは、「オイシイ、オイシイ」と連発しながら飲み干した。

乳の代金を払おうとすると、牧夫は手を横に振ったが、五フランを机の上に置き、礼をのべてから再び歩き出した。

牛の乳の匂いとねばねばが口に残り、牛の糞が微かに漂うなかの歩きとなった。陽は次第に高くなり、顔から汗が滲み出てくるようになった。

隣にいた妻に、話しかけた。

「このような自然豊かな地で育った青年なら、一度は街に出ても、ここに戻ってくる気持ちにはわかるな」

「そうね。とくに、あなたのように自然が好きな人には、ここの生活があっているかも知れないわね」

「でも、そうなると、三世代が一緒に住むことになるな」

「お互いに農作業という同じ目的があるなら、協力し合えるし、いいのではない。わたしたちだつて三世代同居だし、母とミヒヤエル、それにあなたとの関係は良いし」

「でも、お母さんと一緒に住むようになったころは、何かと考えさせられたな」

「あなたは家を出て、数日間戻らなかったこともあったわね」

「うん、あの時期は悩んだ。でも、お母さんの毎日の姿を見ているうちに、考えは変わったな。それに、主夫という自分の存在に意味を見出したからね。あれから、もう十三年が過ぎたのか」

さらに三十分ほど行くと、飛沫を上げながら勢よく流れている幅四メートルほどの沢に出遭った。橋がないと渡れないほどの速い水の流れである。それは、（あなたがたの山歩きはここまでにしておきなさい。これ以上先へ進むのは止めなさい）と忠告しているかのようでもあった。そんなことはない、地図にも登山道は記されていることだし、どこかに渡れそうなどころがあるはずだと思いながら、あたりを見回した。すると、三十メートル先に小さな木橋が架かっているのが目に入った。

その橋まで行き、バランスの取り方がぎこちないミヒヤエルの手を握りながら、慎重に渡った。

いよいよ本格的な登り道となった。かなりの急傾斜だ。日射が強烈になり、額から汗が噴出してくるようになった。妻は盛んにハンカチで顔を拭いていた。

少しして、立ち止まると、下の沢から冷たい湿った風が湯気の立っている体を撫でていくのである。なんと気持ちがいいのだ。時々、立ち止まっては、また登り続けた。

少しすると、妻がハアハアと息を切らせながら声を出した。

「お昼にしてはどうかしら。お腹が減ってきたわ」

「歩き出して、もう三時間が過ぎたのか」
そう言うてから、ミヒヤエルのほうを見た。彼は手で額の汗を拭きながら、にっこりした。そこで、見晴らしのいい場所を探し、朝握ってきた梅干しとカツオ入りのおむすびを食べることにした。

リュックから取り出したおにぎりを、食いつくように口に入れる私たち。山登りでのこの味は格別だ。眼下には、今登ってきた山道が草原のなかを蛇行しながら走り、遠くには雪の峰々が白銀のように連なっている。それを眺めながらの昼食である。

おにぎりを食べ終え、リンゴを口に入れていた時だった。ミヒヤエルが自分のリンゴを手から落としてしまった。コロコロと転がっていくのを追いかけた妻だったが、下の沢の流れに入ってしまったようで、がっかりしながら戻ってきて、真面目な顔で言った。

「たぶん、リンゴはライン川の小さな支流の水に乗って、流れ流れてドイツとスイスの国境に横たわるボーデン湖までたどり着くと思うわ」

「うん、そうだろう」

私も真顔で合槌を打った。

山のなかでの会話は面白いものだ。たとえ冗談で話したことで、人の言うことはその通りだと思えるようになるからだ。それは自然のなかにいると、時と動きが自分と共振し合っている、自分の心が浄化して純粹となり、人のことばも素直にその通りに受け入れてしまうのである。

一時間ほどの昼食を済ませ、再び急配の登山道を這うようにして登った。

日射しは強く、鼻先からは汗がしたり落ちてくるようになった。さらに高度をグングンと上げて行くと、乗越しのところに出た。と、サッカー場ほどはあるだろう湿原地に、高山植物の花が色とりどりに咲き乱れているのが前面に見えた。花に優しく迎えられたよ

うな気持となった。もし人間が楽園を想像するなら、このようなところだろう。

湿原の奥には、残雪で覆われた三〇〇〇メートルの峰々が角を立てたように聳え、まさに岩と雪と花の大パノラマだ。これから、さらに登り続けようとしたが、この景観にすっかり魅せられてしまい、妻と話し合い、ここでしばらく休むことにした。

山靴を脱ぎ、柔らかい草の上で仰向けになった。と、前に聳え立つ高峰の雪渓から吹き出してくる涼しい風が、体を渡っていくのである。目を閉じ続けていると、山の静寂に吸い込まれ、大自然に包まれたようになり、ウトウトとなり出した。

ふと、目を開けると、妻とミヒヤエルが雪渓から流れ出た水の上に、草船を浮かべて遊んでいるのが見えた。

その二人のところに寄ると、日に焼けて鼻が赤くなっていた妻が、

「入院中の母に、このような景色を見せたいわね」

と、まわりの光景を見ながら言った。

「そうだね。お母さんと一緒に住むようになってから、毎夏三人でスイスの山々に来ていたが、彼女とは一度もなかったからね。せめてここの写真を撮って、それを観せることにしよう」

どこを写しても、絵になる風景にレンズもよるこんでいるのがわかる。

二時間があつという間に過ぎていった。私たちはさらに進む予定だったが、山の午後は天気が安定しないので、登ってきた山道を引き返すことにした。健脚の足なら二時間半の下りだが、ミヒヤエルと一緒になので、四時間は計算しなければならぬ。

彼は母の歌に合わせて、楽しそうに歩いていった。遠くから近くから、カウベルのカランカランとした澄んだ音が風に乗って聞こえてくる。そちらへ視線を向けると、放牛たちが草を食んでいた。なんと長閑な眺めなのだろう。

まわりの草原には、数知れぬ高山植物が誇ったように咲いている。紫色の小さなリンドウや鉄帽子、それに白い色のマーガレットとアネモス、黄色のアルペンモーアと赤色のアザミ、どの花も色鮮やかだ。アルプスの山々を飾る花々だ。力強さを秘め、気高いまでの気品を備えている可憐な花々である。花好きな妻は足を止めては、それらを見つめては歩いていた。

草の香りと土の柔らかい道を踏み続けていると、体が自然と浮いたようになって、心が弾み通しである。二人も同じような気持ちだろう。時々、兎よりもいくらか大きいアルプスマーモットがキーキーと鳴いているのが耳に入ってくる。その方向に目をやると、うる足二本で、ちよこんと立ちながらこちらを見ているではないか。

再びユーフ村に戻ると、太陽はもう山の奥に沈みはじめ、あたり一面は茜色に染まっていた。いつもより長い山行のため、三人とも疲れ切っていた。が、快い疲れでもあった。

ミヒヤエルと妻がシャワーを浴びている間に、私は夕食の仕度に取りかかった。

一時間して、できあがった料理を食べていると、玄関の戸を叩く音が聞こえた。妻が椅子から立ち上がり、早足でそのほうへ向かった。

五分が過ぎたが、戻ってこない。気になり、玄関先に出ると、彼女と貸山荘の女将であるマイヤー夫人とが話をしていた。その二人に近づいた。

「どうした？」

深刻そうな顔となっている彼女の目を見ながら、訊いた。

「兄がマイヤー夫人宅に電話をかけて、母の病状が急に悪化したと伝えたのよ。兄は、私たちがすぐに帰るようには言わなかったようだけれど」

それを聴くや、体内に電気のようなものが走った。妻は私の顔を見つめている。その彼女に、

「とにかく、これからお母さんのところへ行こう。一刻も早いほうがいい！」

と、急に熱くなった声で言った。彼女はすぐに肯いた。(まさか)と思っていたことが現実となり、彼女の心が乱れているのがわかる。それは私も同じだった。

妻は居間に戻り、今も皿に盛ったパスタを食べ続けているミヒヤエルに、

「これからすぐにテュービンゲンへ戻るわよ。おばあさんの具合が急に悪くなったのよ」

と、ゆっくりわかるように話した。彼は母の顔を見ながら、

「おばあさん おばあさん」

と、同じ単語を何度も繰り返した。ダウン症のなかでも障がいの発達がかなり重たいので、どこまで妻が言ったことを理解したかわからない。が、おばあさんのところへ帰るのであれしそうな表情を浮かべた。

彼はかれなりのやり方で、またマイヤー夫人も室内の持ち物をまとめるのに手伝ってくれる。それらを車に詰め込んで腕時計をのぞくと、十時過ぎである。手を伸ばせば、星に届きそうな夜空の下、テュービンゲンへ向けて走り出した。

秘境の地であるユーフは、ライン川支流のそのまた支流の最奥にある小さな村である。深い溪谷に沿った狭い道なので、ハンドルを少しでも間違えれば、谷底まで一気に落ちてしまうだろう。

「暗いので、気をつけてゆっくり、ゆっくり走って！」

助手席に座っている妻が、語を区切るようにして何度も言った。

「ここで事故にあったら、大変だ。大丈夫、慎重に走る」

カーブの多い道も終わりとなった。

「今回、休暇を取ってここに来るべきではなかったね」

「でもね、ヒデジ、病院で母とも話をしたでしょ。母は自分で食事を摂れるようにもなったし、私たちに『行っておいで』とにっこりした顔で言ったでしょ。兄たちも私たちが毎日病院通いをしていたから、休暇を取るようにと勧めてくれたし」

「そうだけれど。それにしても、お母さんに何が起こったのだろう？」

「兄と直接話をしていないからわからないわ。とにかく運転気をつけてね。あなたは相当疲れているから、わたしから絶えず話しかけていくわよ」

落ち着いた彼女の声以外にも思えた。心がさらに乱れているだろうと想像していたのだが、心が乱れていたのは、むしろ私のほうだった。

緊張した三十分の溪谷の道も終り、スイスの高速道路に入った。と、今度は単調な運転となった。それにつれて、睡魔が襲ってくるようになった。

後部座席では、ユーフ村を出てから直ぐに寝入ったミヒヤエルが、今は深い眠りのなかである。今日歩いてきた山の光景を再び夢のなかで見ているのだろう。

妻が盛んに話しかけてくるのに応じながらの運転である。

スイスからドイツの高速道路に入ると、妻も今日の山行の疲れが出てきたようで、ことば数が少なくなった。ライトに照らされる一点を見つめながら、

「眠ってはいけない、眠ってはいけない」
と、自分に言い聞かせながら走り続けた。
テュービンゲンまで、あと二十キロの標識が目に入った。

第二章 病院から自宅介護へ

家の裏にある駐車場に車を停めてから腕時計をのぞくと、午前三時過ぎである。後席ではミヒヤエルがぐっすりと眠り込んでいる。その彼を揺り起こし、家に入り、ベッドに運んだ。

彼が寝入ったのを見届けてから、妻は病院へ行く仕度をはじめた。

「ミヒヤエルは朝まで眠っているわ。これから、わたしひとりで病院へ行くわ。あなたは、彼が目を覚ましたら一緒に来てね」

「でも、こんな真夜中にバスは走っていないし、歩いたら四十分はかかるぞ。車で病院まで連れていくよ」

「あなたは相当疲れているわ。それに、ミヒヤエルが目を覚ましたとき、誰かがいないといけないわ。自転車だと十分で着くから」

「わかった。お母さんが危ない状態だったら、すぐに電話をしてくれ」

彼女が家を出てからベッドに入ったのだが、義母の容体が気になってなかなか寝入ることができない。それでも二時間ほどウトウトとしたらうか、浅い眠りのまま目が覚めた。ちようど近くの教会の鐘が七つを打ち出した、その耳にしながらベッドから身を起し、ミヒヤエルの部屋に行つてカーテンを開けた。と、彼は目を覚まし、あたりをキョロキョロと見回した。自分がどこにいるか不思議そうな顔である。

「ミヒヤエル、ぐっすり眠ったようだね。もうテュービンゲンの君の部屋だよ。これから朝食を摂つてから、おばあさんのところへ行くからね」

「おばあさん ママ どこ？」

「ママは病院のおばあさんのところにいるよ。ミヒヤエルもおばあさんに早く会いたいだろう？」

「うん おばあさん」

彼はそう声を出してから、ベッドから出た。

二人で朝食の準備に取りかかった。さいわいユーフ村で買ったパンがあったので、それにジャムを塗り、紅茶を飲んでから直ぐに病院へ向かった。

入院患者百名ほどの病院は、玄関がそう広くないために受付の人とかならず目が合う。三週間半前に、義母が入院してから私たち家族は毎日通い続けていたので、受付の人たちはこちらのことをよく知っていた。

「休暇はどうだった？」

いつもの若い女性がミヒヤエルに声をかけた。彼は、「うん」と応えてから奥へ進んだ。人と会う時はいつも手を上げてにこにこしている彼だったが、今は違っていた。

二階の病室のドアを開けてから、ベッドで横たわっている義母のところへ寄った。と、

ミヒヤエルが、「おばあさん！」といつもより高い声で呼びかけた。しかし、彼女は深く眠ったままである。頭の上には二つのピンがぶら下がり、鼻には管が入っていた。重篤な状態だと一目でわかった。

義母の顔をしばらく見続けたあと、ベッドサイドに座っていた妻とミヒヤエルを連れて病室を出て、廊下にあつた長椅子に腰かけた。

妻が、話し出すのを待った。

「三日前から肺炎に罹ったようで、非常に高い熱が出たらしいわ。でも、抗生物質を飲んでから、落ち着いたと看護師さんが話してくれたわ。お医者さんとはまだ会っていないけれど、一時間したら説明してもらうことになっているわ。兄たちとは、電話でもう話をしたわ。とにかく、あなたもお医者さんの話を一緒に聞いて」

「もちろん。でも、よかつたよ、命にかかわる状態でなくて」

「でもね、わたしに話してくれた看護師さんが変なことも言ったのよ」

「変なこと？」

「ええ、肺炎になってから、急に薬も食べ物も摂らなくなってしまったらしいの。看護師さんが言うには、自分で決めているらしいと。それに、頭の働きが低下したともつけ加えたわ」

妻の顔に影が差した。

「おかしいな。私たちがスイスへ行く前には、薬も飲んでいたし、食べ物も自分で摂るようにもなっていたのに」

その看護師が言ったことを、打ち消そうとした。しかし、経験のある看護師が理由もなく、そのようなことを口に出すはずもないだろうとも思った。

「本当だろうか」

妻は黙っていた。

しばらくして、なおも母の手を握り続けている彼女に訊いた。

「お母さんと、もう話をすることはできたの？」

「ええ、二時間前に母はうつすらと目を開けて、わたしの顔を見たわ。でも、またすぐに眠りはじめたわ」

妻は、今度は二人の兄たちが見舞いに来ていたことなどを語り出した。それを聴いてから、私たち三人は再び病室に戻った。

二人部屋なのだが、義母の病状が悪化したので、今はベッド一つだけである。睡眠をとっていない妻は、かなり疲れ切った様子で椅子に座り、私たちが家から持ってきたパンを口に入れながら、ミヒヤエルと話をしていた。

一時間が過ぎた時だった。義母が目を開けたので、直ぐに声を高くして、
「目を覚ましたようだ」

と、妻に呼びかけた。彼女は急いでベッドに駆け寄り、

「お母さん、私たちはここにいますよ。スイスから帰って来ましたよ」

と、母の手を握りながら言った。義母は、娘の顔をじっと見つめた。隣にいたミヒヤエルが、

「おばあさん おばあさん」

と声を上げると、彼女はゆっくりとミヒヤエルのほうに顔を向け、いつもの優しい笑顔

を浮かべた。私たちが来たことはわかったようだ。その彼女に、

「お母さん、気分はどうですか」

と訊くと、何も応えないまま、再び眠り出した。ちょうどその時、顔馴染みの看護師がドアを開けて入ってきた。

「主治医が待っていますから、こちらに来てください」

彼女に連れられてドクターが待つ室に入った。

「いやー、帰ってきましたね」

そう言っ、立襟の白衣を着た四十代前半のいつもの医師が、私たち一人ひとりに手を伸ばしてきた。四週間前にこの医師と初めて握手をした時、こんなにも柔らかい手があるのかと思ったほどだった。そのドクターに、昨晚スイスの山麓の村ユーフを発つて五時間近くかけてテュービンゲンに戻ったことを手短かに話した。学生時代に東京の大学で実習をしたことのあった彼は、にこにこしながら聴いていた。

そのドクターに妻が、

「私たちがスイスの山へ行くときは、一人でも食事を摂っていたのに、肺炎に罹ったと看護師から聞きました。どうしたのでしょうか」

と、訊いた。

「二日前に肺炎に罹り、高熱となったので、抗生物質を投与しました。今は熱も下がり、落ち着きましたが、心臓の機能がかなり低下しています。そのうえ、四週間前に入院した時点よりも、脳の血管障害がかなり進行しています。あす、何が起ころうともおかしくない状態です」

ドクターは妻の目を正視しながら、さらに続けた。

「お母さんは八十七歳の高齢で心臓も弱く、手術するには危険が大き過ぎます。わたしが親族の方々と話をしたとき、お母さんは延命治療を希望していませんとおっしゃいましたね」

「ええ、母は以前からそう言っておりました」

ドクターは静かに肯いた。

それを見た時、義母の命はあとわずかなのだろうかと思つた。と同時に、看護師が話した「薬も食事も急に摂らなくなって、自分で決めているらしい」とのが浮かんできるのでした。そうなのだろうか。しかし、今、この場でそのことをドクターに訊ねる勇氣はない。それとドクターがどのようなことを言うのかを恐ろしくて、口を噤み続けた。妻は沈思しながら、床の一点を見つめていた。その彼女に、

「とにかく、熱が下がったことだし」

と言っ、肩に手を置いた。彼女の顔を見ると、私と同様に「決めているようです」とのことを思っているように見えた。また、そのことを今ドクターに訊ねる勇氣も、彼女にもないようで、なおも床に目を向けていた。その彼女に、

「とにかく熱も下がってきて、私たちのことがわかったようだし、よかつたね。ありがたいことだ。ミヒヤエルの声も聞こえただろうし」

と言っ、妻は、

「そうね」

と低い声を出し、私の顔を見つめて肯いた。

私たちの会話を聴いていたドクターが、私と妻を交互に見ながら、

「今後のことは、一週間して、お母さんの症状をみてから決めましょう」

と言ひ、今度はミヒヤエルのほうに顔を向けた。

「スイスの山はどうだった？」

彼はそれには答えずに、「おばあさん おばあさん」と声を上げた。

翌日、妻は仕事を半日で終わらせてから、自転車に乗って以前のように毎日病院に通い出した。二人の義兄たちも、一日置きに病院に訪れるようになった。

義母はほんの少量の水分を自分で摂るようになり、会話らしきものがいくらかできるようになった。ただ、会話といっても脳の血管に障害があるので、話し方は以前とは違っていた。それと、時々、私たちが誰なのかといった表情を浮かべるようになった。それでも、私たちは彼女の傍で、少しでもことばを交わすことができるようになったのをよるんだ。点滴とわずかの水分をとるだけだったが、彼女の頬に赤みが出てきた。

それから一週間が過ぎ、今後の話し合いが小さなカンファレンス室で、主治医と二組の義兄夫婦と私たち夫婦とで持たれた。

ドクターが今の義母の病状について詳しい説明をはじめた。私たちはそれに耳を傾け続けた。ドクターがさらにのべた。

「お母さんがこの病院を出たあとのことですが、二つの可能性があります。一つは介護が百パーセントできる高齢者ホーム、もう一つは自宅での介護です。今のお母さんの病状からして、百パーセント介護が必要なので、それなりに設備の整った高齢者ホームがいいように思います」

そのあと、ドクターが次に何かを話そうとしたので、それを遮るようにして、

「もうそのことについては、妻と決めています」

と、隣にいる妻の手を握りながら言った。妻も、兄たちに懇願するような声を出した。「このことについては、数日前からヒデジと話しあっていたわ。ヒデジが自宅での介護を強く主張し、わたしも母の介護をどうしてもしたいわ。母は私たちとずっと一緒に暮らしてきたし、母の住み慣れた私たちの家で看たいの。いいでしょ？」

二人の兄たちは直ぐには返事をしなかった。が、少しすると、長兄のエアハルトが私と妻の目を正視しながら、

「ゲルトルートたちがそう決心しているなら、自宅での介護もよいだらう。自分たちも近くに住んでいるから、交替で見ていこう」

と、言った。私たちの会話を聴いていたドクターが、最後にのべた。

「みなさんの意見がそうなら、自宅での介護となりますね。この病院には、自宅介護に必要なことを相談する専門員がいますから、その人と話をしてください」

三十分ほどの話し合いが終わった。前日、妻と話し合って、「自宅で看よう」と彼女に伝えてあった。

家での介護が決まってから、妻は母の部屋を整えはじめた。陽が直接当たらないようなところに電動式ベッドを据えたり、母の好きなランの花を寝かせても見られるところに置いたりして、きめ細かい心配りをしていた。ミヒヤエルはおばあさんが戻ってくるので、うれしそうな表情を浮かべていた。私たちは彼女が帰ってくるのを待った。

病院からの寝台車が家の前で停まり、義母が部屋に運ばれてきた。私と妻とミヒヤエル、それに二組の義兄夫婦が、その様子を見守っていた。家から救急車で病院に運ばれて、四十日ぶりの帰宅である。

義母は自分のベッドに移されるや、声を少し高くして、

「ここはわたしの部屋ではないの。一体、どうしたの？」

と、私たち全員にわかるような高い声で、それもよろこばぬ表情で言った。その口調は意識のはっきりしたもので、病院での夢現の時とは違っていた。予想もなかった彼女の反応を見て、私たちは目を見合わせた。と、エアハルトが母にゆっくりと言いつき聞かせるように語りかけた。

「お母さん、自分の部屋に戻って来たのですよ。ここでゲルトルートとヒデジ、そしてわたしたちが見ていきますよ」

母は息子の顔を見続けていた。その彼女に、私たちが声を上げた。

「お母さんが帰ってきてうれしい」

それを聴いた義母は、私たちを見ながらにっこりした。その顔は白く痩せてはいたが、頬に赤みもあって、以前の義母の顔である。それを目にしてホッとした気持ちになった。しかし、それと同時に、彼女が自分の部屋に戻った際、なぜよろこばぬ表情を浮かべたのかとの考えが頭のなかで駆け巡った。

看護師が言った「決めているらしい」とのことだが、再び浮かんだ。それを、打ち消した。恐らくお母さんは自分で体を動かすことができず、寝返りも難しく、尿管がついたままで常時点滴を外せない状態では、子供たちへの負担が大きくなってしまふとの気遣いから、よろこばぬ顔をしたのだろうと思った。

それと言うのも、義母が入院していた際、彼女の最も親しい友人が見舞いに来た時、「皆が、幸せでいますように」と言ったのを聴いたからだ。と、その時だった、妻が寝ながらでも飲めるコップを、母の口元に運んだ。

「のどが渴いていない？ リンゴジュースの薄めたのがあるから、飲んでみない？」

彼女はそのコップをしばらく見つめてから、ジュースを一口飲んだ。

「なんて、おいしいの」

実に澄んだ声である。珍しく自分から何口か飲んだ。それを目にして、私たちはお互い顔を見合わせて微笑みあった。その様子を見て、飲んでくださいと心のなかでつぶやいた。

エアハルトの嫁であるクリスタが、義母に顔を近づけながら、

「家で飲む水はおいしいでしょう」

と語りかけると、彼女は窪んだ目を瞬かせたあと、再び眠り出した。私たちは部屋を出て、今後についての話し合いとなった。

妻が皆に紅茶を入れながら、

「今日の母の表情は、病院にいたときとは、すこし違うようにも見えたわ」

と言うと、クリスタが、

「自分の部屋はいいのよ。病院とは違って、住み慣れた家が一番いいのよ。体がそれを証明していたわ」

と、合槌を打った。

紅茶を飲み終えたエアハルトが、話し出した。

「今日のような状態が続いてくれればよいのだが。とにかく、退院するときも医師から、『あす、何が起こつても不思議でない』と告げられたし、誰かが常に母の傍にいなければならない。これからは皆で一日一日のローテーションを組んで、母を看ていこう」

私たちは肯いた。

クリスタがパンを食べているミヒヤエルに、同情した目つきで、

「おばあさんと遊ぶことができなくなってしまったわね」

と言うと、彼は私を見ながら「おばあさん　へや」と単語を並べた。その彼に、言った。

「これからは一人でおばあさんの部屋に入らないように。パパかママが一緒のときは、入っていいからね」

彼はわかったようで、隣に座っている母に顔を向け続けていた。

義兄たち夫婦が帰ったあと、妻はキッチンで食器を洗い出した。そのうしろ姿を見ながら話しかけた。

「家に戻ってきたとき、なぜお母さんは困惑したような顔をしたのだろうか」

妻は黙っていた。母のことを一番よく知っている彼女だ。もうこのことは、口に出さないことにしよう。

義母が自分の部屋で過ごすようになって二日目の夜、病院では毎日点滴をしていたのに、家に戻ってからはしてないのに疑問を持ち、妻に、

「お母さんは自分でいくらか水を飲むようになったけれど、食事はまったく摂っていないので、点滴をする必要があるのではないか」

と言うと、彼女も、

「わたしもそう思っていたの。なぜ、しないのかしら。明日の朝、介護センターから来る介護士に訊いてみるわ。変ね」

と、首を傾げた。

翌日、介護センターから派遣されてきた訪問介護士に、私たちは点滴について訊ねてみると、三十歳前後の赤い髪をした看護士は、

「病院からの伝達事項には、点滴については何も記されていないから」

と答え、直ぐに義母のホームドクターに電話をかけた。ドクターは「すぐに点滴をするように」と彼女に指示し、また点滴がはじまることになった。

その介護士が点滴の針を刺すのだが、腕の血管が狭くなっていたので、足からの注入である。痩せ細った足に針が刺されると、針だけが大きく見えるのだった。

一日に一リットルの点滴と、時々口からほんの少しの水分を飲む義母だった。水分を口に含むと、「ああ、おいしいわ」と潤んだ声を出した。それを聴くたびに、安堵感を覚えたと。しかし、コップを口にもっていても飲まない日も多くあった。そのような時は、次はぜひ飲んでくださいと願った。

肺炎がまだ治っていないのか、時々咳をした。その時は体が少し揺れるが、それ以外はまったく動かぬ状態である。そうなると床ずれが生じてしまうので、三時間置きに体の向きを変えねばならなかった。体位を変える時は辛そうにしていたが、私たちに合わせて体を動かしてくれた。その体位変えも介護士からやり方を教わり、何度か経験しているうちに、難なくできるようになった。

日中は寝て、夜はウトウトと目を覚まし、時々意識のない声で、「ハロー、ハロー」と

何かに向かつて呼びかける義母だった。もちろん、彼女は介護保険の最重度に認定されていたので、介護センターから一日に三回、一回につき一時間の割りりで介護士が訪れて、専門的な処置をしてくれた。しかし、水を飲ませたり、体位を変えたりするのは私たちの役割だった。夜は、四人がいつも交替で、眠らずに看ていた。

二人の義兄たちは私の家から車で四十分離れたところに住んでいた。平日は仕事を終えてから来て、翌朝職場へ向い、週末も泊まりがけで母を看っていたので、二週間が過ぎる頃になると、彼らの目の下に隈ができていた。

エアハルトは音楽好きで、バイオリンを上手に弾く。義母の部屋から、澄んだ音色が時々流れてくるのを何度か耳にした。また、学校の教師である次兄のディーターは、声を出して本を読んでいた。

妻は日中仕事をしていたので、義兄たちの食事を作るのはハウスマンである私の役割だった。献立には頭をいため、気をつかったが、彼らとより親しくなっていた。私たちは皆それぞれの仕方で彼女と接していた。

家に戻って、三週間が過ぎていった。いつもの介護士が来て、尿袋から尿を取り出し、義母の体を洗い、口のなかを脱脂綿で拭いてから点滴の針を足に刺した時だった。

「何をしたの」

と、義母は弱々しい声で訊いた。いつもはそのようなことは訊かない彼女だったが、はっきりとした意識があったのだろう。

「点滴の針を足にさしましたよ。なぜ点滴をしたか、わかっていますよね」

と介護士は言い、さらに、

「もし点滴を拒否したかったら、おっしゃってください」

と、義母の耳元でゆっくりわかるような声で言った。それを聴いた彼女は、静かに肯いた。

これを傍で介助しながら聴いていて、本人の意志を尊重している会話内容とはいえ、愕いた。お母さんの体はもう弱り切っているなかで、たとえ意識がはっきりしていたとはいえ、これほどの深刻な会話が、目の前で話されたことに、大きな衝撃を受けたのである。水分をほんの僅かしか取らない彼女にとって、点滴をしないとすることは、即、死を意味したからだった。

自分からたとえ死んでいくことを願っても、本当に心の底から死を望んでいる人はいないのではないかと考えを持つ私である。たとえそれを願ったとしても、理性とは別に感情的にはなかなか肯定できない。

介護師は一時間ほどいてから、

「また来ます」

と言うと、義母はか細い声で、

「ありがとう」

と、応えた。

仕事から戻ってきた妻に、この時の会話を話すと、彼女は何も言わず、直ぐに母のところへ行った。私も一緒である。

彼女は、部屋にあったランの花を義母に見せ、

「きれいに咲いているわね」

と言うと、義母は弱々しく目を開け、

「そうね」

と少し見てから、再び目を閉じた。

何も食わず、わずかな水分と点滴の毎日だったので、義母の体は少しずつ衰えていった。一カ月が過ぎた頃から、眠っているような時間が多くなり、夢をよく見ているのか、意識のない声を時々出すようになった。ベッドサイドにいた時のことである。

「上を開けて、上を開けて」

訴えるようにして何度もつぶやいているのを聞いた。それを耳にした時、信仰の篤い彼女から出たことばだと思った。その顔は和んでいた。

家に帰宅した妻に、そのことを話すと、彼女は寂しげな声で、

「わたしはそのようなことばを耳にしたことはないわ。母はこのところ、意識がまったくないわ」

と、言った。嫌な予感に襲われた。居間の壁に貼り付けてあるローテーション表を見た。

「今晚の泊まりはディーターか」

「ええ、そうよ。兄は夜の十時ごろに来て、明日も仕事があるので、朝の六時に家を出ると思うわ。わたしは、朝食を母の部屋で兄と摂るわ」

翌朝、妻は一階下の母の部屋に行き、兄を送り出してから私たちの居間に戻った。

「昨夜、兄は聴いたらしいの。母が二十五年前に亡くなった父の名前を何度も呼んだのを、今まで父の名前を口に出したことがなかったのに。それに、母のお母さんと亡くなった、わたしの姉の名前も呼んだらしいの。それから、咳も出て熱も上がったと言ったわ」

肩を落として涙ぐんだ声である。目尻には、涙の跡が残っていた。妻の顔をまともに見ることができない。

しばらくしてから、彼女に低い声で言った。

「また肺炎に罹ったのかな」

「そうかもしれないわ。心配だわ。母はここまでよく生きていると思うわ」

「そうだね。医者も看護師も心臓が弱い、彼女がここまで生きてるのが、奇跡だとも言っていたからね。私たちのために、お母さんは生きているのだよ」

「そうね。兄たちもそう思っているわ」

妻はハンカチを手にとって、何度も鼻をかんだ。その彼女に、何と声をかけてよいかわからず、テーブルの上に置いてあったティッシュを手渡した。

義母は意識のないなかでも、私たちの願いを叶えてくれているのだ。「共に」との思いで生きてくれているのだ。その心遣いに胸が打たれた。これが彼女なのだと思う。

その義母と初めて会話を交わしたのは、私がベーターテルにいた時だった。

第三章 出会い

教室内を見回すと、皆女性である。まもなく自分の番だ。もう一度これから言うことを

頭のなかで整理した。なんとかなるだろう。立ち上がった。

「わたしの名前は横井秀治です。二十八歳です、日本から二週間前にここベートルにやって来ました。日本では、知的障がいのある子供たちが住んでいる施設で働いていました」

さらにドイツ語で語ろうとしたのだが、二十三名の女性たちの視線を一斉に感じたので一瞬、ことばを失ってしまった。と、黒板前に座っていた先生が、彼女たちに話し出した。

「これから半年間、横井さんはこの教室で皆さんと一緒に学びます。彼は正規の研修生ではなく、聴講生です」

そう言ったあと、先生は私のほうを見た。

「そうですね、横井さん」

「はい、そうです。よろしく、お願いします」

三十歳前後の女性たちは、皆手で机をたたくて歓迎してくれる。その彼女たちに、外国人である私がなぜここで勉強したいのかを言おうとしたが、隣の人がもう立ち上がって話し出したので、止めにした。

これから机を並べて一緒に学ぼうとする彼女たちのほとんどが、幼稚園の保育士や看護師、それに社会福祉士たちである。今まで働いていた職場から離れて半年間、障がいのある子供たちを療育するための教育を学ぶために、ここ北ドイツ地方のベートルの治療専門学校に国内から集まって来たのである。皆、生き生きとした声で自分を語っていた。

一通りの自己紹介が終わったあと、この女性たちとこれからドイツ語での授業に、毎日ついていけるだろうかとの不安が走った。が、今からではあとに引けない。自分で希望したことだ。最後までやり通そうと言い聞かせた。それにしても、すべて女性なのに驚いたと同時に、多少うろたえた。

その二十三名のなかに、ドイツ南西の黒い森地方生まれのゲルトルート・ゴメルという幼稚園の保育士がいた。私の席の横にいつも座っていた女性だった。講義の内容が難しくなると、彼女からしばしば説明してもらおうようにもなった。

彼女の背丈は約百六十センチ、髪の毛はくり色、スカートがよく似合い、自転車によく乗っていた。その彼女と週末になると、しばしばベートル内の森を散歩をするようになった。

学校に通い出して三カ月が過ぎた頃になると、クラスの皆と溶け合うようになり、障がいのある人と一緒に暮らす、住民七千名のベートルでの生活にも慣れ出した。

そのようなある日、授業が終わり、ゲルトルートと一緒に歩いている時だった。彼女が立ち止まって、私の目を見ながら、

「隣の街の映画館で、今チャプリンのライムライトを上映しているのだけれど一緒に観に行かない？」

と、訊いた。好きなフィルムだった。即座にOKと答えた。

二日後、路面電車に乗って隣の大きな街ビレフェルトに行き、映画館に入った。かなり混んでいたが、私たちは二つ空席を見つけ、そこに腰かけた。

スクリーンにチャプリンの姿が映り出されて十分もしないうちに、隣に座っていたゲルトルートがハンカチを目に当て出した。情が深い女性なのだと思った。

何度観ても、チャプリンの動きとメロディーは心に残るものだ。映画館を出たあと、私たちは肩を並べてライムライトのメロディーと一緒に口ずさみながら、プラタナウスの並

木道を歩き続けた。

十分ほどで停留所に着き、路面電車を待っていると、彼女が、

「来週の水曜日に、母がテュービンゲンから来るわ。よかったら会ってみたい？」

と、訊いた。一瞬、迷った。が、前にいる彼女に関心を抱くようになっていたので、彼女を育てた親がどのような人なのかとの思い、「いいよ」と答えた。

「まあ、うれしい。母には、ヒデジのことは電話で話をしてあるわ。山が好きで……」

そう言ったあと、彼女はことばを弾ませながら母について語りはじめた。

ゲルトルート之母と会う水曜日となった。小豆色をした古いレンガ造りの郵便局前で立っていると、目の前を濃いねずみ色の服を身につけた白い帽子を被った六十歳くらいの奉仕女が、通り過ぎた。てんかん発作を起こした際に、頭を地面に直接打たないための特殊な帽子を被った男性が、ゆっくりとした足取りで郵便局に入っていた。

腕時計をのぞくと、二時五分前である。約束した時間まであと少しだ。春のうららかな陽を浴びながら、二人を待ち続けた。

近くの教会で、二時を告げる鐘の音が鳴った。そろそろ来る頃だと思っていると、五十分メートル先に二人の女性の姿が見えた。彼女たちのようだ。手を振ると、向こうも手を振り返した。

二人の前に立つと、ゲルトルートがにつこりして、隣にいた人を紹介した。

「母です」

「こんにちは、エルフリーデ・マリアンネ・ゴメルです」

夫人は笑顔を浮かべながら、私に手を差し伸べてきた。

「こんにちは、お目にかかれてうれしいです」

彼女の手を握り返した。ゲルトルートと同様に、掌がとても温かい。その時、「ヒデジ、ヒデジ」の大きな声が耳に入った。そのほうを見ると、数名の子供たちが車椅子に乗って、寮母さんたちと反対側の通りを歩いていた。

その彼らに、「ハロー」と声を出して手を振った。その様子を見ていたゴメル夫人が、薄ブルーの青い瞳を私に向けながら、話しかけてきた。

「知り合いの子供たちなのですか」

「はい、わたしが実習しているグループホームの子供たちです。今、散歩の時間なので。今日の夕方、彼らのところへ行くことになっています」

「そうなのですか」

夫人はそう言いながら、車椅子に乗っている子供たちを見続けていた。何かを思い出したような顔つきである。その横顔は、娘とそっくりだ。色白で額が広く、背丈は私と同じほどで一六八センチはあるだろう。地味な服を着て、グレーの帽子がよく似合っていた。ゲルトルートと知り合ったのが四ヶ月前のことだった。彼女をよく知らないうえに、今度は彼女の母に会うということ、いくらか緊張していた。が、子供たちが、「ヒデジ」と大きな声で呼んだのがきっかけで、その緊張も解れ、ゴメル夫人とスムーズにことばを交わすことができた。

ベーター内を散歩することになった。歩き出すと、夫人は娘とよく話をしてきたが、次第に私とも話をするようにもなった。

「あなたのことは、娘から電話で聞いていましたよ。ここで勉強するために日本から来た

のですね」

「はい、そうです。日本では重度の知的障がいのある子供が住む施設に勤めていたのですが、てんかん発作を起こす子も多くいて、療育の難しさを感じていたのです。そのようなある日、てんかんの治療では世界に知られているベータールのことが専門書に載っていたのを読み、勉強しようと思い、ここにやって来たのです。昼間は学校で治療教育学を学び、夕方はホームで実習しています。もう四カ月が過ぎました」

「そんな短期間で、よくドイツ語を話せますね」

「学生時代、一年近くドイツ語圏内の国に滞在したことがありましたから。それと、夜は近くの市民大学でドイツ語を習っていますので」

「そうなのですか」

夫人は肯きながら、濃い緑色をしたオーバーコートの前ボタンを外したあと、私の横顔を見ながら、

「どのような理由で、知的障がいのある子供たちの施設で働くようになったのですか」

と、訊いた。ゲルトルートと知り合った時も、同じ質問をうけたことがあった。

「子供たちに初めて出会ったのは、学生最後の年でした。そろそろ就職先を考えはじめたときでした。友人に誘われて、彼らの住む施設に行き、一緒に一週間過ごしたことがあったのです。彼らは初めてのわたしに親しく寄ってきては、なにかと話しかけてきました。その振る舞いは明るく、とても純粋に映ったのです。とにかく、彼らと一緒にいるだけで楽しかったのです」

一息入れてから続けた。

「それから数週間して再びその施設に行き、園長に、『是非、ここで働かせてください』と願いを出して、職員になったのです。ことばでの会話が乏しい彼らと寝泊りを共にしていると、ますます彼らに魅せられてしまいました。贅沢にも、彼らと同じような心境になりたいと思うようになったのです。その心境というのは、自分をありのままに出して、自分を守り、防御しないということでした。そこに、ことばを越えた真実性があると感じたからです。とにかく、彼らと接していると、彼らが鏡となって自分が映し出され、それも自己中心的なエゴを自分のなかに見出し、ハッとするときがしばしばありました」

さらに続けた。

「その施設には重たい障がいの子供も多く、彼らは自ら語りかけることがすくなくともあって、問いかけるこちら側の真摯な心が大切なものを知るようになりました。それはまさに自然との出遭いのなかで、自然からの語りかけはありませんが、こちらから積極的に話しかけ、問いかけると、それなりの返事を得るのに似ていると思ったのです。そのような体験を通して、この道で歩いて行こうと決心したのです」

夫人は足を止め、前のほうをしばらく見続けていた。

私たちは再び歩き出した。二月下旬にしては暖かな日射しである。ゲルトルートの案で、丘の上にある教会に行くことになった。

通りを歩いていると、奉仕女や看護師や介護士、それに医者と障がいのある人たちがすれ違った。

しばらくすると、かなり急な坂道となった。そこを登り切ると、大きな木々が立ち並んだ、うっそうとしたところに出た。そのなかに建つ、古いレンガ造りの大きな教会堂へ向

かった。

私たちは厚い鉄製の扉を開け、堂内に足を踏み入れた。日曜日の午前中の礼拝は、ベールに住む人たちが満席なのだが、今はシーンと静まり返って誰もいない。

ゲルトルートと婦人が祭壇の前に歩み寄っていくと、ステンドグラスを通した光が二人の周辺に注ぎ出したのである。娘が、母にこの教会の歴史について話しをはじめた。

しばらくしてから堂内を出て、再び歩き出した。ゲルトルートと知り合ってから二人でこの静寂な森のなかを週末になると、よく散歩していたが、今日はゴメル夫人も一緒である。

太陽の光が、時々葉と葉の間から差し込むなか、五分ほど行くと、神学大学の建物が見え出した。夫人に話しかけた。

「ドイツ南部地方のテュービンゲンに住んでいると聞きました。学生旅行をしていたとき、その街に寄ったことがありました。とても素晴らしいところですね」

「テュービンゲンに来たことがあったのですか」

夫人が驚いた表情で言った。

「あの街には、知り合いの日本人もいるのです。その人はこのベール神学大学でギリシヤ語とラテン語を勉強していました。脳性マヒの人で、今はテュービンゲン大学で哲学を学んでいます」

「まさかあの人ではないかしら」

夫人は、そう言いながら娘と話をはじめた。二人が会話をする時は、方言語となるので、よく聴き取れない。しばらくすると、ゲルトルートが話し出した。

「その日本の人、マルクト広場近くの大きな学生寮に住んでいない？ 母はその人を通りで、時々見かけたことがあると言うの」

「うん、彼は市庁舎から歩いて一分もしない学生寮に住んでいると思うけど」

「それでは、母のいう人とヒデジのいう人とは同じだわ。母は、その学生寮の前に住んでいるのよ」

驚いた。と同時に、ゴメル夫人と共通した人のことで、話ができたことによるこびを覚えた。夫人が私のほうに顔を向けた。

「わたしには障がいのあった長女もいて、娘からそのことを聞きましたか」

「はい、彼女よりも七歳上のお姉さんのことですね」

「その娘のアンネが」

夫人がそう言った時、数メートル先を歩いていたゲルトルートが、草むらに春一番に咲く白い身丈十センチほどの小さいマツユキソウの花を見ながら、「春になったわね」と弾んだ声を上げた。

夫人が何を語ろうとしたのかを訊ねようとしたが、会話の流れが再び母と娘になったので止めた。春を告げる黄色い花が芽吹き、木々の梢には小鳥が止まって、盛んに囀っていた。私たちは春の訪れを感じながら歩き続けた。

その散歩も終わり、ゲルトルートが住んでいる寮の玄関前に私たちは立った。二人に別れの挨拶を交わそうとした時だった。

「午前中にりんごパイを作ったから、ヒデジも食べて行って」

ゲルトルートが私の顔を見ながら言った。どうしようかと迷っていると、ゴメル夫人が

私に穏やかな声で、

「夕方の何時から実習があるのですかと、訊いた。」

「六時からです」

それを聴いたゲルトルートは、にっこりした。

「では、それまでいいのですよ」

小さなテーブルを囲んで、ゲルトルートが作ったりんごパイとコーヒーを飲みながらの談話となった。

部屋の片隅に、ゴメル夫人の旅行カバンがあったので、夫人に訊ねた。

「明日から東ドイツを訪問すると、ゲルトルートから聞いたのですが、そうなのですか」

「ええ、娘と一緒に、東の友人たちに会いに行く予定ですよ」

夫人はにっこりして答えた。

「東ドイツには、そう簡単に入れないのではないですか。ビザ無しで行くのですか」

「ビザは取ってありますよ」

私たちの会話を聴いていたゲルトルートが、話し出した。

「もちろん、滞在許可は必要よ。でも、ライプツヒヒ市で本の見本市が開かれる際は、その期間だけ、簡単にビザが取れるのよ」

「でも、ライプツヒヒ市内から、移動してはいけないのでは？」

「原則はね。でも私たちは何度も見本市に行つて、そこからドレーズデン市近くに住む友人宅にも列車で訪れていたわ。今回、わたしと母が東ドイツへ行くのも、表向きには見本市見学となっているけれども、友人たちに合うのが目的なのよ。彼らとは、ドイツが東西に分離する前から親しくしていたわ」

彼女はそう言うつてから、コーヒーをゆっくりと飲んだあと、再び話し出した。

「障がいのある姉のことを、ヒデジにすこし話したことがあったでしょ。姉のアンネは、十歳までは一般の子供のよう成長していたわ。でも、それ以後、急に筋肉の発達が止まり、こんどは反対に筋肉が縮まって、不自由な身になって車イスで移動するようになってしまったわ」

彼女は、そこまで言うつてから一息入れた。また話し出した。

「母はその姉をよく見ていたわ。もちろん、父もよ。その父が、五年前に突然の交通事故、それも車に撥ねられての即死だったわ。それ以来、母はアンネと二人で暮らしていたのだけれども、その姉も昨年三十七歳で生涯を閉じたわ。今回はその姉の死を、東の友人たちに知らせに行くのよ」

先ほどゴメル夫人が、「娘のアンネが」と言いかけたあとに話そうとしたのは、このことだったのだろうと思った。

壁にかかった時計を見ると、五時半を指していた。子供たちが暮らしているホームへ行かねばならぬ時刻である。椅子から立ち上がった。

玄関先まで出てくれたゴメル夫人に握手しながら、

「再び会うことを願っています」

と言うと、夫人はにっこりして私の手を握り返してくれた。

子供たちの住むホームへ行く途中、ゴメル夫人のことが浮かんでくる。車椅子に乗った、

障がいのあった娘を三十七歳まで育て、一緒に暮らしてきた年月は並大抵のことではなかっただろう。それに、夫の急死。さぞ辛い日々が続いたことだろう。でも、それを感じさせない、あの優しい笑顔。それに、何と温かい手だったのだろう。

初めての人と会うのは、新鮮なものだ。とくに、こちらがその出会いに意味を見出そうとしている時は、それがさらに生き生きしたものになるのだ。先ほど知り合った夫人との出会いは、まさにそのようなものだった。

ゴメル夫人と出会ってからのというもの、夕食は常にゲルトルトの部屋で一緒に摂るようになっていった。

第四章 中世の家並みと石畳の街

半年間の研修を終えた私とゲルトルトは、列車に揺られ、七時間かけてテュービンゲン駅に到着する。二人とも大きな手荷物を持っていたので、駅前からタクシーに乗った。

五分もしないでネッカーハルデ十二番地に着くと、ゴメル夫人が厚い木扉の前に立っていた。ベーターで会った時は冬のオーバーを身につけていたが、今は白い半袖のシャツを着て、いかにも涼しそうである。別れた際に目にした、あの優しい笑顔を浮かべている夫人と握手してから、建物内に入った。

ゲルトルトから、「母が家賃を払って住んでいる家は、四百年以上も前に造られた五階建てで、階をかえて四大家族が暮らしているわ」と聴いていたので、その家がどのようなものかと関心があった。

まず、木の階段を上って夫人の住む二階の住居に入ると、フロアの壁も床も天井もきれいにされて、中世に建てられた家とはとても思えない造りである。想像していたような、古く傷んだ建築物ではなかった。

ゲルトルトの姉が使っていた部屋に通された。壁には、車椅子に座っているかなり痩せた女性の写真がかかっていた。

それを観ていると、ベーターで車椅子に乗った子供たちに優しい眼差しを向けていた夫人の姿が浮かんでくる。自分の娘の面影を、あの子供たちに重ねて見ていたのだろうと思った。

その部屋を出てから、ひとり居間に入った。かなり広く、三十平米はあるだろうか。床は木張り、真ん中に重厚な木のテーブルが置かれてあり、その上に三つのコーヒーカーブとお皿が並んでいた。

表通りに面した三つの窓の一つから、外を見ると、赤オレンジ色の瓦をした大きな学生寮の屋根が見えた。私と同じ年齢で、哲学の博士号をとろうとしている知人が住んでいるところだろう。その建物の向こう側には、川が流れ、遠方には低い山々が連なっている。高台に建っている家なので、遠くまで望め、見晴らしがいい。

向きを変えて部屋内を見回すと、ピアノとスピネットが目に入った。誰が弾くのだろうと思っていると、夫人が部屋に入ってきた。

「娘は今、近くのパン屋へケーキを買いに行きましたよ。すぐに戻ってくるでしょう。どうぞ、腰かけてください。電車に長く乗っていたから、疲れたのではないですか」

「いえ、そうでもありません」

そう言うってから、夫人を何と呼んだらいいのかと一瞬、迷った。というのも、二週間後には、前に立っている夫人が義母となるので、ムッター（お母さん）でもよいのだが、その語が口からなかなか出てこなかったからである。

黙ったまま、椅子に腰かけた時、ゲルトルートがケーキを手にしながら部屋のドアを開けて入ってきて、椅子に座った。駆け足でケーキを取りに行ったのか、息を切らしていた。

「このケーキ、この地方の名物となっているのよ。甘くておいしいわよ」

彼女はそう声を出しながら、大きなケーキをお皿にのせた。夫人は私のカップに紅茶を注いでくれる。それを見ながら、夫人に、

「ありがとうございます、ゴメル夫人」

と言うと、ゲルトルートが、

「母はもうあなたのお母さんにもなるのだから、ムッターと呼んでもいいのではない。お母さんも、彼のことをヒデジと呼んで」

と、声を上げた。娘と同様に顔に化粧をしていない夫人はにっこりした。

夫人と会うのは二回目。どこの何者とも知らぬ私の存在を、どのように思っているのだろうか。それも、あと一カ月したら、ゲルトルートを連れて日本へ行くことになっていた。

夫に先立たれ、長女も去り、今度は次女との別れとなる。その心境を思うと、複雑な気持ちになった。と、その時、「ボーン、ボン」の音が聞こえた。そのほうに目をやると、古そうな時計がカチカチと時を刻みながら、長い振り子を左右に揺らしていた。ゲルトルートが、その時計を見ながら、

「あれは、祖父母が使用していたもので、わたしが生まれた黒い森地方で作られたゼンマイ仕掛けの時計よ。一日一、二回は下に付いている重い金具を、上に引き上げないとけないわ。一時間ごとに時刻を告げるわ。とても、正確なのよ」

と、言った。

「そうすると、百年以上も前につくられた時計か」

「ええ、そうよ」

「この居間には昔のものが多くあるね。窓にかかっている色鮮やかなステンドグラスは？」

それを聞いた夫人が話し出した。

「あれはわたしの兄の作で、この地方の多くの教会堂で、兄の作ったステンドグラスを見ることが出来ますよ」

「たしか、お父さんもお祖父さんも、牧師だったと聞きましたが」

「ええ、そうでしたね。夫もそうでしたよ」

夫人は微笑みながら肯き、壁にかかつてある写真に目を向けた。その写真を観ながら、夫人に訊いた。

「あそこに映っている人たちは、だれですか」

「両親や兄や姉、それに夫と長女ですよ」

と答え、夫人はその写真に目を向け続けた。その牧師家系の娘が、キリスト教徒で

もない私と結婚して日本へ行くことになっている。なにか申し訳なさを感じていると、ゲルトルートがにつこりしながら、

「日本での暮らしになるのね」

と、声を出した。その彼女に訊いた。

「あそこに、ピアノとスピネットが置いてあるけど、だれが弾くの？」

「次兄がピアノを、アンネがスピネットを弾いていたわ」

「音楽好きなきょうだいなのだね」

「ええ、長兄は上手にバイオリンを弾き、わたしは笛を吹くわ。昔は皆で演奏をよくしたわ。そういえば、チェロも家にあるはずよ。ヒデジもチェロを習ったら？ ねえ、お母さん、家にあるチェロをヒデジに渡したらどうかしら？」

「それは、いいわね」

楽器などを持ったことがなかった私だったので、遠慮した。しかし、ゲルトルートが強く勧めたこともあって、「それでは習ってみようか」と応えた。そのチェロが私たちの日本での生活に大きな助けとなるとは、この時は知る余地もなかった。

翌日、朝食を済ませてから、ゲルトルートに連れられて街を歩くことになった。

家から歩いて百メートル行くと、大きな広場前に出た。

「ここがマルクトよ。月、水、金曜日の午前中だけ、ここで朝市が立つわ。新鮮な果物や野菜が売られ、チーズやハムやパン、それに花も買えるわよ」

そう言いながら、彼女は広場内を歩き出した。店には、あんず・桃・サクランボ・スイカなどの果物が並んでいた。広場の周囲は、木組みの五、六階建ての大きな家ばかりである。そのうちでも、ひと際目立つ建物が噴水の前に建っていたので、

「あの建物は？」
と、訊いた。

「あれは、十五世紀に建てられた市庁舎よ。広場を囲んでいる建物は、どれも五百年前に造られたものばかりよ。チュービンゲンは戦災に遭っていないので、当時のままの姿で残っているのよ」

「ここに立っていると、別世界にいるような気になるね。中世にいるような錯覚に陥るよ」

「ほら、あそこではお魚も買えるのよ。あなたはお魚が好きだと言っていたから、今日のお昼はマスよ。母が買いに行くわ」

「だれが料理するの？」

「わたしがするわ」

「それは楽しみだ」

活気に満ちた広場をゆっくりと横切ると、美しい音色が聞こえてくる。二人の学生らしき人が気持ち良さそうにバイオリンを弾いていた。ゲルトルートは立ち止まり、彼らの前に置いてあった帽子にコインを入れた。この一帯は歩行者天国なので、ゆっくりと歩いていられるのがいい。

そのバイオリンの音色を聞きながら、中世に建てられた家並みを縫うようにして石畳の道を進んだ。

しばらくすると、右側に天に向かって聳え立っている塔が見えた。

「大きな教会だなあ。日曜日は、ここで礼拝がまもられているのか」

「ええ、そうよ。わたしも母もこの教会の会員よ。街一番の大きなプロテスタント教会で、千二百名は座れるかしら。いつもの礼拝だと二百名ほどの人たちが出席しているわ。ほら、あそあの高い塔にも立つことができるのよ。あそこからの眺めがいいわ。街全体が見渡せて……」

彼女は、そこから眺めた景色の模様を語った。そのあと、教会前広場の筋向かいにある本屋を指差した。

「あそこで、ヘルマン・ヘッセは書籍商の見習いとして四年間働き、詩人としての礎を築いていたのよ。ほら、教会正面前のあの白い建物は、昔は出版社だったのよ。ゲーテもあそこを訪れたことがあったのよ」

「ヘッセもゲーテも学生のころ、何冊か読んだことがあるよ。とくに、ヘッセには魅せられたね」

「そうなの」

私たちは再び歩き出した。

「テュービンゲンは大学の街なこともあって、名の知れた人たちがここで勉強していたわ。人口は約八万人で、学生の数は二万人ぐらいかしら。若い人とお年寄りが共存している街よ。催し物は頻繁にあるし……」

彼女は、この街を誇っているかのように語った。

教会前広場を通り過ぎて右側に折れると、変化に富んだショーウィンドウが並ぶ下り道になった。少し行くと、イタリアのアイスクリーム店の前に出た。店頭には、強い日差しを浴びて十名近くの人が並んでいた。その列に私たちも加わった。

まわりを見回すと、老いも若きもアイスを持って、大きな舌でそれを包むようにして食べている姿ばかりである。

私たちは手にアイスを持ちながら、再び歩き出した。

さらに行くと、長さ百メートル近くはあるだろう橋の上に立った。下に目を落とすと、川面に何羽もの鴨と白鳥が遊び、三十センチほどの鱒が体をうねらせながら何匹も泳いでいるのが見えた。

彼女が話し出した。

「この川はネッカーと呼ばれ、ハイデルベルグまで流れ、大河ラインに注いでいるのよ。ここからの眺め、いいでしょ。旅行者がよく写真を撮るところよ。『テュービンゲンの顔』とも言われているわ」

たしかに美景だ。緩やかな流れに沿って建ち並ぶ、色とりどりの歴史を感じる大きな家々を眺め続けた。

「あそこに、細長い小舟が一本の竿で操られているね」

「あれは、この学生たちが主に乗っている舟よ。ほら、向こうの小さな塔の近くから乗り入れするのよ。あの塔にヘルダーリンが精神錯乱して三十六年間も住んでいたのよ」

「あの詩人のヘルダーリンが、あそこに」

再び歩き出すと、橋の中央に中洲に通じる階段があった。そこへ降りると、大きなプラタナスが百本近く整然と並んでいた。その並木道の下をゆつくりと二百メートル進んで行くと、一つの銅像が目に入った。

「あれはローレライの歌を作曲したジルヒャーの銅像よ」

彼女はそう言い、ローレライのメロディーを口ずさんだ。ちょうどその時、一匹の小さなリスがすばしっこい速さで樹によじ登っていくのが見えた。川面に視線を向けると、色とりどりに並ぶ古風な家並みが水面に揺れているのである。まるで絵本に出てくるような光景に、うっとりとして眺め続けた。

テュービンゲンに来てから、二週間が過ぎた。私たちの結婚式となった。

キリスト教徒でもない私だったので教会堂では式を挙げずに、また、ホテルやホールなどで披露宴をする経済的余裕もなかったため、それもしないことにした。さいわい、ドイツでは戸籍係員の前で結婚式も挙げられるので、私とゲルトルート、それに友人二人の計四名でテュービンゲン市庁舎の戸籍室へ行き、そこでの式となった。

結婚指輪は、ドイツに住んでいる私の知り合いの日本人が銀のスプーンを溶かして作ったものである。式はわずか二十分ほどで終わった。背広を持っていなかった私だったので普段着のまま、また彼女は、真っ白いブラウスに黒いスカートである。結婚式とは、とても思えない二人の姿だった。

家に戻り、義母と義兄家族、それにテュービンゲン大学で哲学を学んでいる人を加えての祝会となった。義兄たちは自分たちの家で作ったサラダなどを持ってきて、子供たち五名も含めての賑やかな一タとなった。

このような結婚式もあっていいのではないかと思いつながら、皆から祝いのことばをもらい続けた。

「おめでどう、ヒデジ」

義母が私の目を見ながらそう言った時、ゲルトルートがすっかりと日本で暮らしているようにしなければならぬと、自分に強く言い聞かせた。

その賑やかで楽しい祝会も終わり、義兄家族たちは家に帰った。

急に静かになった部屋で、一通の手紙を書くことをはじめた。宛て先は、日本のキリスト教組織で運営されている知的障害児施設である。日本に戻ったら、すぐに働く施設を見つけねばならない。職を求めての手紙だった。

この夏の時期にすぐに見つかるかどうかたしかではなかったが、希望を持ってペンを走らせ続けた。ゲルトルートが日本に来て、キリスト教関係の施設なら、まわりの雰囲気溶け込むことができるだろうと思っただけである。

結婚式の夜に、このような手紙を書くとは思ってもしなかった。まして明日から五日間、オーストリアのチロルの山へ新婚旅行に行くというのに。

ゲルトルートが手紙を書いている私に話しかけてきた。

「結婚式の夜に、求職の手紙を書かなくてもいいのでは」

「日本に帰ってから探そうとしたが、このようなことは早い方がよいと思って」

「よい返事をもらえるといいわね」

「時期的に難しいかも知れない。でも、可能性はあると思う」

そうは言ったが、祈るような心境で書き続けた。彼女は、私のうしろに回って肩をもんだ。その時、思った。愛するということは、責任と行為が伴うものだ。

チロルでの新婚旅行から家に戻ると、夜の八時が回っていた。義母は日焼けした私たち

の顔を見て、とくに、色白の娘の額と鼻が赤く焼けたようになってるのを目にして、少し驚いた表情を浮かべた。

ゲルトルートがクリームを顔や首に塗りはじめると、私のお腹が鳴り出した。

「お腹が空いているのではないですか」

義母が訊いた。

「はい、いくらか」

「地下室に、わたしが作った砂糖づけのサクランボがあるので食べますか。今、取って来ますよ」

そう言いながら彼女が椅子から腰を上げ、地下室へ行こうとした。と、ゲルトルートが声を上げた。

「わたしが行くわ。ほてっている顔には、あのヒンヤリした地下室がいいわ」

義母と私との二人だけとなった。彼女が話しかけてきた。

「どうでしたか。娘は本格的な山登りはしたことがなかったので、大変だったのではないですか」

「チロルのエッツ谷のヴェント村に着いた翌日から、歩きはじめました。そこは、学生時代に行ったことがありました」

その山岳地帯が初めてでないことを伝えてから、さらに続けた。

「天気は良く、雲一つない青空の下での山歩きとなりました。出発して二、三時間は、彼女は歌を唄い、草原に咲いている高山植物を見ては、よろこんでいました。しかし、山道が険しくなってくると、苦しそうな表情を浮かべてきました。そこで、しばしば休みを取りながら登り続け、歩き出して七時間で、目的の三〇一九mのシウムラン小屋に到着しました。彼女には相当きつかったようで、やっと辿り着いたと言ったほうがよいかもしれません。なにしろ、千メートルの高度差を登ったことになるのですから」

義母は机の上に両手を組んで、耳を傾けている。

「初めての山行にしては、彼女はよく歩きました。最後の登りはハアハアと息を切らして、『もう山登りはしないわ』と言ったのですが、登り切ると、晴れ晴れとした顔となって、お互い握手を交わしたのです」

「そうだったのですか」

微笑みを浮かべながら言った。

「ゲルトルート、遅いですね。下でなにをしているのだろう？」

「熱くなった身体には、地下室がいいのでしょう。そのうち戻ってくるでしょうから」

義母は、さらに話を聴きたい様子である。

「私たちが山小屋に着いたのは、夕方近くでした。そこは、オーストリアとイタリアの国境線上で、お腹が減っていたので、すぐにスパゲッティを食べたのです」

その時の美味しい味を想い出しながら語っていると、ゲルトルートが地下室から戻ってきて、お皿にコンポートをのせながら話し出した。

「三〇〇〇mの高さの山に登ったのは初めてよ。素晴らしい眺めだったわ。真夏なのに、周囲の高い峰々は雪を被っていて、それは素晴らしかったわ。もちろん、疲れたうえに顔がひりひりして痛かったけれども」

真っ赤になった顔を母に向けながら、さらに続けた。

「私たちが泊まった山小屋から、雪が積もっている三六〇六mのシムランの山頂が望めたわ。次の日、その山へ登る予定だったけれど、雪も積もっていたし、わたしは疲れも出ていたので、ヒデジ一人で行ったわ。彼が歩いている姿を、山小屋のバルコニーから見えたわ」

母は、お皿に盛ったサクラランボをスプーンで拾いながら娘の話しを聴いていた。

そのコンポートも食べ終わり、皆でゲームをすることになった。義母の好きなダイヤモンドゲームである。

結果は、義母が一番となった。ゲルトルートが悔しそうな声で、

「もう一回しましょうよ」

と声を出すと、

「わたしは、もう部屋へ戻りますよ」

と応え、椅子から立ち上がり、私に優しい笑顔を浮かべながら、

「おやすみ、ヒデジ」

と言って、部屋のドアへ向った。

その彼女のうしろ姿を見て、あと五日したら、娘を連れて日本へ行くことになっていたので、申し訳ない気持ちになった。と、その時、壁にかかっていた黒い森のゼンマイ時計が、ポーン、ポーンと十一時を打ち出した。

第五章 ミヒヤエルの誕生

日本に着いて一週間後、妻が身ごもったことを知ると同時に、チュービンゲンから職を求めて書き送った手紙の返事を受け取った。そこには、知的障がいのある子供の施設で指導員として、すぐに採用してもよいと記されてあった。うれしいことが二つ重なった。

浜松の三方原に建っている職員寮で、私たちの生活がはじまった。その寮の近くに、キリスト教会があったので、妻はそこに通うようになった。

義母からは週に一回ほど、手紙または電話の連絡があった。また、出産予定日の三カ月前頃から、彼女が縫った小さな靴下や服などが届くようになった。それを目にしながら、私と妻はこれから生まれてくる子のことを思い、胸が大きく膨らんでいた。

あと二週間で出産日である。いつものように職場で働いていると、一人の事務職員が、「電話ですよ」

と、伝えにきた。誰かなと思いつながら、電話が置いてあるところに行き、受話器を取った。

「奥さんが、トイレのなかで叫んでいますよ」

同じ寮に住んでいる、隣の人の甲高い声である。驚き、すぐに家へ走った。

「どうした!」

畳の上で横になっている妻に駆け寄ると、彼女が苦しそうな表情を浮かべてお腹をさすっている。これはいけないと思い、隣の人の車に妻を乗せて病院へ向った。

一分もしないで病院に着くと、彼女は即分娩室に運ばれた。その室の前で待つことになった。

二時間が過ぎたが、なんの連絡もない。不安な気持ちだが、むくむくと頭をもたげてくるのだった。三時間半が過ぎたので、思い切って分娩室のドアを叩こうとした時、内から産声が聞こえてきた。生まれたのだと思った。

一人の看護師がドアを開けて、

「男の子です。母子共に無事です」

と、言った。それを聴き、すぐに妻と息子に会おうとしたが、看護師に、

「明日、会ってはとうですか」

と勧められたので、それに従ってしまった。壁にかかっている時計を見ると、三月十九日二十三時四十五分を指していた。

寮までの帰り道、歓喜のあまり、叫びたい衝動に駆られ、それを抑えるのに困った。

翌日、朝食も摂らずに病院に行き、我が子と初めての対面である。息子は母親に抱かれて眠っていた。色が白く、生まれた直後にしては、あまりに整った顔立ちをしていたので、ハーフだからかと一瞬、思った。

その息子をしばらく抱きながら、

「ご苦労さん。お母さんには、電話で連絡しておくから」

と妻に言うと、彼女は微笑みながら、私と一緒にわが子を見つめ続けた。こんな歓びがあるのだろうかと思ってしまう。

それから五日後、二人が病院から帰宅した。息子の名前は、妻の希望でミヒヤエル、日本名では私の希望で遊（あそぶ）と名付けた。そのミヒヤエルが母乳をなかなか飲もうとしなかった。

「お乳を吸ってくれないの。一日にどれだけ飲んだかわからないわ。こうやって哺乳ビンに入れて飲ませると、いくらか飲むのだけれども、体重もそんなに増えないし」

彼女は、少し心配そうな表情を浮かべながら言った。

「生まれたときが、未熟児すれすれの体重二千五百グラムだったね。二週間経った今もそんなに体重が増えないのでちよつと心配だけれど、これから毎日すこしずつ飲むよ。そのうち、吸いつくように飲むさ」

「そうよね。こうやって、乳をしぼり出す必要もなくなるでしょうね」

妻は哺乳ビンの母乳を息子に飲まそうとするのだが、ミヒヤエルは依然としてあまり飲もうとはしなかった。その様子を目にしていて、私も心配になった。もしかしたら、彼女も私と同じようなことを考えているのかもしれないと思い、

「ミヒヤエルが、なぜミルクをあまり飲まないのかを、あの看護師さんに、家に来てもらって訊いてみようか」

と、言った。

「ええ、それはいいわね。あの看護師さん、とても優しくかったわ。ミルクを飲ませる工夫が、何かあるかもしれないわね」

二日後、病院での仕事を終えた看護師が来宅した。息子があまり乳を飲まず、体重も増えないことを話すと、彼女は何事もないかのように、

「そう心配することはありませんよ」

と言つて、妻にミルクの飲ませ方などの指導をしてくれた。

看護師は一時間ほどいてから、帰ることになった。

彼女をバス停まで送って行く途中、思っていることを話した。

「知的障がいのある子供が住む施設で働いているので、察したりするのですが、もしかしたら、息子はダウン症ではないでしょうか」

「いや、そんなことはありませんよ」

看護師は、先ほどと同じような穏やかな声で答えるだけだった。暗い夜道なので、彼女の表情を読み取ることはできなかった。

「仕事柄、彼らのことはわかっていますので、本当のことを言ってください」

「いえ、そんなことはありませんよ」

同じ返答を繰り返すだけである。もうこれ以上訊くことはできないと思ひ、家まで来てくれたことにお礼をのべてから、妻と息子のところに戻った。でも、まだ看護師が言ったことを、鵜呑みにはしていなかった。

妻は電話で母と話をするのをとでも楽しみにしていた。生活するだけで精一杯の私の給料だったので、こちらから電話をすることができなかった。いつも義母からかかってきた。見知らぬ地に住む妻にとつて、母だけが、私を除いてことばのハンディーもなく、心を通わすことができる人だったのである。

ミヒヤエルがあまりミルクを飲まないことを話したためか、ドイツから粉ミルクなどが届くようになった。その彼の体重は少しずつ増えてはいたが、他の子と較べると極端に少なく、首が四ヶ月過ぎても座らなかつた。そこで、彼が生まれた病院ではなくて、他のクリニックで、血液を調べてもらおうとした。二週間以内に、その結果を知らせてくれることになった。

職場で働いていると、事務職員が、

「横井さん、電話ですよ」

と、伝えに来た。

早速、電話機が置いてあるところに行つて受話器を取った。

「ミヒヤエル君の血液の結果が出ました」

ハツとし、いくらか恐さを覚えながら耳を傾けた。

「検査の結果、二十一トリソミーのダウン症と判明しました」

それを聴くや、そのようなことだろうと想像していたにもかかわらず、私の心は動転して、なにかを言おうとしたのだが、声が出ないのである。受話器の向こうで何かをしゃべっているのだが、それが耳に入つてこないのである。

しばらくしてから、「そうでしたか。ありがとうございます」と言つて、受話器を置いた。その時、「ありがとうございます」と反射的に自分の口から出たことばが、妙に耳に残つた。と同時に、彼が生まれた病院では、なぜ教えてくれなかつたのだと思つた。(外国人の妻だからなのか。でも、そうならいざれわかるのに。あとで言おうとしたのだろうか。いや、違ふだろう。出産したあとに、すぐに我が子を見ることができず、また極端に乳を吸う力のなかつた子だったので、担当の医師はこの子の生命力はないと思つたのではないか。だから言わなかつたのだろうか。そうとしか考えられない)

受話器をじつと見つめてから、仕事場に戻つた。体から力が抜けたようになって、やは

りそうだったのかと何度も心のなかでつぶやいた。家に帰ってから、彼女にどのようなように伝えたらよいのだろうかと考え続けた。

勤務時間が終わり、帰宅して玄関で靴を脱いでいると、いつものように妻の「おかえりなさい」の明るい声が聞こえてきた。

それを耳にしてから六畳の居間に入ると、彼女が話し出した。

「今日、母から小包が届いたわ。あなたが戻ってから、紐をほどこうとしたのだけれども、待ちきれなくて開けてしまったわ。ほら、母が送ってくれた木のおもちゃがあるでしょ。ミヒヤエルは、まだあのようなおもちゃで遊ばないのに。でも、そのうちに関心を示すでしょうね」

彼女はおもちゃを手にとり、私に見せた。話さなければならないと思い、妻を畳の上に座らせた。

「君に伝えなければならないことがある。今日、クリニックから電話があつて」

そこまで言うと、前に座っておもちゃを動かしていた彼女の手が、ぴたっと止まった。「検査の結果、ミヒヤエルは」

次にいうことばが重たくて、なかなか口から出てこないのである。

やつと声を絞って、

「ミヒヤエルは、ダウン症だとわかった」

と、伝えた。妻は一瞬、体をギクツと震わせて視線を下に落とした。そこには、ドイツから届いたおもちゃなどが包まれた包装紙がきちんとたたまれてあった。なんということ言ってしまったのだろう。彼女を正視しなければならぬのに、自分もその包装紙に目を落として続けた。私たちの間に、沈黙がしばらく流れ続けた。

妻が立ち上がり、隣の三畳の寝室で寝ているミヒヤエルのところに行った。私も一緒である。彼女は、ぐっすり眠っている息子の寝顔に自分の顔を重ねた。その情景を見て、彼女の震えている肩に手をかけながら、この子をしっかりと育てていくぞと誓った。

私たちの家には、一晩中、ローソクの明かりが灯り続けた。

翌日、娘は電話で母と長々と話を続けていた。

浜松の冬は明るく、セーターが要らないほどである。妻は、聖隷事業団を創立した人の奥さんから借りた竹作りの乳母車に息子を乗せ、毎日のように外に出ていた。

休日になると、私もその乳母車を押し一緒に散歩するようになった。彼女は道行く人と出会うと、親しそうに挨拶を交わし、ミヒヤエルをいつも笑顔で見せ、それも誇らしそうに。それが、私にはとてもうれしかった。

日本語を話せず、親戚や友人もいず、障がいのある子を持ち、今後どのように育ててよいのかとの見通しも立てることができない妻だったが、明るい性格の彼女は、少しずつ体重が増えてきた息子の成長を私と共によろこびながら、温暖な浜松の地で暮らしていた。

クリスマスが近づいた。妻は近くの林から高さ一メートルほどの木を採ってきて、居間にそれを置き、彼女が麦わらで作った星や月などを枝に吊るしはじめ、十二月二十四日を待ち望んでいた。

義母からは、ミヒヤエルにドイツ製の木のおもちゃが多く入っている小包がよく届くようになった。とくに、彼は音のする木のおもちゃが気に入り、それを手に持って一人で遊

ぶようにもなった。それを目にしたので、彼がよろこんで遊ぶような音のする木製のおもちゃを作りはじめるようになった。作っては、彼に与えていた。

そのようなある日、しばしば足を運んでいた街の図書館で、一冊の本が目にとまった。それを借りて読むと、学生時代から追求していた内容の本だった。妻は毎晩、寝る前には聖書をかみかみ読んでいたが、私もその本と出合ってから、毎晩のように、それを枕元において目を通してから寝るようになった。

その本というのは、宗教哲学に関するものだった。学生時代から、鶴見の総持寺に座禪を組に行き、そこで寝泊りもしていたこともあってか、その本の内容が体を通して自分のなかに入ってくるように感じられ、その著者の教えている大学へ、職場の休日を利用して行くようにもなったのである。

それから数カ月後、考え抜いた末、妻に言った。

「浜松から茨城県の土浦に引っ越そうと考えているのだけど、どうだろう？ 木のおもちゃ作り、それも障がいのある幼児のためのおもちゃ作りをしたいのだ。それに、時間が許せば、再び大学で勉強したいのだが。土浦は大学を卒業したあと、すぐに働き出した地でもあるし、友人もいる。また近くに筑波大学があって、そこで池田先生という人がダウン症のセラピー教室を開いているので、そこにミヒヤエルを通わせたいのだが」

彼女は私の目を見続けたあと、

「あなたがそうしたいのなら、いいのではない。応援するわ」

と、賛同してくれた。この地にくらか慣れてきたなかで、私の願いを素直に受け入れるのは、そう容易ではなかっただろう。深く感謝した。

数カ月したら、土浦に引っ越すことになった。

第六章 おもちゃライブラリーと丸さん

こんどの住いも、ブリキ屋根の簡易な平屋の借家である。土浦市郊外に建っていた。こども汲み取り式のトイレだったので、直ちにプラスチックの簡単な洋式便器を買い、それを取り付けた。

その家から、一歳半になった彼は、筑波大学で開かれていたダウン症のための療育教室に通うことになり、体の動作訓練などを受けるようになった。

妻は療育室の先生たちと英語で話をし、また大学付近にドイツ人女性が二人住んでいたの、彼女たちの家に息子を背中におんぶして、しばしば行くようになった。ことばでのコミュニケーション支障は、以前ほどなくなっていた。

土浦に移り住んでから、直ちに障がいのある幼児たちがよろこんで遊ぶ木のおもちゃを作りはじめた私だった。

友人の父が運営している施設内で作るようになり、それらを取りあえずは、市内のデパートや地域の子供祭りなどで販売するようになった。

でも、それだけでは生活できなかったもので、作ったおもちゃをダンボール箱に詰めては、

近くの幼稚園や保育園に出向き、売り込む活動もするようになった。

最初の頃、園の門をなかなか潜れなかったが、生活費を稼ぐにはこれしかないと思い、意を決し、売り廻った。二つ、三つ買ってくれれば、うれしかった。

おもちゃを作る傍ら、火曜日の午前中の二時間だけ、筑波大学に通い、宗教哲学の三枝先生のゼミを聴講するようになった。

大学院でのその授業は、とても学ぶものが多く、それを許してくれた妻に感謝しつつ、机に向かっていた。

彼女は生活がいくら厳しくなっても、なに一つ辛いとは口に出さないうで、いつも明るく振る舞っていた。それだけではなく、近くにあるプリマハムという会社の社員たちにドイツ語を教え、その授業料を家計費にまわすようになったのである。

そのような日々が続き、彼が三歳になった時だった。私たちの生活に新局面が加わった。おもちゃ作りの仕事を終え、家の玄関戸を開けると、妻の「おかえりなさい」とのいつもの明るい声を耳にしてから、台所に入った。

妻は息子を背負いながら、包丁で人参を切っていた。頬にキスをすると、彼女が話し出した。

「今日二つの電話がかかってきたわ。一つは母からで、もう一つはテレビ局からだったわ」「テレビ局？」

「ええ、内容をすこし話してくれたのだけれど、わたしにはよくわからなかったわ。でも、明日の朝、もう一度、電話をかけるそうよ」

済まなそうな声である。

日本語がまだよくわからない彼女は、受話器では相手の姿も見えず、話も聴き取りづらく、電話に出るのが好きでないとよく言っていた。あそぶが生まれてから、ダウン症の息子を育てるのに精一杯で、日本語を習う時間は彼女にはなかった。それに、私たちの会話はドイツ語だったので、日本語は上達していかなかった。それでも、まわりの人たちと接するうちに、日常会話はどうにかできるようになったが、十分ではなかった。

翌朝、作業所へ行こうとすると、家の電話が鳴った。

受話器を取ると、NHKのテレビ局からだった。私たち夫婦が開設しているおもちゃライブラリーを取材したいとの申し込みだった。思いも寄らない話だったので、「明日、返事をします」と応えてから受話器を置いた。

その晩、妻と話し合った。

「どうしよう、ぼくはマスコミが好きではないのだ。断ろうか」

「でも、あなたが開いているおもちゃライブラリーは、商売でしているわけではないし、日常生活に支障をきたらしている子供を持つ親たちが、自然と集まって、できたのですよ。それと、あなたがいつも言っているように、この活動がここだけでなく、至るところにできてくればと願っているでしょ」

「そうだが。しかし、どのように放映されるか」

「では、あなたの希望を、そのテレビ局の人に話してみたら？」

「そうだな。よし、承諾しよう。さらに、よい活動となるように。しかし、もっと忙しくなるかもしれないぞ」

「わたしで、できることはするわ」

妻は、障がいのある幼児のためのおもちゃライブラリー活動に協力的だった。

翌日、NHKから電話がかかってきた。こちらの希望を伝えたあと、承諾することになった。

ここに至るまでの、おもちゃライブラリーのことを頭のなかに浮かんでくるのだった。(障がいのある幼児たちは、市販されている一般の玩具ではなかなか遊ぼうとはしなかった。しかし、音のするおもちゃには関心を示し、遊ぼうとした。息子もそうだった。そこで、彼に音のする木のおもちゃを作っては、与えるようになったのだ。

そのおもちゃで、家の三畳間は足の踏むところもないほどになった。そのことを知った近所に住む、障がいのある幼児の親たちが、私の家に来るようになり、おもちゃを借りていくようになったのだ。

そのようなことをしているうちに、おもちゃを借りに来る親子が次第に増えて、狭い家では十分な対応ができなくなってしまうた。そこで、土浦市内の古い木造アパートの一室を借りて、毎週の土・日曜日をおもちゃの貸出日として、無料で提供することをはじめたのだ。

自分たちの生活費が足りないのに、アパートの一室の家賃を払い、そのようなことをするのに、勇気がいった。が、共通する悩みを持つ親たちと話し合っているうちに、どうしても、おもちゃライブラリーを開こうと決心したのだ。

開設当初は、妻と私とで訪れてくる幼児と親に應對していた。そのことが地域の新聞に載り、訪れてくる親子の数が少しずつ増え、二人だけでは十分に対応ができなくなってしまうた。さいわい、近くの筑波大学で福祉教育を専門に学んでいる大学院生数名が、手伝いに来てくれるようになったのだ。

手作りの木のおもちゃを貸し出していたので、数を増やさねばならなかった。これもまたうれしいことに、近くに住む主婦グループの人たちがおもちゃ作りに参加してくれるようになったのだ。

学生たちも主婦たちも私たち夫婦も、皆、ボランティア。私たちはお互いに助け合いながら、おもちゃライブラリーの活動をするようになっていったのだ。

NHKのテレビ放映は、約十分間だったが、多くの人が観る朝の時間帯だったこともあって、大きな反響があった。まして、国際障害者年でもある。

それに、関東地区にはおもちゃライブラリーがほとんどなかったたので、放映後、毎日数十件の問い合わせの電話が入るようになった。それに応じなければならなかった妻は、不自由な日本語、それも電話での対応だったので、苦労していた。

土浦おもちゃライブラリーに来る家族は、増え続け、県外からも来るようになった。また、マスキなどの取材も多くあった。

この活動が関東地区、及び全国にまで広がり、障がいのある幼児を持つ家族が気楽に来て、遊べるような場となるようにと願いながら、私たちは活動を続けていた。

ありがたいことに、安田火災保険会社が援助金として五十万円を出してくれた。それで市販の木のおもちゃを購入して数を増やしたり、手づくりのおもちゃのカタログを作成したりしたのである。

そのような時、坂本九さんが北海道の三十分番組のテレビ取材で、私たちのおもちゃラ

イブラリーを訪れてきた。

真っ白い半袖のシャツと紺のズボンの九さんは、私たちが作ったおもちゃ一つひとつを手にとつて、感心しながら見ていた。その表情には、あのテレビで観るような優しさがあつた。

ライブラリーでの二時間ほどの取材が終わつたあと、九さんが私たち夫婦に、

「このような活動が広がるといいなあ」

と、微笑みながら言った。

「ええ、おもちゃを媒介にして、親は自分の子供と遊び、会話もできます。また、ここにあるおもちゃは、子供たちの発達を助長するように作られていて、ほとんどが木の手作りのおもちゃなのです」

さらに、説明した。

「障がいのある幼児たちは、家からなかなか出られないのです。でも、このようなところで、同じ悩みを持つ親たち同士が、お互いに会話をしたりするなかで、励まされたり、不安なども軽減されたりして、両親、とくに母親が元気になります。連帯意識が自然と生じてくるのです」

さらに、続けた。

「ここに来るには、父親が車で運転して、父親も養育の役割を知っていくのです。障がいのある子供を育てるのは、母親だけでは無理です。ストレスが溜まってしまいます。それを和らげるためにも、父親及び地域の人たちの協力が必要なのです。このおもちゃライブラリーは、そのようなことを考慮に入れながら、活動しているのです」

九さんは、肯いて聴いていた。そのあと、私の目を見ながら、

「何か書くものはありますか」

と言つたので、一枚の紙とペンを渡すと、その紙に、

どの花にも

草にも

どのおもちゃにも

ひとつのいのち

と、筆を運ばせたのである。

それを読んだ時、九さんはなんと優しい心を持った人なのだろうと思つた。花や草にいのちを見出し、おもちゃにもいのちを見出している九さん。一つのおもちゃは孤立してそこにあるのではなく、そのおもちゃとそれで遊ぶ子供との間に、いのちの繋がりをみている九さん。

澄んだ瞳を見ながら、

「ありがとうございます」

と感動した声で九さん言い、手を握つた。と、しっかりと握り返してくれる。

二時間ほどいてからの別れ際、九さんはニキビの跡が残っている顔で、にっこりして私たち夫婦に、

「わたしの祖母は、茨城に住んでいるのですよ。また、このライブラリーに来るよ」と、言ってくれた。

それからというものの、妻は九さんの歌、「幸せなら手をたたこう」をしばしば口ずさむようになったのである。

第七章 義母と再会する

土浦で暮らすようになって二年が過ぎたある日、関東地方に台風が上陸するだろうとのニュースがラジオから流れた。それを台所で料理していた妻に伝えると、彼女は不安そうな顔を浮かべた。

「母があさって日本に来るというのに、飛行機は成田に到着できるのかしら？」

「台風が上陸するまでには、まだ四日もあるし、そう心配することはないよ」

「でも、母が来るときに、台風がくるなんて」

強い台風がもし来たら、今住んでいる家の屋根が吹き飛んでしまうだろうと思った。ブリキ張りの木造建ての簡易な貸家だったので、大型の台風に直撃されたら、一溜まりも無いただろう。裏はピーナツ畑。屋根が飛ばされたら、三人をどこへ連れて行こうかと真剣に考え出した。

さいわい、台風は速度を緩め、上陸は五日後との予報を聞き、私たちはホッと胸を撫で下ろした。

二日後、安い値段で購入した車で、つくば学園都市に住むドイツ夫人宅へ向かった。と言うのも、その夫人の母も義母と同じ飛行機に乗って日本へ向ったので、彼女が成田空港へ二人を迎え、連れてきたからだだった。私の古い車だと、成田に着くまでの間にエンストする可能性があった。

ドイツ夫人宅で、義母に再会した。長い飛行機の旅にしては、彼女の頬には赤みがさして、以前とあまり変わりのないように見えた。

エンジンをかけてから、私たちの住まいへ向った。

「遠いところから、よく訪れてくれました。日本に来るのに、一大決心がいったのではないですか」

「そうね。でも、あなたたちに会いたかったから。それにミヒヤエルの姿も見たかったし、彼は元気なんでしょう？」

「はい、四歳となって、やっとひとり歩きができるようになりました。今は近くのキリスト教系の幼稚園に通っています」

「早く会いたいわ」

そう言いながら、私のほうに顔を向けた。

「ヒデジと会うのは、何年ぶりになるのかしら？」

「五年が過ぎています。お母さんは以前とそう変わりがないように見えますが」

「ええ、大きな病気はしませんでしたよ」

義母はにっこりしてそう応えたあと、初めて見る日本の風景に目を注ぎ出した。

十分足らずで家に着き、玄関前で車を止めると、妻が格子戸をガラガラと開けながら出てきた。母と娘の久しぶりの再会である。娘は背の高い母を抱くようにして、お互いに頬と頬を合わせ、数秒間抱き合っただままでいた。

私たちが六畳の居間に入ると、ミヒヤエルが畳の上で寝転びながら、木のおもちゃを手にして遊んでいた。その彼を抱き上げて、

「おばあさんが来たよ」

と言うと、彼はおばあさんのほうを見た。

義母は孫の小さな手を取った。

「こんにちは、ミヒヤエル」

彼女の横にいた娘が声を出した。

「ここにいる人が、あなたのおばあさんなのよ」

ことばがまだ出てこないでいたミヒヤエルは、「アー、アー」と発しながらおばあさんを見続けていた。義母はミヒヤエルの頬に自分の頬を重ね、彼を胸に当てた。

障がいのある長女を育て、今度はダウン症の孫を持ち、義母の胸の内には言えない思いがあるに違いない。ちようどその時、外のスピーカーから、こんにちは赤ちゃんメロディーが流れはじめた。

「あの音は何なの？」

母が娘に訊いた。

「あれは果物や野菜、それに牛乳などを車に積んで売り歩いている人が来たことを知らせるメロディーなのよ。新鮮な食べ物が売られ、わたしも時々買ったたりしているわ」

日本の生活に慣れてきた娘が、母に説明した。彼女はコートも脱がずに、ミヒヤエルを抱きながら、娘の言うことに耳を傾けていた。

しばらくすると、義母が居間にある簡易ソファに腰かけた。そして、コーヒを飲みながら、飛行機内で起こったことや二人の息子たち家族のことを語り出した。

元気とは言え、七十四歳である。一時間もすると、欠伸をするようになった。それを見たので、義母に訊いた。

「疲れていませんか」

「ええ、そうですね」

「時差の違いもあるし、すこし休んだほうがいいですよ。お母さんはいつも昼寝を欠かさずにしていましたし、機内ではそれもできなかったでしょうから」

「それでは、そうさせてもらおうかしら」
押し入れから蒲団を取り出して、敷き出した。と、義母が低い声で隣にいた娘に囁いた。

「寝るといっても、この部屋で横になるの？」

「ええ、そうよ。そこに四枚の襖があるでしょ。それで仕切るから、向こうが寝室となつて、こちらが居間になるのよ」

娘はさらに続けた。

「食事のときは、この居間がこんどはダイニングルームにもなるのよ。そればかりではなく、ここが教室にもなるのよ。今、近くのプリマハム会社の社員に、ドイツ語を週に一回教えているわ。社員六名がここに来て、ドイツ語会話の時間となるわ」

母は娘の話を肯きながら聴いていた。ドイツの暮らしとはまったくかけ離れた生活に、驚いたに違いない。でも、彼女はそのような表情を少しも見せずにいた。

義母は、一日目と二日目は娘と絶えず話をしてきた。三日目の夕方から、土浦が台風の影響範囲に入った。大型の台風だったが、日本に近づくにつれて小型となった。が、それでも強い風と雨である。木枠で作られた窓がガタガタと音を立てて揺れ出し、横なぐりの雨が窓を沫くようになった。

台風がさらに接近してくると、窓の隙間から水と風が部屋に漏れ出してきた。急いでトタン製の雨戸を閉めたのだが、それでもどこからか水と風が侵入してくるのだった。しかし、義母は心配そうな表情を少しも見せずに、娘と夜が更けるまで話し続けていた。さいわい、屋根は吹き飛ばされずに済んだ。

台風一過の翌日は、澄んだ青空になった。秋晴れの下、娘と母はミヒヤエルをベビーカーに乗せて、彼が数カ月前から通い出した幼稚園へ向かった。二人は、毎日ミヒヤエルをその幼稚園まで送り迎えをしていた。私が、「どこかへ行きましょうか」と訊くと、「娘と孫と家にいるのが一番よいから」と静かに答えるだけだった。

義母は、私たちの貧困な生活を見てとっただろう。彼女からもらったチェロも生活費に困って、先のドイツ夫人に二十万円で売ってしまったことも知っているに違いない。それで遠慮しているのだろうと思った。ミヒヤエルを含めての四人で、京都に連れて行きたかったが、それができず、私の母が住んでいる東京に一度、それに筑波山に行っただけに終わった。

日本を発つ前日、これから寒くなるからと言って、母は娘に自分の二枚のセーターを手渡し、ミヒヤエルには、二カ月の滞在中に編んだ毛糸の靴下をテーブルの上に置いた。それを目にして、義母を遠くに案内できずにいた自分の不甲斐なさを思い、生活を安定させていかねばと意を強くした。

それから半年が過ぎた時だった。リュウマチとパーキンソン病に患って、自分一人では歩けない状態だった私の母が、土浦に四週間の予定で遊びに来ることになった。

私と妻は、よろこんで母を迎え、楽しいひと時を過ごした。

その母が東京の家に戻る一週間前、

「よかつたら、あなたたちと一緒に暮らしたいのだけれど」

と、言った。その場で、すぐに返事をするのができなかった。というのも、息子がいるからで、さらに妻に負担がかかると案じたからだった。

その夜、妻に母の願いを伝えると、彼女は躊躇もなく、「いいわよ」と答えた。そこで、母と一緒に暮らすことになった。父は、二年前にすでに亡くなっていた。

今までの狭い家から、こんどは母のベッドが置けるような、やや広い住宅に移ることになった。

妻は母を車椅子に乗せ、息子が家にいない午前中は、毎日、外に散歩に出かけるようになった。

近くに住む主婦たちが、

「お宅の奥さんえらいですね。感心するわ」

と言ったのを、何度も耳にした。また、母を連れて週に一回ほど通う国立霞ヶ浦病院の婦長さんも、

「親孝行のお嫁さんね」と、褒めた。

多くを語らない母は、大変苦労した人だった。私の少年時代は、父が不在だったので、母は私たち子供四人を育てるために、朝から夜遅くまで、着物の仕立てをしていた。

私が学校から戻ると、母はいつも四畳半の居間兼仕事場で、長い裁縫台の前に座っていた。こちらの「ただいま」の声を耳にすると、母は少し顔を上げ、「おかえり」と優しい声で返事をし、手を休めずに、着物を縫い続けていた。

私たち子供たちが布団に入ってからでも、隣の四畳半部屋には、明かりがずっと灯っていた。

私たちが起きる頃は、隣で寝ていた母の姿はなかった。台所のトントンという音でも目が覚めた。子供を育てるのが、私の生き甲斐とも語った母だった。

その母は、裁縫を毎日していたせいか、指が変形してリュウマチに悩まされていた。

妻は母から赤飯の作り方や魚の焼き方を、「おかあさん、おかあさん」と言いながら教わるようにもなり、体重三十六キロになってしまった寝たきりの母を抱えながら、三日に一度は、お風呂に入っていた。

仕事から戻ると、まず、ベッドで伏せている母の部屋に行った。そのあと、妻と息子が部屋に入ってきて、家族四人で今日何が起こったかを話したり、テレビを観たりの日々が続いた。

その母は、心身ともに衰え出し、高齢者ホームに入ることになってしまった。

息子が土浦支援学校に通うようになって、一年が過ぎたある日のことだった。夕食を終え、彼を寝かせたあと、居間でお茶を飲みながら新聞を読んでいると、妻がドイツの母からの手紙を見せた。

そこには、義母の住んでいる五階建ての家の三階が数カ月したら空くとのことが書かれてあった。遠回しに私たちが、そこに住んではどうかとも記されていた。それを読み終えたあと、彼女に、

「お義母さんは、体が弱ってきたのだろうか」と訊くと、

「そんなことないと思うわ。ただ、その手紙に書いてあるとおり、三階に住んでいる家族が引越しをするそうなの」

と答え、さらに続けた。

「大家さんが、母の娘夫婦が住むようなら、家賃は半額でいいわと言ったらいいの」いつもとは違う、低い声である。そのあと、黙り続けていた。

少ししてから、彼女が口を開いた。

「この手紙を一週間前に受け取ってから、ミヒヤエルのことを考え続けたわ。このままここで教育を受けさせていいのかと。そうすると、肯定的な答えが、わたしのなかで見つからないの」

ゆっくりと自分にも言い聞かせるように言った。

驚いた。今、やっとこの土浦の地で生活ができるようになって、これから本格的におもちの製作活動に取りかかり、障がいのある人たちと一緒に働き、彼らのために作業所を

開設しよう思っていたからだだった。

彼女の目をじっと見つめながら、

「このことはよく考えてから、お互いよく話し合ってから決めよう」と、言った。彼女は肯いた。

それから数日間、考え続けた。よくよく考えた末に、妻は言い出したのだろう。今までグチや不満を何一つ口に出さず、怒った顔を見せたことのない彼女だった。よくやってくれた彼女だ。もう限界なのかも知れない。ダウン症候群のなかでも、重度に入る息子を異国の地で七年間育て、私の母を二年間介護し、経済的困窮を虐げさせたのだ。

義母の住んでいる家の三階が空くということは、何かの縁があつてのことかもしれない。息子を中心にして動いている私たち家族だ。彼が活動し易いようにしなければならぬ。ここ土浦での本格的な作業所づくりはできなくなるが、ドイツにいても福祉的な活動はできるだろう。おもちやライブラリーも軌道に乗りつつある。自分がいなくても大丈夫だろう。

また、浜松で、私の願いになにひとつ反対もしないで受け入れてくれた彼女だ。それに、私と知り合い、日本行きを躊躇なく受け入れてくれた彼女なのだ。未知の国に住む覚悟で来たのだ。今、ここで彼女の望みをきかなければいけない。

それから妻としばしば語り合ったのち、テュービンゲンに移り住むことを決めた。決心してから出発までの半年間、ドイツでの生活がどのようになっていくかの不安はなかった。寧ろ、新しい地での挑戦だと思うようになった。

ただ、まだよく知らない義母との一緒に暮らしが、どのようになるかと少し気にはなかった。が、不安を抱くほどではなかった。

第八章 三世代一緒に暮らし

テュービンゲンに住みはじめると、ミヒヤエルは市郊外にある養護学校に通うようになった。日本での八年間の生活から、ドイツの暮らしに移った彼だったが、大きな支障もなく過ごしていた。

「ドイツではわたしが仕事をするわ」

妻がそう主張したので、それを受け入れ、今度は私が家事と子供の世話をする主夫（ハウスマン）となった。

主夫をしながら、時間があると、福祉に関するミニ情報誌を日本の知友たちに、定期的に送る活動をするようにもなった。また、日本から福祉関係の人たちが来ると、こちらの高齢者ホームや障害者施設を案内することもはじめた。

新しい住まいは、大きな五階建ての三階部分である。二階には、七十六歳の義母が暮らしていた。彼女は自分の衣類などは手で洗濯するが、それ以外の家での活動は常に私たちと一緒にある。

四人で暮らすようになって、二年が過ぎたある日の午後のこと。ミヒヤエルが一人で家から百五十メートル離れたパン屋に、夕食のパンを買いに出かけた。

いつもは十分で帰ってくるのに、二十分が過ぎても戻ってこない。心配となり、パン屋

に行き、

「息子が、パンを買いに来ませんでしたか」と、娘さんに訊いた。

「あれ、ミヒヤエル君なら、もう十五分も前に帰りましたよ」不思議そうな顔で答えた。

「おかしいな。家にまだ戻ってないので」

「彼なら、店から出て、マルトクのほうへ向かいましたよ」

それを聴き、急いで広場に行ったが、彼の姿を見つけることができなかった。その周辺をしばらく捜したが、いなかった。ひよっとしたら戻っているかもしれないと思い、家に帰った。

居間に入ると、ソファーに浅く腰かけていた義母が立ち上がった。

「ミヒヤエルはいましたか」

「いいえ、どこにもいないのです。パンを買って、店から出たのですが」

「変ですね」

義母は心配そうな顔つきで窓辺に寄って、通りに目をやった。

妻の職場に電話をかけようとしたが、もう一度マルトク広場の周辺を捜してみようと思いい、義母に、

「ミヒヤエルを探してきます。どこからか、連絡が入るかもしれませんが、電話番号をお願いします」

と、言ってから外に出た。

二十分ほど捜し続けたが、彼の姿を見つけないことができないでいた。仕方なく家に戻り、妻に電話をかけることにした。

ミヒヤエルが帰ってこないことを話すと、彼女が声を上げた。

「わたしから、警察に連絡するわ。すぐ、そちらへ行くわ」

十分後、自転車に乗って、妻が家に戻ってきた。ハアハアと息を切らしていた。その彼女に事の経緯を詳しく話した。と、彼女は、「自転車で彼を見つくるわ」と言い、外に出た。私も再び外に出ることにした。

捜している間、頭に浮かんでくるのは、彼が車に撥ねられて今ごろどこかの病院に運ばれているのではないだろうか、ネッカー川に落ちたのではないだろうか、誰かに連れ去られたのではないだろうか、バスに乗って遠くまで行ってしまったのではないだろうかという暗いことばかりである。

ミヒヤエルはこの街に大分慣れてきたので、将来一人でパン屋へ行き、パンを買って行くことができるようにと半年前から訓練をしていた。今まで四回試みて、成功していたのに、今回はどうしたことか、戻ってこない。

三十分以上も街のなかを歩き廻ったが、彼を見つけないことができないでいた。仕方なく家に戻ると、居間で妻と義母とが落ち着かない表情で立っていた。それを見て、彼がまだ見つかってないことがわかった。

「どこへ行ってしまったのだろう」

「ミヒヤエルが街のなかで迷子になったのは、今回で三度目になるわね。今まではすぐに見つかったのに。あの子、どこへ行ったのかしら。もう三時間が過ぎているというのに」

「警察からの連絡を待つしかないのか」

「そうね。でも、もう一度をさがしてくるわ」

妻はそう言うてから、再び外に出た。そのあとを追うようにして、私も車で郊外を捜そうとした。車で見つけ出すことは、ほとんど期待できないのだが、居ても立ってもいられなかったからである。

三十分してから家に戻ったが、どこからも連絡が入っていなかった。妻も戻ってきた。日は少しずつ傾き、夕闇が迫りはじめていた。春になったとは言え、夜空の下はまだ寒い。私たち三人は、受話器に目を注ぎ続けた。

一時間が過ぎた。重い空気が流れ出した。と、電話のベルが、「リンリン」と鳴り響いた。私たちはお互い目を見交わした。妻が受話器を取った。

「ハイ、ハイ、そうですか。でも、まだ発見できないのですね。パトカーは一台ではなく、数台でさがしているのですね。私たちも、そちらへ行きましようか」

私と義母は、彼女を見つめ続けた。

「ええ、わかりました。では、家で連絡を待ちます」

そう言うて、妻は受話器を置いた。

バスの車掌がミヒヤエルらしき子を街郊外で降ろしたとの通報が警察に入り、今その周辺を捜索しているとの知らせだった。それを聴き、再び車で捜しに出かけようかとしたが、妻が警察の連絡を待ったほうがよいと言ったので、それに従った。

二十分が過ぎた時である、再び「リンリン」と鳴った。妻が受話器を取った。

「見つかったのですね。わかりました。すぐ、そちらへ行きます」

私と妻は、義母を家に残して車で警察署へ向った。

あたりはもう暗い。車中、私たちはほとんど話をせずに、「よかった、よかった」とお互いに数回言っただけである。極度の心配から解き放された安堵感、このような時は、そのことばしか出てこなかった。

十分もしないで警察署に到着して、入り口のインターホーンで私たちが来たことを告げると、厚いガラス戸が開き、係りの人が私たちをミヒヤエルのいる部屋に導いてくれた。

ドアを開けると、長椅子に腰かけていたミヒヤエルが私たちを見た。妻が足早で彼のところに寄った。と、彼は、「ママ、ママ」と言いながら、手に持っているパンの袋を指差した。寒いところにいたのか、鼻水が出ていた。そのミヒヤエルを、妻は包むようにして抱いた。

警察官が事情を話し出した。彼はバスに乗って終点で降り、森の入り口付近をブラブラと歩いていたらしい。もし森のなかに足を踏み入っていたら、捜し出すのが難しかっただろうと語った。

家に戻ると、義母が待っていた。ミヒヤエルはおばあさんの姿を見るや、大きな声を出して駆け寄った。

「おばあさん、おばあさん」

「どこにいたの？」

優しい声を出しながら、義母は彼を抱いた。ミヒヤエルはおばあさんの胸に顔をあて、にっこりと笑い返した。少しすると、義母が私たち三人に、

「みんな、お腹が空いたでしょう。今日は、わたしが夕食の支度をしましたよ」

と言つてから、キッチンへ向つた。居間のテーブルには、彼女が用意したお皿がすでに並んであつた。

ジャガイモ・スープの鍋を持って、義母が居間に入つてくると、ミヒヤエルは今までのことはすっかり忘れてしまつたかのように、にこにこ顔となつた。

湯気が昇っているスープとパンを前にしての四人の夕餉となつた。

「ミヒヤエルが買つてきた今日のパンは、何か特別な味がするわね」
妻がスープを飲みながら言つた。

「苦かったり、甘かったり、複雑な味だね」

それに相槌を打つと、義母はスープを飲んでいるミヒヤエルを見ながら、

「これを食べたら、明日はまた新たな一日のはじまりとなりますね」

と、私たちに言つた。それを聴き、彼女に、

「夕食を作つてくれて、ありがとうございます」

とお礼をのべると、七十八歳の義母は微笑んだ。

昨日の迷子の出来事を忘れたかのように、ミヒヤエルは朝食を摂つてから養護学校に行き、午後の授業を終えて帰宅した。彼は勢いよく木の階段を上り、おばあさんの部屋に入つた。

「おかえり、ミヒヤエル。今日はどうだったの？」

「うん」

笑顔で迎えたおばあさんにそう答えてから、彼はカバンを床に下ろし、テーブルに着いた。目の前には、おばあさんがいつも用意したパンとジュースが置いてあつた。早速、そのパンを食べようとした。

「まず手を洗いなさい」

私にそう言われると、彼はバスルームへ行き、洗つた手を私に見せてから、パンを食べはじめた。美味しそうに食べている彼の姿を目にしながら、義母の部屋から出た。

三十分ほどすると、ミヒヤエルが満足した表情で階段を上つて、私のところに来た。それを待つて、夕食のおかずを買うために外に出た。今晚の献立は、彼と義母が好きなマールポ―豆腐である。

近くの肉屋に行くと、いつもの娘さんがミヒヤエルにハム一枚を渡した。彼はそれを口に入れて、「ンケ」と声を出した。ンケとはダンケ（ありがとう）のことで、日本での八年間の生活は、彼のドイツ語発達にかなりのマイナスとなつていた。娘さんが、「学校はどうだった？」と訊くと、ミヒヤエルは、「うん」と答えた。まだ単語を二語以上並べて言うことができない彼だった。

買物を終えてから、いつものようにキッチンに立つた。ドイツの夕食はパンにハム、チーズをのせ、火を通さないのが一般的である。しかし、日本ではいつも暖かいものを食べていた私だったので、夕食もつねに湯気が出る料理を作つていた。

一時間ほどで料理ができ上がり、居間に入ると、ミヒヤエルとおばあさんがボール投げをしていた。義母は腰を折り曲げて、ボールを取つては彼に投げ返している。ミヒヤエルは不器用なこともあつてか、おばあさんのところになかなか小さなボールが届かない。その二人の様子を見ながら、

「おばあさんのところに、しっかり投げなさい」

と彼に促すと、義母は笑いながら、

「いいから、いいから」

と言つて、柔らかいボールを拾つては孫に投げ返していた。相当な忍耐力がないと、ミヒヤエルの相手はできないだろう。ミヒヤエルに、

「料理ができたので、ボール投げは止めにして、お皿を並べるように」

と伝えると、彼はおばあさんと一緒に皿を並べはじめた。

妻がテュービンゲン駅でのミツシヨンの仕事を終えて家に戻ったところで、賑やかな夕餉となった。

妻は、「おいしい、おいしい」と言いながら、ミツシヨン室に訪れてくるホームレスの人やお腹の減った人にコーヒーやスープを出したり、障がいをもった人や高齢者の乗り降りの際に、手をさしのべたりする今日一日の仕事内容を生き生きとした顔で話し出した。

テーブルを囲んでの夕食が終わり、いつものように四人でゲームをすることになった。ミヒヤエルは小さい時分から、ゲームをよくしていたので、ゲーム遊びが好きだった。その間中、まるでおばあさんが恋人でもあるかのように、隣に座る彼である。

義母はミヒヤエルと二人でよくゲームをしたり、ボール投げをしたり、また絵本を読み聞かせ、孫の彼という時間が楽しそうで、いつも和んだ顔をしていた。

そのような姿を見ると、この人はなんて素晴らしい人なのだろうと次第に思うようになった。しかし、ここに至るまでの間、悩みもした。彼女と住みはじめた頃、三代同居の難しさを味わった。

あれはテュービンゲンに住んで、一年が過ぎたある日のことである。家を出て、しばらくしてから妻に電話をかけた。

「あなた、今どこにいるの？」

いつもと違い、高い声を出す妻だった。

「知人宅にいる」

「急に家を出て行ったので、心配だわ」

「……」

「ねえ、家に帰って来て！ あなたが家を出た理由は、大体わかるわ。お互い胸を開いて話し合いましよ。もし必要ならば、母と一緒に」

「あと二日ここについて、考えてみる」

ミヒヤエルの様子を聴いてから受話器を置いた。そのあと、彼女が言った「ねえ、帰って来て！」のことが耳から離れなかった。それに、土浦でパーキンソン病とリュウマチの母を二年間看てくれた彼女の姿も浮かんだ。ひとりではお風呂に入れない細身の母を、抱くようにして一緒に入浴し、慣れぬ日本食を母に作り、異国で障がいのある子を抱え、よくやってくれた彼女だ。当時三代同居の暮らしは、大変だったことは確かだ。グチ一つ言わなかった妻に、再びハツとさせられた。

二日後、妻と長時間に亘つて話し合った結果、朝食だけは義母ひとりで二階の自分の部屋で摂ることになった。たしかに、三代同居の暮らしはそう容易ではなかった。でも、それ以上に、ハウスマンとしての存在に意味を見出していなかった自分を知ったのだった。そのことが妻との話し合いではつきりした。これはなんとかしないといけない、自分自身が生き生き暮らすようにしなければならぬと思ひ、家に戻った。

それからと言うもの、ハウスマンの活動に積極的に意味を見出そうとした。と、毎日料理や洗濯や子育てをしていることが、ゴミや食物や健康の問題、それに自然環境問題にも通じていると思うようになったのである。家での活動は人間が生きていくうえで、根本的な活動だと気がついたのである。

そうしたなか、社会および地域と結びついた自分を発見し、新たな意識を持って、ハウスマンの活動を続け、それを一層深めようとした。そうすると、自分は家族との関係のなかで暮らしているのを深く自覚し、ところが満ちてきて、また義母との関係でも、彼女とより繋がりが強くなってくるのだった。ハウスマンに、自分は賭けるのだと思うようになった。自分の生命を誠実に生き生きしていくためにも。

義母は七十八歳の誕生日が過ぎた頃から、体の衰えを少し見せはじめた。でも、頭と精神の働きは活発で、月に数冊の本は読み、手紙をまめに書き、それに電話でよく友人たちと話をしていた。月々の電話代は、私たちの二倍は支払っているだろう。

心臓が弱いので、薬を二十年以上飲み続けているが、買い物は毎日出かけ、自分の衣類は自分で洗い、私たちの衣類までもアイロンをかけてくれる。その彼女が、ある日、「今の時間は神からの贈りもの」と言ったことがあった。それを聴いた時、数カ月前に起こった一つの出来事が浮かんだ。

私が家の前を車で通り過ぎた時である。ふと、バックミラーをのぞくと、誰かが玄関の石段から、よろけるように倒れるのが映った。もしかしたら、義母かも知れないと思い、車から急いで降りて、百メートル先の家の前まで走った。

玄関前には、想像したように彼女が倒れていて、頭から血が多量に流れ出ていた。驚き、駆け寄った。と、その時だった。立襟の白衣を身につけた人が急に現れて、素早く出血しているところを白い布で押さえ、それで出血は止まった。

その人が一体どこから来たのかとあたりを見回すと、一台の救急車が数メートル先で停まっていた。白衣を着たその人は、その救急車に同乗していた医者だった。義母が倒れるのを目の前で見て、駆けつけたのである。

彼女はすぐにその救急車に乗せられて大病院に運ばれ、深く切れた頭の傷を縫ってももらい、その日のうちに家に戻って来ることができた。もし救急車が家の前を通らなかつたら、多量の出血でどうなっていたらどうかと青ざめた。

救急車があたかも彼女が倒れるのを知っていて、そこに待機していたかのように思えた。滅多に救急車が通らない道路である。これは偶然のこととは考えられなかった。何かを守ってくれたのだろうかと思った。

義母は数日間、ベッドに横たわり、知り合いの人が見舞いに来ると、いつも笑顔で対応していた。彼女は若い時分から、「りんごのおばさん」と皆から呼ばれ、笑うと頬が赤くなるのである。その顔を目にする、誰でも和らいだ気持ちになるのだった。

和顔愛語という語がある。その語は義母にぴったり合うだろう。人に会う時に自然と生じてくる彼女の笑顔。と同様に、話すことばにも優しさがあつた。そのことを一緒に暮らしているとしばしば感じるのだった。

その例として、月に一回の割でいつものホームレスの人が、五マルクほどの日用品を持って家に来ると、義母はその人を居間に入れて、三倍近くの値でそれを買おうとすると、

彼は、「それは、もらい過ぎです」と言って、そのお金を受け取らない。これなどは、彼女の真心のこもったことばが、相手に通じていたからだろう。

またこんなこともあった。義母の親しくしていた人が自殺し、そのことを非常に悲しんでいた。彼女の部屋に入ると、ランプの下で聖書を読み、祈っている姿を何度か目にした。その人の死は、けして他人ごとではなく、自分自身の命と重ね悲しんでいた。人を思いやる彼女の心に強く打たれたものだった。

年齢を重ねて行くと、人は頑固になり、おごり高ぶると聞く。しかし、義母はそうではない。何事においても「ありがとう」を言う。また、彼女は私たちと一緒に夕食を摂るのだが、料理したものはすべてきれいに食べてくれる。そして、夕食後は、私たちと一緒にテレビを観たり、ゲームをしたりする。それが終り、寝るために自室に戻る際は、私にかかわらず、「ありがとう。ヒデジ」と声をかけてくれるのである。

それを聴くと、こちらこそお母さんと一緒に食事ができ、夕方の団欒の時間を共に過ごすことができて、「ありがとう」の気持ちになるのだった。

また、このようなこともあった。ある時、居間に入ってきた蜂が窓から出られずにいたのを見て、義母はその蜂を自分の両手で包むようにして、外に放ったこともあった。私が、「刺されませんか」と訊くと、「今まで刺されたことはありませんよ」と笑顔で答えたのである。

そればかりではない。義母の部屋の天井にいた蜘蛛を追い払おうとしたら、「蜘蛛は人間に害をあたえませんよ。そのままがいいですよ」と言ったこともあった。優しい心を持った人のことばだと思った。

その義母と、半年後、隣の国である東ドイツへ訪れようとした。その日が来るのを待った。

第九章 東ドイツへの旅

「これから東ドイツか、どのような社会だろう？」

車のハンドルを握りながら、隣に座っている妻に訊いた。

「西側とは、まったく異なる世界よ。驚かないでね」

「そんなに違うのか、興味が湧くな。とくに、きみの友人の家に泊まることになっているから、彼らの生活を垣間見ることもできるだろうし」

「とてもいい家族たちよ」

弾んだ声で言った。後席では、義母がミヒヤエルに絵本を読み聴かせている。その彼女に、妻がうしろを振り向きながら、

「お母さんが最後に彼らの家へ行ったのは、もう何年前のこと？」
と、訊いた。

「ヒデジと初めてベーターテルで会ったときが、最後の東ドイツ訪問だったから、十二年が経っているわね」

「でも、その期間、お母さんは毎年のクリスマスには、彼らにプレゼントを送っていたわ

よね。そのころ、わたしは日本に住んでいたの、まったく連絡をしていなかったわ。だから、久しぶりに会うことになるわ」

二人の会話に、加わった。

「お義母さんは、何を送っていたのですか」

「チョコレートとかコーヒー、それから良質の布などを郵送していましたね。でもね、送った相手に、全て届いたわけではなかったのですよ」

「どうしてですか」

「小包も手紙も五回に一回の割で、友人たちに届かなかったわね。東側では、郵便物が配達される前に、かならず検査があつて、そこで止められてしまうこともあるのですよ」

それを聴いていた妻が、高い声を出した。

「電話だつてそうだよ。友人とやつと電話が通じてても、そのほとんどが盗聴されているわ」

「そんなことが許されるのか」

「東側の市民が西側の人と接触を持つと、スタージーが動くのよ」

「秘密警察のことだね」

「ええ、そうよ。私たちの行動全て、彼らに知らされるようになっていくわ」

「そうなのか」

車は予定通り、テュービンゲンから三時間半で東西ドイツの国境線に到着。検問所には、十数台の車が列をなしていた。

入国手続きはかなりの時間待たされると覚悟していたのだが、予想に反して三十分ほどで私たちの番となり、パスポートを提示するだけで終わった。

意外と簡単に入国することができたので、

「いやに簡単に、入国できたね」

と、妻に言った。

「今日は天気がよいし、検査官は機嫌が良かったのではないかしら。それと、申請書に友人宅訪問と書いてあったし、高齢の母も一緒だし」

彼女はパスポートをハンドバックに納めながら、淡々とした声で応えた。何回も東ドイツに来ていたので、慣れているのだろうと思つた。

検問所近くの監視台には、数名の見張人がこちらを双眼鏡でのぞいていた。そこも何事もなく通過し、走り続けた。

「道路の幅は狭いので、対向車にも気をつかうし、走りづらい道だ」

「気をつけてね。ゆっくり走るのが一番よ。追い越しは、しないほうがいいわ。ここは西側の道路と違うのだから」

私の車は中古車だが、性能は良い。東ドイツ製の小さな箱型車がのろろと走っていると、つい追い越したくなる。そうとすると、対向車線より黒い煙を出しながら、トラックが走ってくるので危ない。妻の言うとおおり、ゆっくりと走るのがよさそうだ。どの車も、マフラーから灰色の排気ガスを出していた。

後席に座っている義母に、

「ガスの臭いが酷いので、窓を閉めたほうがいいですよ」

と勧めると、ゆっくりと窓を閉めながら話し出した。

「これから訪れる友人宅では、数年前にやつと自分の車を手に入れたのですよ。新車を申

し込んでから、十年は待たねばならないと聞きましたね。お金があっても、ここでは品物がないのですよ」

三十分近く走っていると、村らしきところに入った。道路は、十センチほどの立方体の石が敷き詰められ、その石が所々欠損していた。それを、避けるように運転を続けた。

「独特の臭いがしてくるな」

「石炭の煙のせいよ。ほら、どの家の壁も黒っぽいでしょ。石炭の煤が、長い間にこびりついてしまったのよ」

「今は夏、これが冬だったら、もっと臭いだろうな」

家の壁がところどころ剥がれた家並みを見ながら、ハンドルを握り続けた。

過ぎ去っていく景色は、どことなく小さい時分に目にしたような光景だ。垣根の腐った板、何本も並ぶ木の電信柱や古い型の二両の箱電車など、日本の三、四十年前の姿である。

さらに走り続け、やつのことで、ドレーズデン市郊外のレナーテの家に到着。

呼鈴を押すと、レナーテと夫のヘルムートがドアから出てきた。妻と義母にとっては、十二年ぶり、お互い肩を抱き合つての再会である。

夫妻の住む二階へと通されたあと、夕食となった。

私たちはレナーテの手作り料理を食べながら、日本での生活や義母の日本訪問、それにミヒヤエルのことなどを話し続けた。

二時間もすると、長時間運転をしていたせいだろう、疲れを感じ出す。義母も疲れた様子を見せはじめた。そこで、私たち三人はベッドへ向つた。一方、妻は友人夫妻と夜遅くまで、語り合っていた。

翌朝、目を覚ますと、四十六歳のエンジニアのヘルムートはすでに勤めに出ている。私たちのために休暇を取ってくれた、看護師のレナーテと一緒に朝食となった。

彼女には三人の子供たちがいて、二十一歳になる長男には、もう六カ月になる赤ちゃんがいた。一般に、東ドイツでは若い年齢で結婚し、共働きとなるようだ。次男は十七歳で職業訓練学校に通っていた。それに、十四歳になる中学生の娘もいた。

レナーテ家族が住んでいる家は、外壁が所々剥がれた四階造りの建物だ。そこに階を違えて四大家族が暮らしている。浴室は、一階に一つあるだけだ。それを四大家族が共同で使用するので、急に誰かが、「入浴したい」と言ってもできない。それに、石炭と木で湯を沸かすので時間がかかるのだった。

トイレは各住いのなかにはなく、外の階段に取り付けてある便器に座つての作業だ。ミヒヤエルもその便器に座つて用を足すのだが、油断すると、数メートル下の穴蔵に垂直に落ちてしまうだろう。私か妻が付き添つての排便となった。

朝食を摂ってから、私たちはレナーテとスーパーマーケットへ買い物に出かけた。

どの棚も品不足で、チョコレートやコーヒーなどは置いてない。店内は殺風景なものだ。バターやパンやジャガイモなどの日常生活に要する食料品、それに新聞などは、非常に安く売られていた。しかし、テレビと洗濯機は高く、日本製の二万円のラジオが、二十万の価格がついていた。

午後は、ドレーズデンの市内見学となった。

道幅の広い大通りを歩いている市民の姿に、なにか生き生きしたものを感ぜられない。質素な服を着た人が、変化のない大きな建物に呑まれているように映った。

それに、芸術的な建物が破壊されたままで残っている姿は、なにか不気味だ。また、市内を流れるエルベ川の水は汚く、紙や木片が至るところに浮いている。それらを見ながらの歩きとなった。

義母は、テュービンゲンからの車の旅で疲れが出てきたこともあって、市内見学には行かなかった。しかし、明日、訪れるレナーテの母が一人で住んでいる家には、私たちと一緒に訪れることになっていた。

翌日、十四年前に夫に先立たれて以来、ひとりで一戸建ての修理された家で暮らしている、八十五歳になるレナーテの母宅へ向った。

十五分ほど家に着くと、とても元気そうな顔で、老婦人が私たちを迎えてくれた。

簡素なキッチン兼居間に入り、古い木造りの椅子に腰かけると、夫人がこの地方独特の訛りのある声で話し出した。

「三部屋あるこの家で子供八人を育て、二十六名の孫と十四名のひ孫がいるのですよ。これ、裏の畑で採れたラズベリーといちごで作ったものです。どうぞ、食べてください」

老婦人はそう言って、ケーキを私たちのお皿に盛り出した。先に来ていたレナーテが、その様子を見ながら話し出した。

「とても元気でしょう。母は毎日、裏の畑で野菜や果物を作っているわ。孫やひ孫が大勢いて、一人ひとりの誕生日には、かならず、お祝いの連絡をするのよ」

それを聴き、夫人に話しかけた。

「ひ孫の誕生日まで覚えているのですか」

「みんな覚えていますよ。子供たちや孫が毎週末には来るので、そのときは、わたしがねえ、ケーキを作るのですよ」

老婦人はにっこりした顔で答えてくれた。それを見て、思った。この方は一人暮らしだが、家族との定期的な交流もあり、独りぼっちという気持ちでここに住んではいけないのだろう。机の上には毎日配達されてくる新聞が置いてある。世のなかの出来事にも、関心を向けているに違いない。

ケーキを食べ終えた時、妻が老婦人に、

「裏の畑を見せてくれませんか」

とお願いと、腰が曲がった姿勢で私たちを庭に導いてくれた。

約百平米の庭には、トマト・キュウリ・インゲン、それに各種のいちごがなっていた。妻と義母は、いちごを手で採り、それを口に入れていた。

レナーテの母宅に三時間ほどいてから、私たち四人は再び、車に乗った。

助手席の妻が、話し出した。

「レナーテの母は、自分自身の家に住んでいるのよ。古くてもきれいに修理されていたでしょ。大体、東ドイツでは、ほとんどの人が国から家を借りているわ。だから、家の一部が壊れても、自分の家ではないので修理をしないわ」

「そういえば、レナーテが住んでいる家の外壁も所々剥がれていたな」

社会主義体制の暮らしぶりが、少しずつ見えてきた。明日は、レナーテが以前働いていた、老人ホーム訪問である。

ミヒヤエルと義母をレナーテ宅に残して、妻と一緒に見学を申し込んでいた、老人ホームへ向かった。

車のタイヤが傷むようなデコボコ道である。

「昨日訪れた八十四歳のおばあさん、元気だったね。生き生きしていたよ」

「母と五歳違うのかしら」

「あのように一人で自立しながら暮らし、子供や孫たちが毎週末に訪れ、社会との接触を保ちながら、過ごしているのはいいね。それに、自分の生き方を決して否定的にとらえないように思えたよ」

昨日の老婦人の姿を思い出しながら、言った。

「でもね、ヒデジ。こちらではアルコール依存者が西と較べると倍くらいはいるのよ。それに、高齢者の自殺率も極めて高いと言われているわ。西側みたいにホームヘルパー制度はないし、子供たちは皆、共働きになるから、親の介護まではなかなか手がまわせないのよ。だから、年をとると、老人ホームに入るか、あるいは体が丈夫なうちは、一人で家のなかで暮らすかだわ。でもそうね。あの方はとても元気で、一人暮らしを楽しんでいるようにも見えたわね」

「お義母さんも、わたしたちがテュービンゲンに来る前は一人で暮らしていたね。今だって社会とのコンタクトは多くあるし、快活に過ごしているよね」

「そうね」

彼女は肯いた。

ゆつくりと走り続け、三十分程で住宅地内にある大きな古い造りの建物に到着する。

車を降りると、石炭の臭いが鼻につき、空気は淀み、石とレンガで造られた二階建ての建物は、石炭の煤で黒くなっていた。

建物内に入っていくが、受付の窓口が見つからず、人の姿はない。廊下の壁は、所々剥げ落ちていた。さらに奥へ進んでいくと、調理室らしき前に出た。

その室に入ると、七名のお年寄りが椅子に座って、黙々とジャガイモの皮を剥いていた。妻が、そのうちの一人に近づいた。

「ここに見学に来たのですが、係の人はいませんか」

「ちよつと待っていて下さい。ホーム長を呼んで来ますから」

そう言っ、お揃いの簡素な服を身につけた八十歳ぐらいのお年寄りが、室から出て行った。

それから五分ほどすると、ホーム長が私たちの前に現われた。彼から話を伺うことになった。

東ドイツの老人ホームのなかでキリスト教組織が運営しているホームは、十五パーセント。そのうちの一つがこのホーム。入所者は約七十名。介護職員は十五名。その内訳は、看護師五名と専門資格を持っていない人たち。ホームにはお年よりばかりでなく、アルコール依存症や精神を患っている人も一緒。費用は一人につき千東ドイツマルク。本人負担分は、年金額四百マルクから百十マルク払い、残りは国の負担などを話してくれる。

その説明が終わったあと、建物内をホーム長と一緒に歩くことになった。

建物内は薄暗く、廊下は狭いうえに所々壁が剥がれ落ちて、色もくすんでいた。どの室も狭く、そのなかにベッドが二つ、四つ、六つと並んでいるだけだった。トイレは廊下に

あつて、皆と一緒に共同で使用する。

私たちは、お年寄りが使用する浴室に入った。

白いペンキで塗られた鉄製の長い湯船が、真ん中に置いてあるだけで、ペンキは所々剥がれていた。一度に大量のお湯を沸かす設備がないため、六週間に一回の割合で、入浴（シヤワー）するのである。

また、洗濯機がないので、その湯船で手を洗う。乾燥機もないから、雨天の日には、その浴室内で乾かさねばならないのだ。

洗濯はお年寄りと職員が一緒に行い、調理も共同で作るのだ。朝六時から夜九時までは職員がいるが、その以後はいない。緊急ベルはどこにも付いてない。

ホーム長は私たちに色々と話してくれたあと、こんどは一つの小さな集会室に入った。牧師をしていた彼は、急に明るい口調で語り出した。

「昨日は週三回開いている『聖書を読む会』が、ここでありました。ほら、椅子が輪になってたくさん並べてありますよね。ここに住んでいる人のなかには、ヒットラーの時代に批判的な立場の人もいます。また、教会は今の体制と相容れないこともあつて、批判的に生きている人も多くいますよ」

少し間をおいてから、続けた。

「わたしはデンマークの高齢者ホームなどを見学したことがありました。そこでは、何事もパーフェクトのように見えましたが、でも、人間が老いていくという問題がありますね」私たちの目を見ながら、牧師はゆっくりと何かを確信しているかのように語った。

それを聴き、思った。たしかに、デンマークの福祉施策は建物や設備、それにどの制度をとつても、しっかり整っているように、このホーム長には見えたに違いない。でも、人間が老いていくということは、人間全てに共通する問題で、それに対処するには、目に見えるものだけでは解決できるものではなく、毎日の心の活動をどのようにしていくかが大切なのであり、そのためには一日一日を共に生きていくなかで、お互いが思いやる心と感謝する心で過ごすことが、大切なのだと言いたかったのではないだろうか。

しかし、そうだとすれば、彼ら一人ひとりに生き生きしたものがあつてもいいのだが、それは感じられなかった。

二時間近くの見学が終わり、別れ際、日本の扇子と人形を彼に手渡し、献金をしてからホームを出た。

車のなかで、妻に話しかけた。

「ホームには車椅子が二台しかなく、その二台も壊れていたね。寝たきり状態の人も何人もいたし、リフト設備もないから、職員も大変だろうな。職員の数も少なく、西ドイツとは、あまりに違っているので比較はできないが、どう思った？」

「そうね、わたしが想像していたよりもよかったと思うわ。レナーテが部屋に入ると、尿の臭いがするかも知れないと言っていたけど、そうでもなかったじゃない」

「いや、どの室も変な臭いがしたよ。紙おむつでなく、布おむつだったね。洗濯機や乾燥機がないから雨の日は大変だろうな。それと、看護婦が話してくれたけど、注射針は熱湯消毒して何回も使うと」

「そうね。でも、職員とホームの住人が共同で掃除をしたり、調理したり、あのホーム長は、何度も私たちに、『共同で何事もする』と話してくれたわね」

「うん、そうだね。でも、その共同とは、そこに住むお年寄りがそうせざるを得ない為だろう。辛いときもあるのではないだろうか。彼らに、何か生き生きしたものを感じなかったよ」

「外から見ると、そう思えるかも知れないわね。でもね、ヒデジ。あの人たちは信仰を持ち、それが支えとなって暮らしていると思うわ」

彼女は続けた。

「今の東ドイツ体制のなかで、キリスト教徒として生活していくことは大変なことなのよ。牧師の子供という理由で大学に入学もできないケースもあるし。それと、あなたが希望した、知的障がいの人たちが暮らす施設見学は、結局、断わられたでしょう。それには理由があったのよ。昨日、レナーテが、そのわけを話してくれたわ」

「どんな？」

「ここでは共稼ぎの親が多く、障がいのある子を持つと、養護学校があまりないので、家にいるか、または収容施設に入ることになるらしいわ。その施設というものが、酷いらしいの」

彼女が何を言うのか、耳をそば立てた。

「レナーテは看護師だから、その分野の情報には詳しいの。わたしはそれを聞いて驚いたわ。施設には、たしかに数人の職員がいるけれど、ほとんどが資格のない人たちで、彼らがそこで暮らしている人たちと接触する時間は、食事と薬を飲ませる時だけなのよ。もちろん、セラピーなどはなく、庭に出ることもなく、ベッドの上で寝転がっているらしいわ。室内は、おしっこ臭いがするらしいわ」

「それは酷いな。親たちは、なにも言わないのだろうか」

「それがここでは、親たちが集まる親の会の組織はなく、親たちはなにも言えないのよ」

「そんな、ばかな。親が言っつてこそ、行政は動くのに」

怒りが込み上げてきて、ハンドルを握る手に力が入った。

ここの市民たちは自由を奪われ、国家に統制を受けながら暮らしているのが、はつきりと見えてきた。これが社会主義体制の社会なのかと思いつつ、レナーテの家に戻った。

夕方、レナーテの次男であるカールの十八歳の誕生日である。

その会に、私たちも呼ばれ、一緒に祝うことになった。妻はカールの幼児洗札の代母でもあるので、とくによくこんでいた。

その彼が、西ドイツへ亡命してこようとは、思いも寄らぬことだった。

第十章 壁が崩壊した日に

東ドイツを訪問してから、一年が経った時だった。ドレーズデンのレナーテから、電話がかかってきた。

「息子のカールが西ドイツへ亡命して、今そちらに住んでいるので、連絡して会ってほしいわ」

妻は驚き、早速カールに電話をかけ、長々と話をしていた。

それから三週間経った一九八九年十一月九日、カールが来宅した。この日、まさかと思うようなことが起こった。東ドイツ人が西ドイツへビザ無しで、入国が可能となったのだ。この報は東西ドイツ国内だけでなく、世界の国々へ稲妻のように走った。朝からテレビとラジオで、絶え間なくこのニュースが流れ、ほとんどの人が感動の渦のなかにいた。

私たちの家でも、カールがやって来たこともあって感極まっていた。

「ベルリンの壁が崩壊した！ベルリンの壁が崩壊した！」

テレビのアナウンサーが何度も大きな声で叫び、それを耳にする度に、妻と義母はちり紙を手にして鼻をかみ、ドイツ人でない自分も、ベルリンの壁を自由に乗り越える若者たちの姿を目にして、胸が熱くなった。

半年前に東から西に亡命したカールは、目を凝らしながらテレビの画面をじっと観続けた。

妻が母に話しかけた。

「ベルリンの壁が築き上げられたのは、あれはいつだったかしら？わたしが幼稚園の教員養成学校に通い出した年だから」

「そう、あれは一九六一年八月十三日の夏だったわ。そのニュースを耳にしたときは、冗談だと思ったわ。当時のベルリン市長は、ウイリー・ブランドだったわね。前夜から少しずつ築き上げられた壁が、朝までには膝の高さまでに積み上げられ、その日の夜までには、人間の高さまでになってしまったわ。その様子を、ラジオのアナウンサーが逐次伝えていたわね」

義母は、いつもより声高に語った。

こんどは妻が、私とカールに当時の様子を話しはじめた。それを聴き終えたカールが、自分がどのようにして西ドイツへ亡命して来たのかを話し出した。

「十ヶ月前から、なんとか西ドイツへ亡命しようと従姉妹と話し合っていたのです。そのことを、両親や兄弟には伝えていませんでした」

「なぜ、話さなかったの？」

彼の目を正視しながら訊いた。

「秘密警察が動いたりしたら、僕は刑務所入りになりますから」

「でも、家族が知らせるわけではないだろうに」

彼は暫し黙ったあと、つぶやくような声を出した。

「だれかがふとしたことで、僕が亡命しようとしていることを知るかもしれません。そして、僕は」

少ししてから、彼がまた口を開いた。

「とにかく、従姉妹と一緒にハンガリーに入国し、ハンガリー国境を越えてオーストリアに入ろうとしたのです。でも、警備隊に見つかってしまいました。僕たちは死を覚悟していたので、取り調べは厳しいかと思っていました。しかし、意外なことに簡単に終わり、二日後、ブタペストの西ドイツ大使館に送られたのです。そこで亡命の申請をして、さいわい、受理されました」

自由を求めての亡命だった。

「とにかく、東ドイツにおいては、将来の希望は持てなかったのです」

そう言うことから、深いため息をついた。家族と別れての亡命、その胸の内は計り知れな

いと思った。

カールの話はなおも続いたが、眠くなってきたミヒヤエルをベッドに連れていかねばならない。義母も疲れを見せはじめた。そこで、二人と一緒に部屋から出た。

妻は、カールと夜遅くまで話し合っていた。

翌日、レナーテの来訪に、妻はこのほかよるこんだ。ビザ無しで西ドイツへの入国が可能になったので、早速、息子に会いに来たのだった。

ひとり車に乗って、テュービンゲン駅へ向った。

ホーム上で久しぶりに対面する親子。母は東ドイツ人、息子は西ドイツ人となつての再会である。二人は抱き合い、母は目に涙を浮かべていた。その情景を前にして、こちらの胸も熱くなつてくるのだった。

それから二人を車に乗せ、家へ向った。

居間に入り、母と息子は今まで起こったことなどを話しはじめた。最初は真摯な声で話していたが、時が経つにつれて、二人とも笑い声を立てるようになっていった。

私の家で三日間滞在したカールは、すでに西ドイツに来て機械工員として働いていたので、職場に戻らなければならない。

テュービンゲン駅での母と子の別れとなった。

母は、息子が乗った電車が見えなくなるまでハンケチを振り続け、電車が線路から消えたあとも、その方角を見続けていた。

ベルリンの壁の崩壊と、この母子の再会を目にして、もはや国家によって制限されずに、これからは、人間一人ひとりが自由に行き来できる時代になったのを知った。それが再び、逆戻りすることはないだろうとも思った。

それから一カ月が経った、十二月二十二日午後三時だった。西と東の両ドイツの首相が、ブランデンブルク門の下で握手を交わす歴史的瞬間となったのである。

この一九八九年の一年間に東ドイツから移民してきた人の数は、三十五万人だった。それから一年経った、一九九〇年十月三日、正式にドイツ統合となったのだった。

統一ドイツから一年半後、再びカールが私たちの家に遊びに来た。

前に会った時とは違って、どことなく元気がない。疲れている様子に見えた。

「何かあったの？」

ソフアーに腰かけている彼に、訊いた。

「友人のことが心配なのです。彼は、僕より三カ月も前に西ドイツへ亡命して来たのですが、ホームレスになってしまったのです」

心配そうな顔を浮かべて答えた。その時、妻がコーヒーカーップを持って部屋に入ってきた。

「その人は学校時代の友人なの？」

「いいえ、僕より二歳年上で、隣の街に住んでいたのです。彼は、東で自動車修理工をしていたので、こちらに来てはすぐに仕事先は見つかりました。しかし、そこを一年半勤めたあと、解雇されてしまったのです。それから仕事先を探したのですが、見つからず、自棄になってビールやワインばかり飲んで来たものだから、アルコール依存症となつてしま

い、借金も多くなって、今は路上のホームレスとなってしまうのです」

彼の話が終わった時、頭のなかに、テュービンゲンでも最近増えてきた三十名にもものぼるホームレスの人たち、とくに若者たちの姿が浮かんだ。

妻はカップにコーヒーを注ぎ、それをカールの前に置いた。

そのコーヒーを一口飲んでから、彼は語り出した。

「僕らが、東側からカバン一つで亡命してきたときは、二百マルクの歓迎金を国からもらい、住まいと仕事もそんなに困らずに、見つけることもできました。西側の人たちは、僕らを快く迎えてくれました。しかし、壁が崩されてから、東側から多くの人たちが職を求めてこちらに来たでしょう。そうになると、働く場もそう簡単には見つからず、失業率もどんどん上がってきましたよね」

カールは、コーヒーをまた一口飲んだ。

それを見ながら、彼に言った。

「政府は統合すれば、東西ドイツの市民生活、とくに、東部ドイツ市民の生活は良くなると言っていたが、そうはならなかったね。東部ドイツでは、三人に一人は今失業しているし、問題だらけだ」

隣国のやはり民主化路線を歩んでいるチェコの経済政策について語った。

妻は、私の話が終わるのを待っていたかのようにして、カールのほうに顔を向けた。

「そのような内容よりも、カールはもっと市民の、個人的レベルの話がしたいのではないの？ そうでしょ」

「いいえ、今の話とても勉強になりました。僕たち東側で育った者は、西側の市場経済がどのようなものか、まだよくわからないのです。だから、経済的にも精神的に困惑しているのです」

「でも、カールはこちらに来て、すぐに職を見つけ、工場で働いていたのよね。今は、老人介護の専門学校で勉強していると聞いたけれど」

「はい、最初の一年間は工場で働いていました。でも、将来に不安を感じたので、介護士の資格を取って、その分野でこれから働く積もりです」

「あなたはまったく新しいシステムのなかで自分の将来を考え、選択して少しずつ学んでいるのだから」

カールは肯き、そのあと、今までの憂慮に満ちていた顔ではなく、和らいだ顔で妻に話し出した。

「東側にいたところは、レストランに入ってもウエイトレスが来るまでじっと待っていたのですが、今はこちらからウエイトレスにサービスを求めています」

「カールは、今は西の人でもなく、東の人でもなく、統合後の新しい世代の人なのよ」

二人の会話に、口を挟んだ。

「いや、それはどうだか。カールの次の世代には、そのことが言えるかも知れないが。東の人が西側に溶け込み、西の人が東側の人と共に問題なくやっていけるには、社会主義体制が約四十年間続いたのだから、同じように四十年間はかかるよ」

「そうね、そうかも知れないわね」

妻がそう言った時、義母が居間に入ってきて、カールと握手を交わしながらソファアに腰かけた。

その彼女に言った。

「カールから、こちらでの生活ついて聞いていたところだす」

「そうだったの。わたしは先ほどまで、教会の婦人会の集まりで、旧東ドイツのスタージー（秘密警察）のことをテーマにした話し合いに参加していたのですよ」

スタージーのことが出たので、興味が湧き、身を乗り出して、その話がどのような内容だったかを義母に訊ねた。

「旧東ドイツの人がいろいろな話をしてくれましたね。それを聴いて、なんと恐ろしい組織なのだろうと驚きましたね」

義母はいつもより頬を紅くして、次のようなことを語った。

彼らスタージーの役割はたくさんあるが、そのうちでも重要な任務は、誰が政府、政党に批判的なのか、誰が西側とコンタクトを持ったのかといった反政府市民の情報を集めることだった。それに、市民一人ひとりが何に関心があり、何を望んでいるのかなどを書くファイルに詳しく記入することだったのである。

義母はいつもより頬を紅くして、次のようなことを語った。

彼らスターシーの役割はたくさんあるが、そのうちでも重要な任務は、誰が政府、政党に批判的なのか、誰が西側とコンタクトを持ったのかといった反政府市民の情報を集めることだった。それに、市民一人ひとりが何に関心があり、何を望んでいるのかなどを書くファイルに詳しく記入することだった。

彼らは、個人情報を得るために様々な方法を用いていた。たとえば、街の要所に隠しカメラや盗聴用の録音装置を置いたり、偽装用のかつらや髭を常に持っていたりした。また十分なお金があった。スターシーにとって、最も重要な情報収集源は、皮肉にも市民だったのである。旧東ドイツには、少なく見積もっても十万人の市民が秘密警察に情報を流していたのである。市民が市民を、家族が家族を監視していたのだった。一人ひとりの自由の表現が許されていなかったのである。

以上のようなことを聴き、旧東ドイツでは市民一人ひとりが監視され、コントロールされていくことが手に取るようにわかった。

義母は語り終え、溜め息をついた。ドイツが二つの異なる社会体制になるとは、若い頃は想像もしなかっただろう。その彼女に、妻が話し出した。

「カールはこちらに来てもう二年が過ぎ、今は、老人介護士の養成学校に通っているのよ。こちらの生活にも少しずつ慣れて、自分の道を自分で選択しながら歩んでいるわ」

そして、カールの顔を見た。

「そうなのでしょう？」

彼は答えなかった。返事をしないのが自然のように思えた。というのも、社会主義体制のなかで育った人が、民主主義の社会で、それもわずか二年間暮らしただけで、一人ひとりの自由の選択と権利を実感するのは、難しいと思ったからだ。

私たちは、カールの近況や家族のことなどをしばらく聴き続けた。彼はそれを話すことによって、塞いでいた気持ちが晴れてきたようで、明るい表情を浮かべるようになった。その彼は、明日は妻とミヒヤエルとで近くの森へピクニックに行くことになっていた。私と義母は、以前から約束していた義兄宅への訪問である。

第十一章 春の一日

カール・妻・ミヒヤエルが家を出て、黒い森へ出かけたあと、私と義母は車で義兄宅へ向った。

真綿色をした白い雲が、青く澄み渡った空に湧き上がっているのを目にしながらの走行である。道の左右にはリンゴ、ナシ、プラム、チェリーの花が、やわらかい太陽の光を浴びながら輝くように赤く白く咲いていた。

その奥には薄緑の麦畑と黄色の菜の花が縞模様を呈している。まるで白い服を身に着けた花嫁が恥じらいながら微笑んでいるかのような、この地方一帯の五月初旬の田園風景だ。助手席に座っている義母に話しかけた。

「お母さんはいいですね、毎月二人の息子たちの家に交替で招待されて」

「そうですね。でも、今日はミヒヤエルがいないので、ちよつと寂しいわね」

彼女が二人の息子の家へ行く時は、ミヒヤエルもかならず招待されていた。その彼は、今日は母親とカールと遠足に行つたので一緒ではない。

「このように、お母さんと二人でエアハルトの家へ行くのは、滅多にありませんね」

「そうですね」

「ラジオでもかけますか」

義母は軽く手を横に振り、うららかな春の景色を眺め続けていた。その彼女に再び話しかけた。

「昨日は、カールが西側に亡命してからのことを、いろいろと話しましたね。どうも精神的に参っているみたいでしたね。民主主義という新しいシステムのなかで、困惑しているようでしたね」

「そうですね。西と東がこんなにも早く統合されるなんて、誰も想像しなかったでしょうね。壁が落ちて、もう二年になりますね。東の人たちは、とくに、大変だわ」

義母は毎日新聞を欠かさず読んでいたので、東部ドイツの経済状態が悪く、失業者が増加していることをよく知っていた。

「カールは二十一歳ですね。これからですよ」

そう声を出して、彼女は窓を開けた。菜の花の蒸せるような甘酸っぱい香りが、車中に漂ってきた。彼女の「これからですよ」のことはを聴き、自分が二十一歳の時分だった頃はどうだったかなと想い起こしながら、運転を続けた。

しばらく走っていると、義母がつぶやくように言った。

「わたしの部屋に咲いている花に、水をあげるのを忘れて出てきてしまったわ」

「あと三十分したら義兄宅に着きますから、そこから電話をかけましょう。ゲルトルートはまだ家にいるので、彼女に頼んで水をかけてもらいましょう」

彼女の部屋には何種類もの花が咲いていて、毎朝それらに挨拶をするかのように水をかけていた。花をもらうと、とてもよろこぶ義母だった。

春の日差しが心地良い。過ぎ去る景色を見ている義母の青春時代は、どうだったのだろうかと思うた。

「お母さんの若いころは、第二次世界大戦前でしたね。何か大きな体験をしましたか」

「そうですね。女学校を卒業してから、すこしの間、イギリスに滞在していましたね。姉がロンドンの郊外に住んでいたので、彼女と一緒に暮らしていましたよ。初めての外国生活だったので、驚いたり楽しかったり。外国での生活は、何かと多くのことを考えさせられたわね」

「そのようなことで、お母さんは英語が話せるのですね。たしか、秘書をしていたとか聞きましたか」

「ある会社で、しばらく働いていましたね」

当時を思い返しながら、義母はいつも弾んだ声で語り出した。それを聴いて思った。カールが今体験していることは、青年時代の激しく燃え、苦悩しながら生きるなかで、大切なことなのだ。そう思っていると、彼女が話しかけてきた。

「ヒデジは学生時代、一年間外国で生活したと娘から聞きましたけど？」

「はい、大学を一年間休学して、外国にいました。新潟から船でナホトカに渡り、そこからシベリア鉄道でハバロフスク、モスクワを経由してウイーンまで行きました。当時は、それがヨーロッパに行ける最も安いルートだったので。リュックサックに寝袋を詰めて、ヨーロッパ中をひとりで歩き廻っていました。お金を持っていなかったもので、ドイツでも皿洗いや木工所で働いていました。そこで得たお金で、スイスやチロルの山々を歩いたりして十カ月間過ごしていました。残りの数カ月間はアメリカのサンディエゴにいました。当時、わたしみたいな冒険好きな若者が多くいました」

さらに続けた。

「それぞれの国で、いろいろな体験をしました。フランスのニースでは、寝袋のなかにさそりがいたこともありました。アルプスで何日もテントで過ごしたこともありました。いくつもの想い出があります。でも、あの時期に経験したことが、今の自分の生きる方向を導いてくれたように思うのです。そのようなことがあったからこそ、ゲルトルートとも数年後に知り合うことができたのですから」

「そうだったのですか」

そう言って、義母は微笑んだ。

ふと気がつくと、あと少しで義兄宅である。傾斜のある坂道で車を止め、義母が座席から降りられるように体を支えた。昨年までは、ひとりで乗り降りすることができたのだが、今はそれができなくなってしまった義母だった。

玄関で呼び鈴を押すと、クリスタが戸を開けて出てきた。背の高い彼女は、まず義母と握手を交わしながら左右の頬と頬を合わせ、私とも頬を合わせた。クリームの香りが、一瞬、漂った。妻も義母も化粧はしたことがないので、こんなに近くでクリームの匂いがかくと、それはあとまで残る。ウイーン生まれの彼女は、親しい人と挨拶する際はかならず頬と頬を合わせるのである。最初にこれをされた時は戸惑ったが、今では慣れた。

クリスタと初めて会ったのは、ゲルトルートとテュービンゲン市庁舎で結婚式を挙げる数日前だった。明るい髪に青い瞳、これほどまでに容姿の整った女性を身近で見たことがなかったので驚きもした。

そのクリスタは、私のよき聴き人でもあった。義母と住みはじめた頃、三世代同居の暮らしに難しさを感じ、自分の胸の内をクリスタに打ち開けたことがあった。この人なら、

こちらの身になって悩みを考え、共有してくれると思っただからだ。彼女は耳を傾けながら聴いてくれた。ありがたい対話時間だった。彼女は義母とも仲が良く、しばしば二人でコンサートや劇場に行ったりもして、お互いの信頼関係は強かった。

私と義母が居間に入ると、テーブルの上にはすでに昼食のためのお皿などが並んであった。私たちはソファに腰かけてから、義兄と二人の息子としばらく会話を楽しんだ。

テーブルを囲んでの七名の昼食となった。カールのことを話題に出してみた。それを聴いたクリスタが、話しはじめた。

「たしか、一九六〇年代後半に女性解放運動があったわね。その運動を通して、今までは保守的な考え方をしていた女性たちが、選択の自由と権利を求めるようになっていったわ。それとカールの今置かれている立場は、よく似ているのではないかしら」

彼女自身もその運動によって変化したと語った。それを聴き、先ほど義母が言った「これからですよ」のことが浮かんできた。私たちは経験したことを生かしながら、変化しつつ成長をしていくのだろうと思った。

料理を食べ終えると、甥のフィリップとギオクが後片付けをはじめた。義母と義兄は昼寝。クリスタはケーキを焼くために、キッチンに立った。

片付けを終わらした二人と、近くの森へ散歩に出かけることにした。

歩いて数分もしないうちに、もう森のなかである。新緑で覆われた樹木の梢に小鳥たちが止まり、盛んに鳴いているのを耳にしながら、私たち三人はゆっくりと歩いていた。

「フィリップ、夏休みまでにはまだ数日あるけど、何か計画していることがあるの？」

十七歳の次男のフィリップに、私が訊いた。

「フランスへ行きます」

「一人で行くの？」

「はい、去年の夏もフランス人家庭に泊まって、小さい子供たち三人の世話をしながら、フランス語の勉強をしました。今年も、そのようにします」

彼は母親に似て、とても色が白く、優しさも持ち合わせていた。ミヒヤエルが一月に一回義母と一緒に招待されて行くと、彼がミヒヤエルの面倒をよくみていた。

その彼から半年前のこと、驚かされたことがあった。いつもの顔つきで、「おじさん、ぼく、落第しました」と彼が言ったのである。この国では落第は珍しいことではなく、しばしば起こり、特に、高校では学年が上がることに、一クラス三十人近くのうち数名の生徒たちが落第、もしくは中退すると聞いてはいたが、驚いた。

日本の学校教育制度のなかで育った私だったので、当時落第した人はまわりにはほとんどいなかった。ただ、自分自身大学時代に、山のクラブ活動に熱中したあまりに留年したことがあった。これも落第なのかもしれないが、その時は、「自分は自分」という意識が強かった。一学年を繰り返すことにまったく抵抗はなかった。しかし、それが中学や高校の時分だったら、抵抗があったに違いない。

日本では大学時代はともかく、それ以前の落第は、生徒も親も学校側も避けようとするだろう。落第となると、今まで所属してきたクラスと学年の集団から離れ、その生徒は不安に陥り、何よりも恥ずかしいという意識が生じ、心理的に自分は落ちこぼれたと思ってしまうからだろう。

その点、ドイツでは、「自分は自分、人は人」という考えが濃く、落第を恥ずかしいと

は思わない。また、落第をしてもコンプレックスをそう持つてはいない。学校側も本人も、それに親も落第を適切な処置とみなしているのである。

その背景には、学力が低くても、他の分野で十分に活躍できる場がいくつも用意され、その選択のなから、自分の能力に適したコースを進み、そこで自分の幸せを見つけることが大切だとする考え方があるからだろう。そこには、個の実現を目指した教育がなされているからだ、彼の落第を通して思ったことがあった。

その彼に、歩きながら言った。

「外国での体験は、文化や習慣が違うので、いろいろと考えさせられるね」

「そうですね。異なる文化や伝統を知り、その国の人と知り合いになることで、これまでの自分の枠から出たような解放感を持って、いいですね」

彼はそのフランス人の家族のことを語り出した。時々、葉と葉の間から春の光がキラッとキラッと差し込んでくる。私たち三人は森のなかをゆっくりと歩いてきた。

一時間半の散歩を終えて、家に戻る途中、義母と義兄と一緒にゆっくりと歩いているのを見たので、その二人に合流した。

玄関のドアを開けると、ケーキを焼いた香りが漂ってきた。手を洗ってから、私たちは席に着き、クリスタが作ったりんごパイを食べはじめた。

そのケーキを口にしてしていると、背丈が二メートル近くもある長男のフロリアンが高齢者ホームでの勤めを終えて帰宅し、ケーキを食べていた祖母に腰を屈めるようにして握手をした。

「おばあさん、いつごろ、来たのですか」

「お昼前に来たのよ。今日は早番勤務と聞いていたけど、どうだったの？」

「ええ、朝の六時から今まで仕事でしょう。いつも家に帰るころには、クタクタに疲れてしまつて。とくに、今日は日曜日だったので、看護師や老人介護の専門職員がすくなく、そのぶんだけ、兵役義務の代わりに働いているぼくたちが職員のように働かねばならなかった。忙しかったです」

ドイツの健康な青年男性には兵役義務があつて、兵役に服するか、またはその免除を受けるために、社会福祉関係の分野で一定の期間働かなければならなかった。毎年約二十万人の二十歳前後の青年がその分野で働いていた。二十歳のフロリアンもそのうちの一人で、自ら希望して、高齢者ホームで働くことになった。彼は自分の考えをしっかりと持った青年だった。

義母と私たちは彼の話に耳を傾け続けた。しばらくすると、フロリアンが祖母に誘いのことばをかけた。

「おばあさん、また例のゲームで遊びましょうか」

「ええ、いいわね」

彼女はそう応え、今度は皆でゲームをすることになった。

ゲームをするまで時間があつたので、先ほど自分の部屋に戻ったフィリップとギオクのところに行くことにした。

ドアが開いていたので、軽くノックしてなかに入った。

「これからゲームをするけど、来ないか」

二人とも机に向かって何かを書いていた。フィリップは、「行きます」と答えたが、一

番年下のギオクは、「今日中に作文を書かなければ行けないので、僕は遠慮します」と言った。その彼に訊いた。

「何についての作文を書いているの？」

「四日前にクラスでダッハウ収容所に行って来たので、その時の感想文です」

「それは、ミュンヘンの近くにあるナチ時代の強制収容所のこと？」

「はい、そうです。おじさんは行ったことがありますか」

「うん、あるよ。そういえば、そこに行った際に君ぐらいの中学生たちが、先生と一緒にいたのを見かけたことがあったよ」

そう言ったあと、ゲオクがそこに行つて、何を考えたかを知りたくなった。

「君はそこで何を見て、何を考えた？」

「それが宿題のテーマなのです」

彼は握っていた鉛筆を机の上に置いた。

「僕たちは、当時の写真や書かれたもの、それにフィルムを観ました。それから、ユダヤ人たちが暮らしていた簡素なバツラク小屋へクラスメート三十名と先生とで行き、ガイドの人から、当時のユダヤ人たちの生活ぶりを聞きました。そのあと、その場で皆と討論をしたのです」

ギオクの前に置かれてあるノートには、まだ数行しか書かれていなかった。

「君がおもに書くこうとしていることは、何なの？」

彼はゆっくり考えながら答えた。

「ユダヤ人殺戮を体で知った今、僕は思うのです。僕たちの世代には当時の責任はないです。でも、彼らと共に平和な未来をつくっていく責任はあります。そのことを、今回収容所を訪れて考えました。それについて書く積もりです」

それを聴き、当時の惨たらしい歴史を次の世代にしっかりと伝え、決して再びあのようなことを起こしてはいけなさと徹底的にナチ時代の歴史を批判し、警告しているドイツの学校教育なのだ。批判するには自分の考えでしなければならぬ。自分のことばで表現しなければできないだろう。今のドイツの民主主義社会と文化をつくり出しているのは、過去の克服をしてきたからでもあるだろう。

彼ともっと話をしたかったが、邪魔をすてはいけなさと思い、部屋から出た。居間では、ゲームがはじまる場所だった。

義母はゲームが好きで、皆とよく遊ぶ。特に、頭を使うゲームが好きだった。そのことを知っていたフローリアンが、ルミーという日本のマージャンによく似たゲームを準備していた。彼女が得意とするものだった。

皆で冗談を言いあいながらの賑やかな時間となった。しばらくすると、ギオクも来た。義母が孫たちと真剣になって遊んでいる姿は、微笑ましいものがあった。結果は、彼女が二番となった。

「おばあさんはつよい、つよい」

孫たちにそう言われ、拍手をもらう義母だった。熱心に遊んだためか、彼女の頬は赤くなっていた。腕時計をのぞくと、六時が過ぎていた。

「そろそろ家に帰りましょうか」

義母にそう訊くと、彼女は肯いた。それを聴いたクリスタが、私たちを引き止めたので、

夕食も摂ることになった。

和やかな笑い声が絶えない夕餉も終わり、家を出たのは薄暗くなつた八時過ぎだった。車のライトを点けて走り出した。助手席に座っている義母の顔を見ると、ゲームの時の紅潮した頬は消えて、今はライトに照らされている前方を静かに見つめていた。

「ラジオでもつけますか」

「わたしはいいですよ。もしヒデジが聞きたいなら、どうぞ」

ラジオをかけないで、走り続けた。

「今日は楽しかったですね。食事もおいしかったですね」

「そうですね。皆と一緒に過ごせたわね」

穏やかな顔を浮かべながら、彼女は言った。それを目にして、優しい息子夫妻と孫たちに囲まれて、この人は幸せだなと思つた。

「あの三人の青年たち、自分でものを考え、自分の人生を歩もうとしていますね」

それを聴いた彼女は肯いた。

私も三人の青年とゆっくり話すことができ、彼らが主體的に何ごとにも取りくんでいる姿を見て、頼もしさを覚えた。と同時に、彼らの両親が子供一人ひとりの個を尊重し、温かく見守り、このようにして子供たちは自分の幸せを求め、自立して行くのだろうと思つた。

また自立するにつれて、周囲の人と共に生き、自分が生かされていることに気づき、そのことよって人や自然への感謝の念がより深まっていくに違いない。そのことを何の気負いもなく、淡々と日ごろの生活のなかで実践しているのが、隣にいる義母なのだ。彼女と一緒に暮らしていると、それを感じ取れるだから。

一週間後に、八十歳の誕生日を迎える義母。疲れが出てきたようで、目を閉じ、眠りはじめた。

第十二章 八十歳の誕生日

義母と一緒に義兄宅を訪れてから、一週間が過ぎた。

この頃になると、チュービンゲンの草木たちも春を待っていたかのように、一斉に花を咲かせ、立ち木も新緑の葉で覆われていく。ネッカーハルデ通りにも、アカシアの木が数本立ち並んでいる。それらの木々の葉にも、瑞々しさが目立つようになる。

ある早朝のことだった。

ベッドから起き出して窓を開けると、アカシアの白い花から発散する甘い香りが室内に漂った。と同時に、小鳥たちが盛んに囀っている声が、耳に入ってきた。ベッド上では、妻が目を開けていた。

その彼女に、言った。

「今日は、いやに高らかに歌っているな」

「そうね。彼らも母の誕生日を祝っているのよ」

私たちは、小鳥たちの鳴き声に耳を傾け続けた。

少しすると、隣の部屋で物音がした。

「何かしら？」

「ミヒヤエルだよ。朝食の準備をしているのだろう」

「今、何時なの？」

「六時半。今日がおばあさんの誕生日なのを知って、張り切ってお皿などを並べているのだろう」

「母の八十歳の誕生日なのに、わたしは仕事に行かねばならないわ。残念だわ」

服を着替えてから居間に入ると、テーブルの上に、四人分の食器が並べられてあった。

朝食はいつも三人で摂るのだが、今日は義母の誕生日なので、彼がおばあさんの分も用意したのであった。

「おはよう」

ミヒヤエルにその声をかけると、彼はうれしそうにいつも座るおばあさんの席を指差した。その彼に、妻が両手を挙げて、

「ミヒヤエルが、一人で全部したの？」

と、大袈裟なジェスチャーをしながら訊いた。

「うん」

にこにこしながら、彼は答えた。

私たち三人が階下の義母の部屋に行くと、彼女はソファに座って、いつものように郵便箱から取ってきた新聞を読んでいた。

その前で、三人声を合わせて誕生日の歌を唄った。

それが終わると、妻は母を抱き、ミヒヤエルはおばあさんの頬に自分の頬を合わせた。私も義母の温かい手を握った。

「誕生日、おめでとーございます」

「ありがとうございます」

彼女は、とてもうれしそうな表情を浮かべながらにっこりした。

ドイツ人は、誕生日をとて大切にしている。妻も義母も、親戚や友人の誕生日が記された、かなり古くなった手帳を持っていて、妻は月に数回、義母の場合は毎朝その手帳を開いては、誕生日の人に手紙を書いたり、当日に電話をかけたりして、祝いの気持ちを伝えている。

この誕生日を祝う習慣は、この国では人と人との関係の絆を長く保つのに、大きな役割を果たしているといえるだろう。

こちらでの誕生日の祝い方は、自分から人を招待し、食事などを供して祝う。それは、誕生日の人が主体的に祝うことなのである。

私たち四人は、朝食を摂るために上の階へ向った。

テーブルを囲んで食べ出すと、階下の義母の部屋から電話の音が鳴り出した。足が弱っている義母に代わって、妻が急いで下へ向った。

コーヒーをゆつくりと飲んでいる義母に、話しかけた。

「お義母さんの誕生日がはじまりましたね。それも八十歳。今日は、忙しくなりますよ」「そうですね」

よろこびに満ちた声である。その時、妻が下から戻ってきた。

「お母さんの友人からだったわ。あとで、また電話をするらしいわ」

そう声を出してから、再び椅子に座った。

四人での朝食が終わり、義母は自室へ戻った。

妻は、八時に始まる駅ミツシヨンの仕事へ行かねばならない。家を出る時、申し訳なさそうな顔で、

「午後二時ころには、戻るわ。今日の午前中は、お客さんが幾人も訪れて来ると思うから、コーヒーを入れてあげてね。済まないけど、よろしくたのむわ」

と言ってから、職場へ向かった。

朝八時を過ぎると、近くに住んでいる義母の友人が訪ねてきた。義母は、その友人と一緒にソファアに座って話をはじめた。

二人にコーヒーを入れてから、上の階に行き、居間に入った。と、ミヒヤエルが朝食の後片付けを終えて、掃除機を回していた。学校休みの週末は、彼は自分のやることはわかっていた。

一通りの家事を済ませてから、義母の部屋へ再び行くと、先ほどの友人は帰っていた。こんどは、牧師と話をしていた。彼女が通っている教会の牧師である。

その人のもとで週一回開かれる聖書を読む会には、義母は持病の痛風で足が痛む時でも、杖を突いて足を引きずりながらもからなず出席していた。

その牧師にコーヒーを勧めていると、玄関のベルが鳴った。市長の代理の人が、一冊の本と花束を持ってきたのである。

そのメッセージに耳を傾けていると、こんどは電話のベルが鳴った。親戚からだった。受話器を義母に渡した。

牧師と市長の代理人が帰ると、婦人会の人や近くに住む甥や姪、それに友人たちが絶え間なく訪れてきた。電話も鳴り通しである。

やっと昼近くになると、来訪者が途絶え、電話もかかってこなくなった。

義母の部屋のテーブルには、花束が並べられてあった。その前で彼女は、今日届けられた十数通の手紙をソファアに座って、読んでいた。その姿を見ながら、彼女に、

「いい香りですね。疲れたでしょう？」
と言うと、

「ありがたいことですね。皆さん土曜日の午前中は、家でなにかと用事があったでしょうに」

とクリスマスカードに目を注ぎながら、応えた。

その姿を見てから、昼食の準備をするために上の階に行った。

そのあと、ミヒヤエルと一緒にキッチンに立った。

一時間で、料理ができたので、彼に、

「おばあさんに、食事ができたと伝えてほしい」

と言うと、楽しそうな表情を浮かべながら、おばあさん呼びに下の階へ向った。

二人が揃って居間に入ってきた。と、義母がにっこりした顔で、

「スプタね」

と、声を出した。

私が作った料理は、なんでも口に入れてくれる義母だった。とくに、酢豚とマーボー豆

腐を好んで食べてくれた。醤油味となるのだが、今までお皿に盛ったものを残したことはない。高齢で自分好みの味を持っているはずなのに、慣れていない料理をよるこんで食べてくれるのである。

テーブルには、ミヒヤエルと妻の合作である手作りキャンドルが七本立っている。

それに明かりを灯すと、彼はおばあさんのほうを向いて手を叩いた。義母は微笑み、食前のお祈りとなった。

食べ出すと、妻が仕事から戻ってきて、

「家のことが気がかりで、早く帰らせてもらったわ」

と言いながら、席に着いた。

私たちが午前中の来客者について話をしていると、また、義母の部屋の電話が鳴り響いたが、そのままにして食べ続けた。

昼食が終わると、義母はいつものように自室に戻っての昼寝となった。妻はケーキ作りをはじめた。

そのケーキが四人のお客の前に出されたのは、お昼のコーヒータイムの時だった。その四人とは、義母の女学校時代からの友人たちで、皆電車で一時間かけてやって来たのである。義母を含めて五人とも、よく笑い、その笑顔がまた素晴らしいのだった。

老いはその人の生き方の歴史であり、そこから生じる自然な笑顔はとても尊いものだ。自分も高齢になったら、この人たちのような笑顔を持てるような生き方をしなければと思った。

五人の明るい笑い声が、時々、上の階にまで響いてくる。

友人たちは二時間ほど歓談してから、それぞれの家へ戻った。

それから一時間ほどすると、義母の二人息子の家族が来て、総計十三名の賑やかな夕餉である。音楽好きな親族なので、バイオリンとチェロとアコーディオンを弾きながらの宴となっていた。

義母は誕生日に、友人や知人、それに二人の息子家族を自分から招き、心からよろこんでいた。それを見て、私もそうだが、皆もよろこんだ気持ちになるのだった。

その一夕も終わり、義母は花の香りが漂っている自分の部屋にゆっくりと向った。そのうしろ姿を目にしながら思った。

人は絶えず、自分から当事者となって主体的に生き、そこから生きる意味を見出すことが大切なのだ。

第十三章 愛でる心

義母は大きな病気や怪我もしないで、穏やかな年月を過ごしていた。そのようなある日、彼女が、私と妻に一通の封書を見せた。

「ウルリケとは、久しく会っていないわ。その手紙に書いてあるとおり、家族全員が招待されているのだけれど、訪れてみてはどうかしら？」

「もちろん、行きましようよ。ウルリケおばさんが私たちに会いたがっているのだし」

妻がそう言うのと、義母は手を合わせてよろこんだ表情を浮かべ、そのあと私に語り出した。

「ウルリケは遠い親戚にあたる人で、わたしより九歳年上だから、今は九十二歳になるかしら。夫が黒い森で牧師をしていたころ、彼女とよく会っていましたよ。当時、彼女はカルプ市に住んでいたのですよ」

「カルプ市と言うと、あのヘルマン・ヘッセの生まれた地の？」

「ええ、そうですね。彼女は、ヘッセが生まれた家の二階に住んでいたのですよ」

驚いた。まさか義母との会話のなかで、ヘッセの名が出てこようとは思いませんでしたから。義母は、さらに続けた。

「夫は、よくその家に出かけていましたね。ウルリケは一階で布地のお店を開いていたのだけれども、経済的に一時大変な時期があったので、夫は布を買いに彼女のお店によく行っていたわね。それから、夫はヘッセの大ファンで、ヘッセの作品をよく読んでいましたよ。ヘッセに手紙を送ったのですよ」

「ヘッセに、手紙を直接書いたのですか」

「またも驚いた。」

「ええ、そうしたら返事がきましたね」

耳を疑った。次に何を言うのか、彼女の口元を見続けた。

「ただし、ヘッセ本人からではなく、彼の代筆をした姉妹からの手紙でしたね。その返事は、かなり長いものだったわ」

「どんなことが書かれてありましたか」

「内容がどんなものだったかは、かなり昔のことなので、忘れてしまいましたね」

義母は淡々と語った。それを聴き、ヘッセの名前をこんなにも身近に感じられ、興をそられた。

「それで、その手紙、今どこにあるのですか」

「夫の書類が入っているケース箱に、それはあると思いますよ」

「そんな貴重なもの、ぜひ、読んでみたい」

妻と一緒に、亡き義父の書類箱を探したのだが、見つからない。昔の人の筆記体は読めづらいこともあって、見過ごしたかも知れないと思い、再び目を通したのだが、発見できなかった。

その手紙を探していたら、一九三十年の消印付けの封書を目にした。表には、「シベリア經由獨逸国行」と記され、十銭の切手が貼ってあった。義父宛の手紙だった。時代が昔に溯ったような気になった。

妻はヘッセの姉妹からの手紙を探すよりも、古い封書を読んでは、今まで自分が知らなかった出来事を母と話をしていた。

結局、手紙は発見することができなかったが、ヘッセがより身近に思える存在となったのである。

カルプ市へ行く日になった。

テュービンゲンから車で四十分かけ、九十二歳のウルリケ叔母さんが住む家に到着。三十年前にヘッセの生まれた家を出た彼女は、今はカルプ市郊外の閑静な住宅地に住んでい

た。

玄関のベルを押すと、七十代の二人の女性がドアを開け、出てきた。義母の姿を見るや、二人は駆け寄った。

「エルフリーデおばさん、エリフリーデおばさん、よくいらっしやいました」

そう声を出しながら、義母の肩を抱いた。

二人に案内されて大きな家に入ると、ウルリケ伯母さんが杖を持ってフロアーに立っていた。義母は懐かしそうな表情を浮かべ、彼女と握手を交わしながら一言二言、ことばを交わした。

居間に足を踏み入れると、重厚な机の上に、コーヒー茶碗とケーキがきれいに並べられてあった。

私たちが歴史を思わせる木造りの椅子に腰かけると、ウルリケ伯母さんが、義母を見ながら、穏やかな声で言った。

「もう、どれほど会っていないかしら？」

「二十年以上にもなるかしら。でも、あなたのことは、二人の姪からよく耳にしていますよ」

義母は、ゆっくりと応えた。

コーヒーを飲みながらの時間となった。

ウルリケ伯母さんが、昔の出来事や今の生活について、手を動かしながら語りはじめた。顔の色艶もよく、張りのある声でユーモアを言い、その姿はとても九十二歳には見えなかった。一緒に住んでいる七十二歳と七十六歳の姪からすれば、姉のような若さである。この若さは一体、どこからくるのかと、ふと紅茶を飲みながら思った。

ウルリケ伯母さんは、こんどは隣に座っている義母と話し出した。そのなかに二人の姪と妻が加わって、賑やかな会話となっていた。

ミヒヤエルは手作りのケーキを食べ終え、退屈そうな表情を浮かべ出した。それを見た姪姉妹が、

「ミヒヤエル君、庭に出てみましょうよ」

と、誘った。彼は肯いた。私も一緒に外に出ることにした。

居間から庭に出るまでの長い廊下を歩きながら、

「大きな家ですね。ほかに、だれか住んでいるのですか」

と、姉妹に訊ねた。

「いいえ、私たち三人だけです。時々、親戚や友人が来て、泊まっていけますけど。よかつたら、家のなかを案内しますよ」

歴史を感じさせる古い家具を目にしていたので、

「はい、見たいです」

と応えると、姉妹は二階建ての家を案内してくれることになった。

壁に掛かっているいくつもの油絵などは、素晴らしいものだ。それらをゆっくりと鑑賞していたかったが、ミヒヤエルが退屈そうな顔を浮かべていたので、私たちは庭に出ることになった。

広い庭園には、花が色とりどりに咲き、甘酸っぱい香りが漂い、まさに五月の春の匂いだ。芝生の土を踏んでいると、体が浮き上がってくるのだった。

「この花はライラック、あれは駒草、あそこに咲いているのはキンバイソウ……」
姉妹は、私に花の名前を熱心に言い出した。

「こんなにたくさんの花が見事に咲いて、一体、だれがこの花の世話をしているのですか」
「私たちがしています」

「それでは、九十二歳のウルリケ伯母さんもしているのですか」

「ええ、調子がよいときは一緒にしますが、主に、私たち二人でしています」

「それにしても、この広い庭を毎日、世話するのは、大変ではないですか」

「力仕事をするときは、知人たちがやって来てくれますから。ほら、わたしの手を見てください」

七十六歳の手にしては、硬くゴツゴツしている。

「この花々を世話するのが、私たちの仕事なのです。それに、毎日、どの花も昨日とは違う顔をしているのですよ」

姉妹はお互いに顔を見合わせ、微笑んだ。

その顔を見て、感じ取った。この二人は真心を込めて花の命を大切に世話して、毎日、少しずつ変化、成長している花を見て、よろこび、それが彼女たちの生活を潤しているのだと。

そのような思いになってみると、自分もこの花によって心が豊かになったようになり、花を愛でる気持ちが生じてきたのである。そうすると、前にいる姉妹が急に身近な存在となつて、言うにいわれぬ親しみを感じはじめ出したのだった。

以前の私だと、この庭のように秩序正しく造形され、整然と咲いている花を見て思っただろう。これが、ヨーロッパ風庭園の美のとり入れかたなのだ。日本ではこのような花の植え方はしない。一つひとつの花に宿っている素晴らしさよりも、まず、そのことが浮かんだに違いない。

しかし、今は、そのような庭園美の比較などは、全く問題ではなく、一つひとつの花を愛でる心が、大切なだと気づいたので。

今目の前にいる二人の姉妹から、ことばで言い表せない大きな贈りものを頂いたような気持ちとなつて、心のながが自然とあたたかくなっているのを感じ出したのである。三人の若さの秘訣は、この愛でる心にあるのだろうと思つた。

そのようなことを考えていると、妹の方がどこからか毬を持ってきた。

「ミヒヤエル君、一緒に遊ぼう」

そう声を出して、彼にボールを投げた。ミヒヤエルはよろこんでそれを拾い、投げ返した。妹はそれを両手でつかみ、再び、彼に投げた。

それを見ていた姉が、話し出した。

「彼女には孫が七人いて、その子たちとよくボール投げをしているので、上手につかむでしょう」

「七十二歳には見えませんね」

私もボール投げに加わった。

二階のバルコニーでは、義母が私たちに手を振り、その隣にウルリケ叔母さんと妻も立っている。五月のうらかな陽が、庭の花々に注いでいるのを目にしていると、それらが輝いて見えるのだった。

三時間があつという間に過ぎて、別れの時刻となった。私たちは、ウルリケ叔母と二人の姪の肩を抱き、感謝の意を伝えてから外に出た。

義母はゆっくりと杖を突き、妻と一緒に家の前に止めてある車へ向かった。そのあとに、私とミヒヤエルが続いた。

車の座席に腰かけてから、窓を開け、家の前に立っている三人に手を振った。と、振り返してくれた。

テュービンゲンへの帰り道、ヘッセの「人は成熟するにつれて、ますます若くなる」とのことばが浮かんでくるのだった。

成熟するとは、愛でる心を抱きながら、今のこの時間を大切に、楽しく生きるという姿勢なのだろうと思った。子供のようにシンプルな気持ちで。

それを今、別れてきた三人、それに助手席に座っている義母に言えるだろうと思った。

第十四章 耳を澄ます義母

九十二歳のウルリケ叔母さんを訪問してから、三週間が過ぎていった。私たちは義母といつものように昼食を摂っていた。

それが終わろうとした時、義母に、

「お義母さん、今日は天気も良いし、皆で森へ散歩に行きませんか」

と、誘いのことばをかけた。

「そうですね」

少し躊躇するような表情を浮かべて言った。

それを見た妻が、

「このところ足の具合もそう悪くはないみたいだし、お母さん、行きましようよ」と、勧めた。ミヒヤエルも、「おばあさん さんぽ」と単語を並べた。

「それでは行きましょうか。今日は痛みもあまりないし、少しぐらいなら歩けるでしょう」そう言って、肯いた。

義母の昼寝が終わるのを待って、皆で森へ向った。

家から車で五分走ると、もう森の入り口。四人とも、車を降りてから歩き出した。

初夏を思わせるような晴れ上がった天気だ。どこからともなく小鳥たちの鳴き声が聞こえる。木の葉がさやかな風に揺られながら、サラサラと音を立っている。義母の歩調に合わせて、のんびりと歩いていく。

十分ほどすると、ミヒヤエルが一人でどんどん先へ進んで行った。森のなかで彼を見失うと、捜すのが大変なので、彼のあとを追いかけてようとした。と、妻が、

「わたしが行くわ。あなたは、母と一緒に歩いて！」

と、声を上げて駆け出した。

樹と土の香りが漂う小径を、義母と肩を並べて、ゆっくりとした足取りで歩いていた。ベールで彼女と最初に会った時は、私と同じ背丈だったが、今では低くなって杖をつきながら、歩くようになった義母である。

私たちは何も語らずにいた。と、突然、彼女が立ち止まり、小径の脇にあった野の草をじっと見つめた。何かそこにあるのかと思ひ、自分もそのほうに視線を向けた。が、何の変哲もない野草が目に入っただけだった。

「何か、あるのですか」

そう訊ねると、彼女は杖をその野草のところへ指して静かな声で、

「ほら、白い花が咲いているでしょう」

と、答えた。それでも自分には見えなかったので、近づいて腰を屈めた。と、草の間に小さな白い花が、二つ並んで咲いていたのが見えた。

「あつ、こんなところに花が！ お義母さんは歩きながら、この花がよく目に入りましたね」

彼女は何も言わずに、なおも、その花を見続けていた。その顔はなんと穏やかで、安らいでいるのだろうかと思つた。

杖をつき、今はゆっくりと歩かねばならぬ義母だったが、その足取りのなかで、この小さな神秘的な花を見出し、よろこびを得ていたのだ。

先に走っていったミヒヤエルの速さでは、この花を目にすることはできなかっただろう。また、このようなところに花は咲いていないだろうと、勝手に思っていた私にも、この花は見出せなかった。

しかし、義母はゆっくりとした歩きのなかで、あるがまま自然に咲いている花を見つけ、よろこびを得ていたのだ。

義母と一緒に、その小さな白い花を眺めたあと、再び歩き出した。

少し行くと、丸太でつくられた形のよいベンチがあった。

「座りましょうか」

「まだ大丈夫ですよ。先へ行きましょう」

高い針葉樹に囲まれた小径をさらに進んで行くと、展望のよい明るい場所に出た。そこにもベンチがあったので、再び彼女に訊ねると、

「休みましょう。少し疲れてきたわ」

と、小さな声で答えた。そこで、私たちは腰を下ろした。

「二人は、もう先に行ってしまったようですね」

そう言うから、先ほど見つけた小さな花についての話をはじめようとした。

「先ほど出会った、あの小さな花、いろいろなことを考えさせてくれました。お義母さんはゆっくりとした足取りのなかで、あの花を見つけたのですよね。わたしには、見つけることはできませんでした。若いころから、心がけていることがあるのです。それは、ゆっくりということですよ」

義母は、目の前に広がる明るい景色を眺めていた。

「でも、毎日の生活のなかで、このゆっくりがなかなかできないのです。そのときは、大抵目先のことばかりが気になり、時間に追われ、自分の心を失っているのです」

今までベンチにもたれかかっていた姿勢から、こんどは深く座り直した。

「お義母さんはゆっくりとした歩きのなかで、あるがままに咲いている、あの小さな花を見つけ、じっと眺めていましたよね。その姿から、お義母さんはとても豊かな時間を持つ人だなあと思つたのです。まるで、花と対話しているかのようでした」

「そう映りましたか」

義母は、そう声を出してから、

「体の衰えが、年齢がそうさせてくれているのですよ」

と言い、遠くを眺め出した。

その横顔を見ると、次のようなことが浮かんできたのである。

ある一人のお年寄りが、寝たきりになってしまった。彼女は部屋のベッドから、庭に立っているリンゴの樹をいつも眺めていた。そこへ、一人の青年がやって来た。

「お体が不自由なようで、さぞ辛いことでしょう。退屈なことと思います」

それを聴いた彼女は、青年を見つめながら語り出した。

「たしかに、わたしは自分の体を自由に動かせられないけれど、庭に立っているリンゴの樹を毎日、見ることはできるわ」

青年は、彼女が何を言うのかに耳を傾けた。

「寒く、厳しい冬が過ぎ去ろうとするころになると、雨の降る日が多くなるわね。そうすると、リンゴの樹は、その雨水を十分に吸収して、緑の葉を枝につける準備をするのですよ。それから、芽吹き、五月には白い花を咲かせるわ。そうすると、その花に誘われて、蝶や蜂などが花のまわりを飛び交い、小鳥たちも枝に止まって囀りはじめ、静けさのなかに、よろこびをもたらしてくれるのよ」

彼女は、続けた。

「葉がますます生い茂り、風が吹くと、葉と葉がサラサラと音をたて、その音色はとても心地良いものだわ。そうして、枝につけた実が段々と大きくなってくるでしょ。と、枝は弓なりになるわ。それを見てみると、葉と枝と幹が、根に支えられているのがわかるのよ」

青年は肯きながら、聴いていた。

「夏になって、雨が降るでしょ。そうすると、一枚一枚の葉は、その雨水を葉全体でとらえようとするわ。雨が止むと、水滴が一枚一枚の葉の上に見られるのよ。そこに太陽の光があたると、キラッキラツと輝くわ。葉も水分を十分にとって、よろこんでいるのよ。風が吹けば、枝は揺れ、静かな日には、リンゴの実が落ちる音も聞こえるのよ」

さらに、続けた。

「秋になると、葉が少しずつ赤や黄に色づき、散っていくわ。最後の一枚が枝に残っている様は、自然のあるがままに任せている姿とも見え、心に魅せられるわ。秋の季節は、もの寂しさを感じると同時に、魅力もあるのよ。散った葉が、土に返り、新たな生命を、その樹にもたらすのだから」

青年は、耳を立て続けていた。

「冬になるでしょ。そうすると、枝が弓状に凍ってしまい、その重みに何日も耐えながら、樹は、春が来るのを待っているのよ。自然は素晴らしいもので、かならず春をもたらしてくれるわ。よく見ていると、リンゴの樹って毎日、変化しているのよ。退屈でしょうとあなたは訊くけれど、そんなことはないわ。自由に動けるあなたには、そう映るかもしれないわね。でも、この樹は、私の友だちなのですよ。一日一日、感謝の心で眺めているわ。そうすると、前へ前へという気持ちになるのよ」

それを聴いた青年は、頭を下げ、部屋から出ていった。

そのようなことを思い浮かべながら、義母と一緒に、前に映る景色を眺めていた。

しばらくすると、こんどは、義母が話しかけてきた。

「ゲルトルートが、黒い森地方の小さな村で生まれたことは、知っていますね」

「はい、あそこに二回ほど訪れたことがありますから。景色のいいところですね。なだらかな草原と、その真ん中に小川が流れ、あたり一面に花が咲き、今でも、あの風景を想い出すことができます」

「当時、夫はその村で牧師をしていたのですよ。もともと小さな村だから、周辺の村の牧師を兼ねていて、毎日、自転車で走り廻っていましたよ」

「あの周辺は、冬は雪が相当積もるではありませんか」

「ええ、そうですよ。雪の降った日は、長靴をはき、スキー板を背負って、遠くの教会へ数時間かけて行っていましたよ」

彼女は、その情景が目の前に浮かんでいるかのように、生き生きとした声で話し続けた。「とにかく、夫は忙しかったわ。そのようなある日、アンネを連れて、近くの野に花を摘みに行ったわ。そうして、摘んできた花を夫にあげたら、とてもよるこんでくれて、夫はじっとその花を見つめていたわ。そのあと、体の不自由なアンネに、『ありがとう』と優しく言ってくれたのですよ。アンネは、とてもよるこんだわ」

義母は一息入れてから、こんどは少し声を高くして言った。

「わたしも、うれしかったわ」

それを聞いた時、車椅子に乗った娘との大変な暮らしがあったからこそ、その時のよるこびが大きかったのだらうと思った。また、高齢者は現実の世界と同時にもう一つの世界を持っているのだとも知ったのである。

もう一つの世界とは経験した想い出の世界で、それはその人にとっては家にもなるし、故郷にもなるし、辿り着くところはパラダイスにもなるのだと。

義母に、黒い森での生活がどのようなものだったのかを訊ねよとした時、「ヤッホー」の声が聴こえた。

そのほうを見ると、妻とミヒヤエルが手を振って、こちらに走ってくるのが目に入った。彼が先に着き、妻が息を弾ませながら、そのあとに続いた。その彼女が、ベンチに腰かけている私たちを見て言った。

「まだ、そんなに歩いていないでしょうに。お母さん、もう少し歩かなければだめよ」

「そうね、そうしましょう」

義母はそう声を出して、微笑んだ顔で腰を上げた。

私たち四人は、歩き出した。少しすると、義母は疲れてきたようで、娘と腕を組んで歩くようになった。ミヒヤエルは、その二人の前後を行ったり来たりしていた。

妻は小径の脇になっている赤い野イチゴの実を採っては、それを母に手渡していた。その二人の話しが、時々、私の耳に入ってくるのだった。

小鳥たちの歌う声がどこからともなく聞こえ、私たちは森に包まれていた。

八十五歳の義母の誕生日が過ぎて、三ヶ月が過ぎたある日のことだった。妻が少し変わった催しを計画した。

それ以後、彼女は会場を探したり、招待状を書いたりして、熱心にその日に向けて準備をはじめた。それも、自分で楽しみながら、

「ケーキは、誰が持つてくるの？ 夕食はどうしましょう？ 誰が、スピーチをするの？ 音楽演奏は？」

と親戚の人たちと、電話で打ち合わせをするようになった。
いよいよその日となった。

会場はテュービンゲンの教会集会所内の小さなホール。義母の両親が結婚して今年で百年目にあたるので、それを祝おうとするものだった。

妻がこのプランを練った時、核家族になつていてる現代で、とくに、三世代同居をほとんど見かけないドイツで、この集い来る人はそう多くはないだろうと想像したのだったが、集まった人は、約六〇名にも及んだのである。

義母の四人の兄弟たちは他界していたが、その子供たちと孫たちが寄り集まったのだ。半分以上は、私が以前会ったことのない親戚の人たちだった。

ドイツでは、誕生日などを祝う会は家庭で頻繁に行われているが、このように広範囲の親族が、葬式でもないのに出席するとは思っても寄らなかつた。驚いたことに、六十名のうち二十歳前後の青年が、九名も来たのである。

彼らはこのような集まりに興味を持たないだろうと想像したのだが、違つていた。ホールの飾り付けや、後片付けをお互いに協力しててきばきと行い、ドイツ青年の意外な面を知る思いとなつた。

午後二時から始まり、ケーキを食べながら、一人ひとりがスピーチをのべていった。六十名のドイツ人が集まれば、楽器を鳴らす人は数名はいるものだ。その人たちが、バイオリンやオーボエ、それにホルンで合奏し、皆で歌を唄い、簡単なゲーム遊びなどが行われていった。

そうしたなかで、今までそう話し合うこともなかつた従兄弟どうしとか、甥姪などがお互いに知り合う機会となつていった。もちろん、親族のなかで最年長の義母は、今は亡き両親ときょうだいのことを語つた。

マイクロホンのない小さなホールなので、声をいくらか高くして、頬を紅潮させて話す義母だった。その彼女の話に、親族の人たちは耳を傾けていた。

その情景を目にして思った。彼女が今ここにいるのも、過去の数知れぬ親族との交流のうえに成り立ち、今のこの行為が未来を創り上げていくのだろうと。

最後に、義母は語つた。

「このような会が開かれ、皆がお互いに話し合われたことは、ありがたいことです」

そう言うと、皆から拍手が湧き起こつた。

解散の時刻となつた。多くの人が妻と握手しながら、「ありがとう」と声を出していたのが、爽やかに聴こえた。というのも、このような集いをしながら、親族関係のつながりを保ち、深めるのだらうと思つたからである。

妻と一緒に、体が弱つてきた義母を両脇から支えるようにして外に出た。と、あたり一面が初夏の夕陽に照らされて、眩しいくらいに茜色に染まっていた。

それから十ヶ月経つた、六月上旬のよく晴れ上がった日の午後だった。

私たち家族四人は、テュービンゲンから車で三〇分走つたところの、人口九百名が住む小さな街ハイガーロッツホへ向かつた。

青く澄み切った広々とした空には、白い雲がポカリポカリと浮かび、その下には、淡緑の麦畑とむせるような黄の菜の花が、縞模様を呈しながら続いている。それらを眺めながら、走り続けた。

目的の地に着くと、教会の鐘の音がちょうど三時を告げた。

それを聞いた妻が、

「まず、コーヒーを飲んでから歩きましょう」

と言ったので、小高いところに建っている喫茶店へ向かった。

バルコニーの椅子に座ると、素晴らしい景色が目の前に現われた。

眼下には小川が流れ、それに沿って、古い木組の家々が建ち並んでいる。六百年前に建てられたお城と大きな教会が、三百メートル先に見えるのである。まるで絵本に出てくるような光景だ。しかし、年間二万人がここを訪れるのは、この美しさのためではなく、その教会の下にある洞穴が目的なのだった。

そこは、かつてはビールの地下蔵だったが、一九四四年にベルリンの空襲を恐れたドイツの物理学者たちが、その洞窟に集まって、戦争が終結するまで原子爆弾の研究をしていたところでもあった。それが、今は地下室の原子博物館となっているのである。

コーヒーを飲み終わると、娘が母に、

「ユダヤ人のお墓へ行ってみない？」

と、訊いた。母は、肯いた。

それを見たので、横に座っていた妻に言った。

「ここにユダヤ人が、住んでいたのだろうか」

「もちろんよ。この街には、多くのユダヤ人が暮らしていたわ」

そう声を出してから、彼女はこの地方の歴史を話し出した。

その内容に、しばらく耳を傾け続けた。

一時間ほどしてから、私たちは店を出た。曲がりくねった坂道を三〇〇メートル下って行くと、道路の脇に一つの記念碑が目に入った。

「この街には、約四〇〇年以上も前から大勢のユダヤ人が住み、多い時は三〇〇名が暮らし、ナチ時代にも二〇〇名近くが生活していた。その彼らのうち、一九二名が強制収容所へ連行され、生き残った人はわずか一名だけとなってしまった」

それを読み、このような美しい景色の地にも、ナチの傷跡が残っているのだと思うと、溜め息が出た。さらに歩いて行くと、古い石壁で囲まれた墓地が見え出した。

ユダヤ人墓地というのは、一種独特だ。以前、プラハのユダヤ人墓地を訪れた際もそうだったが、ここに入ると厳粛な気持ちにさせられてしまうのである。

どの墓石も、質素な石板一枚の上にヘブライ語とドイツ語が刻まれ、すべてが東を向いて、整然と規則正しく並んでいる。花は飾ってなく、ドイツの墓地のように、散歩するような雰囲気はまったくない。死者の威厳を感じるのだった。祖先を大事にしている民族なのを知るのだった。

私たちは、大きな石板の前に立った。ナチ時代に強制収容所へ連行された人たちが眠っている墓である。その上には、いくつもの小石が並んでいた。ここを訪れたユダヤ人たちが置いていったのだろう。

妻と義母は、しばらくその墓石前でこうべを垂れていた。ナチ政府時代にドイツ人がし

た行為を、自分の心のなかで見つめているかのよう映った。

この墓地に十分ほどいてから、車でテュービンゲンへ戻った。家に帰り、夕食の準備をしていた時のことだった。

妻がジャガイモを剥きながら、キリスト教信仰に関する詩を詠い出すと、義母もにんじゅんを切りながら、娘と声を合わせはじめた。今まで聞いたことのない句だった。二人がリズムをとりながら、いつもより声を高くしての祈りの詩なのである。

三、四分は続いたのだろうか。それが終わると、二人とも、顔を見合わせて微笑んだ。母と子の重なった顔だ。

それを目にして、思った。信仰の篤い二人は、キリスト教の歴史を背景として生きていくのだと。

第十五章 故郷へ

居間のソファでコーヒーを飲みながら、義母が娘に話しかけた。

「黒い森地方で、二週間ほど滞在しようと思っただけだけど、どうかしら？」

「どうしたの、何か用事でもできたの？」

「特別な用はないのだけれど、もう一度、昔暮らした黒い森地方へ行ってみたいくなったわ。あそこは空気もよいし、知人たちも多くいるし、それから」

義母は、珍しくことばを濁した。

「でも、体の具合はどう？ 足は痛くないの？ 一人で大丈夫かしら？」

「滞在するところは、あなたが生まれた村の近くにある民宿にしようかと思っているわ。あそこの主人をよく知っているし、あなたも何度か行ったことがあるでしょ」

「村外れにあつて、裏が森でとても眺めのよいところね。でも」

「平気ですよ」

きつぱりとした声で言った。義母は、もう決心しているようだった。何か考えがあつたことだろうと思つた。

妻は、肯きながら、

「わかつたわ。それで、いつころ、予定しているの？」

と、訊いた。

「今はまだ暑いから、秋になったらと思っているわ」

義母は、自分の望みが叶って、満足そうな表情を浮かべた。

それから三ヶ月してから、義母は息子のエアハルトの車に乗って黒い森へ出かけた。

家のなかには、彼女がいなくなったので、なにか物足りない空気が漂っていた。テーブルにお皿などを並べる役のミヒヤエルは、おばあさんの食器もかならず置き、寂しそうだった。

彼女が黒い森へ行って、一週間経つた時だった。

妻は、体の弱ってきている母のことが気になり、仕事を一日休み、その村を訪れようとした。

「車で一緒にいくよ」

彼女に、そう言うと、

「電車で行くのもいいわ。一時間半で、母が滞在している民宿に着くから」と応えて、ひとりで向った。

妻が家に戻ったのは、その日の夜の十時過ぎだった。ミヒヤエルはすでにベッドで眠っていた。

彼女に暖かい紅茶を入れた。

「お義母さんの様子は、どうだった？」

「元気だったわ。毎日、森の小径を散歩したりしていたわ。わたしが着いたときは、ちょうど昼寝が終わったあとで、今から散歩に出かけようとしているところだったわ」

「それは、よかったね。それで部屋とか食事などは、どうだった？」

「部屋は、二階で少し腰狭い感じがしたわ。でも、木造の昔風の家だったから、母にはよかったみたい。シャワーやトイレも付いていたし、食事も美味しいと言っていたわ」

「二階では、上り下りが大変だろうな」

「それはあんまり苦にならないみたい。家でも階段をゆっくりと上がったたり、下りたりしていたし」

「毎日の散歩以外に、何をしていたのだろう？ 何冊も本を持っていったようだけど」

「宿の主人と話をしたり、他のお客さんと話をしたりしていたわ。昔の知人たちも、訪れていたようだし」

「それはよかったね。お義母さんの年齢で故郷へ行くということは、意味があつてのことだと思ふよ」

「どのような？」

「お義母さんは長い間、黒い森の地で暮らしていたよね。そこは、彼女にとっては過去の歴史が詰まったところ。その地で自分と語ろうとしたのではないだろうか。高齢者にとって、過去の出来事は変わることのない存在なのだろう。それは、記憶のなかでいくらか変化しているだろうが、今も心の奥底で生き続けていると思うよ。それをたしかめるために、お義母さんは故郷へ行ったのでは？ 自分の生きてきた証しを見つめたかったのではないだろうか」

「そういえば、最近、昔のアルバムをよく観ていたわね」

妻はそう言いながら、手提げ鞆から一枚の写真を取り出した。そこには黒い森地方特有の、魚のうろこを重ねたような壁で造られた家が写っていた。

「わたしが子供のころに育った家へ、母と一緒に行ったわ。ほら、あなたの手に持っているフォトに、その家が写っているでしょう。あの周辺は、昔とまったく変わっていないわ。あなたも行ったことがあったわよね」

昔のことを思い出しながら話す彼女の瞳は、輝いていた。

「その周辺を少し散策してから、わたしと母は、当時お手伝いさんだったマーガレットが住む家を訪問し、彼女の作ったケーキとコーヒーを御馳走になって、しばらくの間、話し込んだわ。母は、とってもよろこんでいたわ」

空になった妻のカップに、二杯目の紅茶を注いだ。

彼女が、再び語り出した。

「マーガレットは、当時、私たちの家に毎日来てくれて、姉の世話をよくしてくれていた

わ。母は牧師夫人として毎日忙しかったので、車イスに乗ったアンネのことをなかなか見ていられなかったのよ。母は、いつもマーガレットに感謝していたわ。別れ際、深く彼女にお礼をのべていたし」

「過去の思い出が、明日へと進ませているのではないだろうか」

「そうかもしれないわね」

「お義母さんは、今まで生きてきた出来事、とくに、アンネのことが心の奥に深く残っていて、それを感謝の念で、結んだのではないだろうか」

妻は少しの間黙り続けたあと、肯いた。

再び、話し出した。

「民宿に戻る途中、母と一緒に、昔から続いているレストランで食事をしたわ。子供時代を過ごした地を、再び、母と歩いてよかったわ。でも、ちよつと気になることもあったのよ」

「気になること？」

「話の最中にね、母は時々、わたしの声かけに反応しないことがあったのよ。今までそんなことはなかったのに」

「それは多分、久しぶりに懐かしい地のふるさとに戻ったので、気分が高揚していたからではないか」

「そうならいいのだけど」

母と長年一緒に生活してきた彼女の、「ちよつと気になる」ということばに、少し引っ掛かるものを覚えた。

二週間の滞在を終えた義母は、義兄の車に乗って帰宅した。その彼女に、

「あちらで、何をして過ごしていたのですか」

と訊ねたが、

「毎日、散歩していましたよ」

と答えるだけで、多くを語らなかった。以前の彼女なら、自分で体験したことは、表情豊かになんでも話してくれたのだが、今はそれがなくなってしまった。

高齢になると、短期的な記憶力は低下するので、それをいくらかでも防げればと思い、「散歩中に、知り合いの人に逢いましたか。どのようなところへ、行ったのですか」

と訊ねるのだが、なかなか頭に浮かんでこないようであった。

第十六章 ローソクの炎

義母が黒い森から戻り、三ヶ月が過ぎたある日のことだった。

母が、娘に言った。

「足が少し痛いんだけど、今日はどうしても教会へ行くわ」

「わかったわ」

妻は母の腕を支えながら、家から五分ほどのところに建っている教会へ向った。私とミヒヤエルも一緒だ。

毎年の十一月九日は、義母も妻もかならず教会の礼拝に出席していた。私たちがテュービンゲンに引越した年も、この日、四人で教会に行った。その時、妻が私に語ったことがあった。

「この日は私たちにとって、とくに、母にとっては忘れられない特別の日なのよ。一九三八年十一月九日の夜、ヒットラーのナチ政府は、国内にあるユダヤ教の会堂やユダヤ系の商店や墓地や事務所などを焼き払うように命令を出したわ。それは実行され、数知れぬユダヤ人が逮捕され、家々が焼かれてしまったのよ。その日のことは、『水晶の夜』と呼ばれるわ。ここテュービンゲンでも会堂が焼かれ、何人ものユダヤ系市民が逮捕され、その一人に母の知り合いの人がいて、その人も強制収容所へ送られてしまったのよ。私たちがドイツ人にとって、この日は、決して忘れてはいけない日なのよ」

それを聞いた時、義母は当時の暗い体験を省みながら、また、妻は当時の歴史を批判的に見ながら、二人とも将来に目を向けているのだと思った。だからこそ、このような教会の集いに毎年参加しているのだ。

私たちが教会に着くと、もうすでに五百名ばかりの人たちが、席に着いていた。そのうちの半分以上が、若者たちだった。

ユダヤ人の学生によるフルートの演奏ではじまり、次に旧約聖書の詩編をヘブライ語で皆と一緒に詠い、そのあと、一九三八年十一月九日に起こった生々しい出来事を、当時を知る人たちが語りはじめた。

私たちは、静かにその話しに耳を傾け続けていた。聴くということは、自分と対話をし、学ぶことなのだろうと思った。

厳粛な式も一時間で終わり、教会を出ようとした時だった。

妻は友人とばったり出逢い、その人とおも話をしたい様子だった。そこで、彼女に代わって、自分が義母の腕を支えて家まで帰ることになった。

義母の腕の温もりを感じながら、話しかけた。

「先ほどの話、感慨深いものがありましたね」

「そうですね」

義母は、ゆっくりと足を前に進ませながら言った。その彼女に、先ほどの式典で頭に浮かんだことを話そうとした。

「六百万人ともいわれているユダヤ人抹殺に先立って、精神病の人たちや障がいのある人たち約十万人が殺された歴史についても、さっきの式典のなかで、話してくれてもよかったのに」

義母は急に立ち止まり、前を歩いているミヒヤエルのうしろ姿を見ながら、

「そうですね。ヒデジの言うとおりね」

と言い、さらに続けた。

「わたしは様々な経験をしましたが、体に支障をきたらしていた長女との暮らしは、わたしが生きていくうえに、大切な意味をもたらしてくれましたね」

それを聞いた時、心は震え、義母の温もりが、さらに伝わってきた。自分で意味を見つけないければとの思いになった。

それから、一年が過ぎ、いよいよクリスマスの日となった。義母にとっては、八十六回目だ。

数日前から足に痛みが走っていた彼女が、寂しそうな声で娘に言った。

「残念だけど、教会の礼拝には行けそうもないわ」

「歩けないほど痛いのか？」

「ええ、そうね」

それを聴いた妻が、私を見た。

「では、あなたの車で、教会の入口まで母を乗せていったらどうかしら？」

「うん、それはいい案だ。そうしよう。でも、待てよ、あそこは車両進入禁止だ。許可がないとだめだろう」

「そうね、あなたの車では無理ね」

妻は、残念そうな表情を浮かべた。が、そのあと、声を上げた。

「そうだわ、わたしの事務所に車椅子が一台あるから、それが使えるわ」

「うん、それはいい」

三十分後、車椅子に義母を乗せ、私たち四人は教会へ向った。

昨年のような大雪ではないので、スムーズに行くことができた。

いつもの日曜礼拝だと二百名くらいの出席者だが、今日は千名以上の人たちで、堂内は膨れ上がっていた。

私と妻とミヒヤエルは長椅子に、義母は車椅子に座り、歌を唄い、説教に耳を傾け続けた。

そのクリスマス礼拝が終わり、外に出ると、教会の鐘の音が響き渡りはじめた。それを耳にしながらか、ゆっくりと家へ向かった。

家の前に着くと、妻が車椅子から母を降ろし、彼女の足が痛まないように体を支えながら、木の階段を上った。

居間には、昨日マルクト広場で買った高さ二メートルの樅の木に、手作りの木の星と月、それに、妻が編んだワラの星などがぶら下がっていた。その下には、ドイツや日本から送られてきたプレゼントがいくつも並んでいた。

四人での夕食を済ませてから、その贈り物を開けることになった。何が出てくるのか楽しみで、包みを一つひとつ解く度に、私たちはよるこびの声を上げた。

ミヒヤエルは、おばあさんから童謡のカセットテープと暖かそうな帽子をもらって、ここにこ顔だ。カールからは、美しいテーブルクロスが送られてきた。パートナーができ、高齢者ホームで介護士として元気に働いているとのことが、便箋に書かれてあった。それを読んで、私たちはよろこんだ。

もみの木に立っている七本のキャンドルに、明かりが灯った。

それを見たミヒヤエルが、本棚から賛美歌集を取り出して、私に持ってきた。

義母と妻は歌集なしで唄い、ミヒヤエルは自分なりの唄い方で私たちに合わせて声を出した。四人の声は、教会堂内のように響かなかったが、キャンドルには届くようで、炎が時々、揺れた。

誰彼ともなく歌声が去り、私たちは静かに燃えている炎を眺めるようになった。来年も、義母とこのキャンドルの炎を見つめることができるようにと祈った。妻も同じ思いだろう。義母は何を思いながら、この炎を見つめているのだろうか。自分の子供時代、青春時代、結婚、娘のこと、夫のこと、それに、私たちとの暮らし。その全てが、炎に包まれている

のではないだろうか。彼女の横顔が、それを物語っていた。

冬が去って春の訪れを感じるようになって、ソファーに横たわる日々が多くなってしまった義母だった。

それを目にしていたので、彼女の頭の働きまでも低下しないようにと気をつけていた。とくに、義母と二人で摂る昼食の時間は、私なりに努めた。

できるだけ彼女の好みに合うものを作り、食事中に交わす会話も、昔のことをよく覚えていたので、当時の出来事などを話してもらっていた。ただ、こちらの問いかけには応じるのだが、以前のように自分から話し出すことが少なくなってしまった義母だった。それでも、彼女と一緒に摂る昼食は、窮屈さを感じない、静かな時間なのである。

開け放している窓からは、時々小鳥の鳴く声が聞こえ、二人だけの昼食が済むと、義母はいつもにこやかな顔で、かならず言ってくれるのだ。

「おいしかったわ。ありがとう、ヒデジ」

そのことばを耳にする度に、よろこび、彼女に感謝するのだった。

花が咲きはじめる五月になった。

義母は杖を持つて三日に一度は買物に出かけていたが、それができなくなってしまった。痛風に罹ってしまった、それもかなり重い症状となってしまったからだ。歩くと、足が痛み、部屋内でのベッドとソファアの往復だけとなってしまった。

と同時に、短期的な記憶、たとえば、前日に何をしたのかを忘れてしまうようにもなってしまうた。

そのような彼女を目にしていたので、以前から考えていたことを、実行しようと決心した。

それは、日本の友人たちや知人たちに定期的に送っているチュービンゲン便りを、ドイツ語に翻訳することだった。というのも、義母は毎号印刷されるその便りをかみかみせず手に持って、「またできたのね」とにこにこして私に言い、一頁一頁めくるからだ。日本語で書かれているので、読むことはできないのだが、それを自分の部屋に持っていくのである。

そのような義母の姿を見ていて、今しかないと思い、自分のドイツ語力で翻訳するか、または翻訳をしてくれる人を捜せねばと思っていた。

と、ちょうどその時、チュービンゲン大学の日本文学館に勤めるオットー・プッツさんと知り合いになり、その方に私の望みを話すと、よろこんで翻訳を引き受けてくれることになった。夏目漱石や遠藤周作や大江健三郎などの本を、すでに翻訳している人である。まだ、読書力はそう衰えてない義母だ。ゆっくりと読んでくれるだろう。

第十七章 ダンケシエーン

再び義母の誕生日の五月二十二日となった。八十七歳になった彼女の体調はよくなかった。

たが、来てくれる人たちをよるこんで迎えていた。

その八十七歳の誕生日も終わり、二カ月が過ぎた時だった。

いつものように昼食の支度を終えてから、義母の部屋のドアを何度もノックしたが、返答がない。気になってドアを開けると、ソファアの上で横たわっていた。

「昼食の用意ができました」

「昼食？」

「はい、よく眠っていたようですね。お昼をどこで食べますか。いつものように上でしますか。それとも、今日はお義母さんのこの部屋でしますか」

一カ月前から腫れがひどくなった片足を見ながら訊ねた。

「上へ行きますよ」

義母は、ゆっくりと半身起こしながら答えた。

十分ほどしてから、いつものように二人での昼食となった。

義母は食べはじめた。が、いつもと違い、ナイフとフォークが上手くかみ合わないで、食べ物をお皿からこぼしてしまうのだった。

「どうしたのですか。気分でも悪いのですか」

「そんなことはありませんよ」

何事もないかのように低い声で応え、黙々と食べていた。

しかし、半分ぐらい食べ終わると、わずかに聴き取れる声で、

「今日はもういいですよ」

と、言った、

義母がお皿に盛ったものを残したのは、初めてだ。心配になり、

「大丈夫ですか」

と訊ねると、なにも答えずに椅子から立ち上がり、腫れている足を引きずるようにして自分の部屋へ向った。

そのうしろ姿は、いつもの義母ではない。すぐ、妻の職場に電話をかけた。

「どうもお義母さんの様子が変だ。ナイフとフォークが上手く使えなくて、食べ物をこぼしてしまうのだ。左手が自由に動かないようだ。どうもおかしい」

「そんなこと、今までになかったわね」

「うん。食事も半分しか摂らなかったし、何を訊いても答えないのだ。頭がボーとしているみたいだ」

妻は緊急事態を察したのか、急に一オクターブ高い声を上げた、

「お医者さんの電話番号を知っているでしょう。一刻も早く連絡してほしい。すぐそちらへ駆けつけるわ」

即ホームドクターに電話をかけ、義母の部屋に行った。と、彼女はソファアに横たわっていた。いつもは体全体を包むようにかけてある薄い毛布が、足元に置いたままだった。それを広げて彼女にかけた。嫌な予感が走った。

ドクターは、「すぐそちらに行くから」と言ったが、十五分してもまだ来ない。早く来てくれることを願った。

少しすると、家の前で車の止まる音がした。急いで玄関まで出た。

ドクターは部屋に入るや、黒い鞆から聴診器を取り出して、義母の胸に当てた。

「このようになったのは、いつからですか」

「昼食のときに、おかしいのに気がつきました」

そう答えた時、玄関先で妻の自転車が進む音がした。

息を切らして部屋に入ってきた彼女に、ドクターが、

「これから救急車を呼びます。すぐ入院しなければなりません」

と言うと、妻は母のところへ寄り、強く目を閉じたままの母を見つめた。

娘は母の手を握って、「お母さん、お母さん」と呼び続けていた。

病院に入院して三週間が過ぎた。

義母の容態は日ごとに良くなって、一人でも食事を摂れるようになった。私たちは、このまま快方に向っていくだろうと思った。

その姿見て、私と妻は、一年前に予約していた、スイスの麓の貸山荘に行くかどうか迷ったが、休暇を取ることにした。

毎日、病院に通っていた私たち夫婦に代わって、義兄たち夫婦が病院の母を看ることになった。

病院で四十日間入院したあと、「お母さんを家で看たい」と望む私たち夫婦の願いで、義母は自分の部屋に戻った。

それから、一カ月が過ぎた十月一日の朝、ゲルトルートは仕事にいかねばならず、母のことを心配しながら家を出た。

少しすると、キッチンで朝食の後片付けをしていた私のところに、昨晚から母を看っていたエアハルトが来て、

「ヒデ、これから薬局へ行ってくる。十分で戻るから」と言って、外に出た。

数分して、何か胸騒ぎを覚え、お皿をまだ拭き終わっていなかったが、義母の部屋に行くことにした。

ドアを開けると、彼女は眠っているようにも見えた。安心してそのまま部屋から出ようとした。が、どうも気になった。ベッドに寄った。顔がいつもよりも白い。口元に耳をあてたが、何の音もしない。

「ムッター（お母さん）！」

返答がない。どのくらいが過ぎたのか、わからない。彼女の顔を見続けたあと、手に触れた。いつものように温かい。心のなかで、「ダンケシェーン」とつぶやいた。